槍持ち佐五平の首

佐藤雅美

文春文庫

著者紹介

佐藤雅美（さとう・まさよし）

昭和16（1941）年、兵庫県生まれ。早稲田大学法学部卒業。会社勤務を経て、43年よりフリーに。60年、処女作「大君の通貨」で、第４回新田次郎文学賞受賞。平成６年、「恵比寿屋喜兵衛手控え」で、第110回直木賞を受賞する。主な著書に、「半次捕物控」シリーズ、「物書同心居眠り紋蔵」シリーズ、「八州廻り桑山十兵衛」シリーズ、「縮尻鏡三郎」などがある。

文春文庫

槍持ち佐五平の首

佐藤雅美

文春文庫

槍持ち佐五平の首

佐藤雅美

さ 28 9

文春文庫

552 ＋税

9784167627089

1920193005523

ころは文政の初年、相馬藩の宿割役人が主に先立ち、奥州街道は大田原宿の本陣にて明日の宿泊の確認にやってきた。そこへ会津藩が格式を笠に着ての無理難題。この騒動に巻き込まれた臨時雇いの槍持ち、佐五平の運命が翻弄されていく。表題作を始め、武家社会に生きる男たちの姿を赤裸々に描く時代小説短篇集。解説・島内景二

ISBN4-16-762708-6

C0193 ¥552E

定価（本体552円＋税）

さ 28 9

文春文庫

文春文庫

佐藤雅美の本

八州廻り桑山十兵衛

官僚川路聖謨の生涯

殺された道案内　八州廻り桑山十兵衛

幽斎玄旨

縮尻鏡三郎　上下

大君の通貨　幕末「円ドル」戦争

劇盗二代目日本左衛門　八州廻り桑山十兵衛

槍持ち佐五平の首

カバー・蓬田やすひろ

文春文庫

槍持ち佐五平の首

佐藤雅美

文藝春秋

槍持ち佐五平の首

佐藤雅美

文春文庫

文春文庫

槍持ち佐五平の首

佐藤雅美

文藝春秋

目次

小南市郎兵衛の不覚　7
槍持ち佐五平の首　47
ヨフトホヘル　89
重怨思の祐定（かさなるうらみおもいのすけさだ）　129
身からでた錆（さび）　169
見栄は一日　恥は百日　207
色でしくじりゃ井上様よ　251
何故一言諫メクレザルヤ　293
解説・島内景二　332

2017.02.9.
$20.-

槍持ち佐五平の首

小南市郎兵衛の不覚

一

二月の初の午の日、初午は江戸の人たちにとって楽しい祝祭の一つだった。武家地は屋敷ごとに、町地は一町内に三社も四社も勧請している稲荷社に、幣帛を飾って提灯・行灯に火をともし、五色の幟を所狭しと並べ立て、神前に供物・燈火をささげ、修験・禰宜・神道者を招いて祝詞をあげ、神楽を奏して太鼓を叩いた。

稲荷社の総本山は伏見稲荷だが、伏見、京、大坂で初午を祝うという風習はとくになく、どういうわけか江戸でさかんになり、初午の日は朝から神楽や太鼓の音があちらこちらから聞こえ、老若貴賤はそれぞれ趣向を凝らして招き招かれ、夜も遅くまで酒宴にふけった。

その日、天保三年（一八三二）二月七日の初午の日、小石川御門に近い西丸御小姓組曾我伊予守組羽太求馬正祐の屋敷でも、親類や知人を招いて、昼過ぎから酒宴を開いた。

酒宴は、やがて三味線を掻き鳴らし、太鼓を叩いて歌って踊りと盛りあがり、いつ終わるともなく続いたが、それでも夜が更けるとともに、一人、二人と客は帰り、やがて屋敷はシーンと静まった。

旗本の家来を用人という。武家風に髷を結い、腰に二本を差していたとはいうものの、

巷間では賄用人（経理担当）、渡り用人、味噌擦り用人などと軽侮して呼ばれ、どちらかというと軽んじられた存在だった。

当家、羽太家の用人渡辺権之進も、もとより家来だから酒宴に交じって歌って踊るという立場にはなく、この日は、客を迎えたり送ったりしたあと、頃合いを見計らって自室にさがったのだが、屋敷が静まっても気になることがあって寝床に就けなかった。

当家の主人羽太求馬は、武蔵の国の埼玉、足立、比企郡などに七百石の知行所を与えられていた、かなりの格の旗本だった。ただし、といっていいだろう。六十三歳にもなるというのにいまだに一御小姓組番士。にもかかわらず、なにが楽しいのかいつまでも家督を子供に譲らず、御城勤めを続けているという、ごくごく凡庸な男だった。

子は三人いた。

一人は当年とって四十二歳の半蔵という長男。父が隠居せずに現役で頑張っているので、跡取り息子というのにいまだに部屋住み。だからといってもいい、道楽息子の気分が抜けず、毎日を極楽トンボに遊び暮らしていた。

次男は早世して、次が鬼八郎という二十三歳の三男。これまた部屋住みで、極楽トンボに遊び暮らしていたのは兄とおなじ。

そしていま一人、三十四歳のふさという長女がいた。器量は悪くなかった。十人並以上だった。だが少々おつむが弱かったのと惚れっぽかったのとで、いい男を見るとつい

色目を使い、またすぐに転んだ。

もちろんとうに近所で評判になっていた。歳も歳で、いかず後家になりかけたいまでは、近所の若侍も相手にしない。そこで一季半季で雇った渡り中間や出入りの六尺（駕籠舁き）・手廻り（草履取り、挟み箱持ち）、はては天秤棒を担いだ棒手振りにまで、いい男を見ると色目を使い、ときにお尻を突きだし、それがまたすぐに明るみにでた。

羽太家にとってこれほど恥さらしな話はない。父親の羽太求馬も母親のとみもそのつど激怒し、意見して、ふさもしばらくは男狂いを控えるのだが、昨年秋にも、またまた男狂いをし、求馬はほとほと愛想をつかした。

「勘当を申しつかわす。いずれへなりとも立ち去るがいい」

妻とみを傍らに控えさせて、そう申し渡した。

渡辺権之進は渡り用人ではない。親の代からの用人でふさのことは、かわいかった赤ん坊のころから知っている。なんでこんな娘に育ってしまったのかと、心底哀れにも思っている。

求馬ととみがふさに勘当を申し渡すのを庭先で聞いていて、

「お待ちくださりませ」

と声をかけた。

「なんだ？」

求馬は苦い顔をして聞く。

「おふさ様のことは、わたしがなんとかいたします」

「なんとかする？　どういうことだ？」

求馬は首を傾げる。

「しかるべきお相手を探します」

「手遅れだ。こんなふしだらな娘を嫁に貰ってくれる酔狂者など、江戸中、太鼓を叩いて探しまわったっていない」

「まあ、そうおっしゃらず」

「ならばおぬしが責を負うか」

「負えとおっしゃいますのなら負います。おふさ様が片付くまで、わたしがおふさ様の後見人になってもよろしゅうございます。おふさ様のことで、旦那様や奥方様にご迷惑はおかけしません。ですから勘当だけは思い止まってください」

「そこまで申すのなら、お前に任せよう。勘当は思い止まろう」

「というわけです」

と権之進はふさに向き直っていった。

「ですから、どうか縁付き先が決まるまで、身をお慎みください」

小南市郎兵衛という八十石取りの旗本がいた。百十年ほど前の享保のころ、八代将軍

吉宗の近侍に槍術を指南して御先手与力に取り立てられ、以後、御目見格の御勘定にまで進んだという幸運な男を先祖に持っていて、ただいまは大御番格奥詰。傍ら、先祖伝来の槍術の師範をしていた。

羽太求馬の長男半蔵は小南市郎兵衛の弟子の一人だったことから、渡辺権之進もいつしか市郎兵衛を知った。

市郎兵衛は槍術の腕がたしかだけに、旗本、御家人だけでなく、諸侯の家来をも弟子にとり、顔が広い。また猛々しく槍術を指南しているにもかかわらず、気さくで腰も軽く、なにくれとなく世話を焼くのを厭わない。

〈市郎兵衛様にすがれば、きっとよいお相手をお引き合わせいただけるはず〉

そう考えて権之進は、麹町裏二番丁角にある市郎兵衛の屋敷を訪ね、包み隠さず内情を打ち明けていった。

「どうか、しかるべきお方をお引き合わせくださりませ」

「難しい注文だが」

とはいったものの、市郎兵衛は評判どおりの気さくな男で、

「引き受けた。任せなさい」

と快諾した。初午のこの日は、権之進が勧めて羽太家は市郎兵衛をも招待した。

それはいいのだが、気になるのは酒宴の最中、ふさがちらちら小南市郎兵衛に色目を

使い、市郎兵衛も四十二歳の分別ある男というのに、満更ではない様子でにやにやしていたことだった。そしてついに、酔っ払ったとかで市郎兵衛は供の小者を帰し、炬燵に足を突っ込んでごろ寝をしてしまった。

「おふさ様は？」

座敷を片付けて戻ってきた下女に聞いた。

「おふさ様も飲み疲れたとかで、座敷でごろ寝をしておられます」

下女は答える。

ふさは尻軽女である。市郎兵衛はくだけた気さくな男だ。その二人が色目を使い、使われて、おなじ部屋で雑魚寝をしている……。これが気にならないわけがない。権之進は寝床に就くどころでなく、実のところ目を爛々と輝かせて奥の様子を窺っていた。

「うん？」

遠くで「明かりを」と声がして、

「はい、ただいま」

と下女が寝ぼけ声で答え、下女部屋がぱっと明るくなった。手燭に火を点けたのだ。

〈なんだろう？〉

権之進はそっと廊下にでた。

下女は部屋をでてきて、座敷に向かう。権之進は後をつけた。

消えている行灯に火を点けるのだろう、下女は座敷の障子を開けた。
「うっ」
女が声をあげる。真っ暗で分からなかったのだが、なぜか女が廊下に突っ立っていて、中の様子を偶然覗き見て声をあげたのだ。
権之進は素早く歩を進めて中を覗いた。
下女が行灯に火をともし、炬燵に横並びにすわっている市郎兵衛とふさの姿が行灯の明かりに浮かびあがった。
ずっとそうしていたのではない。二人は寸前までまぐわっていて、慌てて起きあがったという様子が戸惑う二人の表情から明らかで、権之進はかっと頭に血がのぼって詰問した。
「お二方は何をしておられたのです？」
「何をって……」
と市郎兵衛は弁解口調で答える。
「我らはこうやって、夜を明かしていたまで」
「嘘をおっしゃいますな」
権之進はぴしりと撥ねつけ、
「おくわ様」

と廊下に突っ立っていた女に呼びかけた。
羽太求馬の姪で、やはり初午に招かれて泊まっていた二十歳になるくわという未婚の娘だ。
「は、はい」
とくわも戸惑った様子で答える。
「あなたはしかと見留めなさいましたな。お二方が何をなさっていたかを」
「あ、いえ」
未婚の二十歳の娘だ。あからさまには口にできないし、口にするのも憚られる。
「嘘をおっしゃると為になりませんぞ。手燭の明かりに照らされたお二人の姿を見留めなされたから、思わず、うっと声をあげられたのでございましょう」
権之進は追い討ちをかける。
「はあ、それが……」
「はっきりお答えなさい」
権之進の気迫に押されてくわはいった。
「たしかにお二方は怪しげな振る舞いにおよんでおられました」
権之進は念を押した。
「お二方は不義密通しておられたのですな？」

くわはか細い声で答えた。
「そうです」

二

その夜、羽太求馬の三男鬼八郎は尿意をもよおし、酒宴が開かれた座敷を通って廊下へでようとした。
〈おや？〉
誰かの頭らしいものに躓く。鬼八郎は、
「明かりを」
と声をかけた。
折しも羽太求馬の姪くわは、長男半蔵の子の「おしっこ」という声に起こされ、手燭を探していた。鬼八郎の「明かりを」という声がして下女が手燭に火を点けてやってくる。火をもらおうと廊下にでた。
鬼八郎は、「明かりを」と声をかけたあともその場を動かない。市郎兵衛とふさは折り重なったまま身動きもならず、息を殺していた。そこへ下女の足音が近づき、下女は、障子を開け、手燭の明かりに部屋がぱっと明るくなった。二人はびっくりして撥ね起き、

横並びにすわった。
くわはたまたま廊下にいて、二人が折り重なっている姿を目撃、うっと声をあげた。当然のことながら鬼八郎も一部始終を目撃した。
市郎兵衛とふさの不義密通に相違はなかった。
ふさに結婚相手を探して貰いたいと頼んだ男、市郎兵衛が当のふさと不義密通する……。
これほど人を踏み付けにした話はない。
渡辺権之進は怒った。こうなればとことんとっちめ、油を絞り、ぎゃふんといわせて、平身低頭謝らせなければ気がすまない。
「いったい、どういう了見であのようなことをなさいましたのか」
四日後の十一日、麹町裏二番丁まででかけていって、権之進は市郎兵衛にこう詰め寄った。
だが市郎兵衛は、
「そのようなこと、身に覚えがない」
と手の平を返してとぼける。
「なにをおっしゃいます。おくわ様がたしかに証言されたではありませんか」
あまりの空とぼけように、権之進は真っ赤になって詰め寄る。

「なにを寝ぼけたことを申す」
市郎兵衛は柳に風と受け流して、
「くわ殿はあのとき、お二方はなにやら話をなさっておられましたと申されただけだ」
「とぼけられるのですか」
「とぼけるもなにも、そのような事実はなかったと申しておるのだ」
「よくもまあ、白々しい」
「聞くがそのほう、一体いかなる立場で、ありもしない無礼を申しにまいった」
「ありもしない無礼……と申されますか」
「そうではないか。それとも求馬殿の指図によるのか。まさかそのようなことはあるまい」
「ふさ殿が勘当されようとしたのを主人にお詫びして、わたしが後見人となって縁付き先を探すことになったというのは小南様にもお話ししたとおり。この件に関してはすべてを任されております。誰に断りもいりません」
「いやいや、そうではあるまい。ありもしない無礼を申して、それがしからいくらかせしめようとしているのであろう」
「開き直られるだけならまだしも、あまりといえばあまりのお言葉。そんなことをおっしゃられるのなら、こちらにも覚悟がありますぞ」

「覚悟？」
「そうです」
「結構、なんなりとやってもらおう」
こんな遣り取りをしていたところへ、
「一体どうしたのです？」
羽太求馬の長男半蔵が駆けつけてきた。
「羽太求馬様の用人渡辺権之進というお方がお会いしたいと申されております」と小者が取り次いだとき、市郎兵衛はすぐさま小者を羽太求馬の屋敷に走らせておいたのだ。
「用人殿が無体なことを申されるので困り果てておるのです」
市郎兵衛は顔をしかめていった。
「いうに事欠いて無体なこととは……」
権之進は噛みつかんばかりに食ってかかる。
「お前はとにかく帰れ」
半蔵は権之進にいう。主人の命だ。権之進はしぶしぶ屋敷を後にした。
市郎兵衛はあらたまる。
「用人殿が無体を申されぬよう、お諭しくだされ」
半蔵もむろん当夜、市郎兵衛がしでかしたことを、聞いて知っている。いささかの嫌

悪も感じている。とぼけて聞いた。

「権之進がどんな無体を申したのですか？」

市郎兵衛の妻ますは離れて様子を窺っていて、権之進が帰るといつしか背後に迫り、聞き耳を立てている。とても口にはできない。しかし口にしなければ筋道立てて話ができない。渋々いった。

「それがしがふさ殿と不義密通いたしたと」

半蔵は畳みかける。

「事実ではござらぬのか？」

うーん、と腹の中で唸って、市郎兵衛はいった。

「身に覚えのないこと。ただ酒興のうえで誤解を招くようなことはあったかも知れぬゆえ、その儀については平にお詫びいたす。父御の求馬殿ともども、用人殿を宥めてはくださるまいか」

身勝手な御託をと半蔵はかちんときたが、

「権之進はなにぶん強情者ゆえ、それがしや父上が宥めたくらいで、聞き入れるものかどうか」

とまあまあ穏やかにいった。

市郎兵衛の妻ますにもだいたいの事情は飲み込めたが、それでも悋気を押さえて、気丈に横から口を添えた。

「なにとぞ、よろしくお願いします」

三

渡辺権之進はふさの後見人である。ふさのことについては、父羽太求馬、母とみ、長兄半蔵に相談することなく、独断で行動できる。

翌日、またまた小南市郎兵衛の屋敷に出向いて、本人に掛け合った。市郎兵衛は昨日とおなじように、開き直るだけでなく、強請りたかり扱いする。

かくなるうえは実力行使あるのみ。

四日後の二月十六日、嫌がるふさをむりやり駕籠に乗せて市郎兵衛の屋敷に向かい、小南市郎兵衛にいった。

「おふさ様にいいお相手をと小南様にお願いし、よかろうと小南様は快諾されました。そのうえでおふさ様にお手を付けられたということは、おふさ様をお迎えする気になられてのことと考えざるを得ません。おふさ様を預けてまいります。できるだけ早く祝言をお挙げください」

思いもよらぬ掛け合いで、

「そんな馬鹿な」

と当惑しながらも、市郎兵衛は虚勢を張っていった。

「正気の沙汰の掛け合いとは思えぬ。またこのような掛け合い、求馬殿が許されるはずもない。大事にならぬうち、早々に引き取れ」

権之進は狐のように尖がった顔を、なお尖がらせていう。

「この前もお話ししたとおりです。この件に関して、わたしはすべて任されておるのです」

「とにかく身に覚えのないこと」

「まだ、そのようなことを申されまするか」

市郎兵衛の妻ますは庭先での掛け合いに最初から同席している。権之進は、妻ますにもしっかり聞いておいてもらわなければといわんばかりに声高にいう。

「小南様がおふさ様にお会いなされたのは初午のあの日がはじめて。意外や意外、おふさ様が器量よしなのににんまりされ、酒に酔ったとみせかけてごろりと横になられ、おふさ様を口説かれて不埒な振る舞いにおよばれた。身に覚えがないとはあまりにも白々しい」

ふさが色目を使って仕掛けたことであり、またふさがすんなり自室に戻っていれば、市郎兵衛にその気があっても何事もなかった。羽太家側にも落ち度はある。だが、もとより据え膳を食った市郎兵衛にも落ち度はある。なにを！　と居丈高になるわけにもいかず、しどろもどろにいった。

「まったくもって身に覚えがないのだ」

そして助けをもとめるようにふさにいった。

「のう、ふさ殿」

ふさはおつむが弱い。〝ええ、なにもございませんでした〟といえば何事もなくすむものを、黙してうつむく。そこへ権之進が詰問の追い討ちをかける。

「不義密通を仕掛けられ、仕方なく応じたのでございましょう。おふさ様。さようでございますね」

ふさはこくりと頷く。どうだ、とばかりに権之進は勝ち誇っていう。

「あの日、主人姪御のおくわ様がいったことをよもやお忘れではありますまい。おくわ様はこう申されました。たしかにお二方は怪しげな振る舞いにおよんでおられました」

事実だけにこうなるともう弁解のしようがない。市郎兵衛が黙していると、

「とにかくおふさ様をお預けしておきます」

「しかし」

と妻ますを振り返り、

「家内の手前や世間体もあることだし……」

「分別、思慮あってあのような仕儀におよばれたのでございましょう。覚悟のうえのことではなかったのですか」

「といわれても」

「わたしはこれで失礼します」

権之進はそういうと、駕籠舁きを促し、すたすた屋敷を後にした。

四

小南市郎兵衛はとりあえずふさを屋敷にあげておいて、妻ますの甥、小普請組の野村図書を頼った。

「身に覚えがなく、もちろん事実でもないのに……」

あくまでも冤罪なのだと事情を説明して、図書にいった。

「渡辺権之進なる用人が羽太殿の娘御ふさ殿を連れてきて、押しつけて帰ってしまった。外聞もあり、はなはだ当惑、迷惑している。どうか羽太殿に、ふさ殿を引き取ってもらうよう、掛け合ってもらいたい」

この時代はなにか事があると、厄介なことでも、親族、親戚が親身になって面倒をみるのが慣習になっていた。図書としては断れない。頼まれたとおりに羽太家を訪ね、半

蔵にその旨を伝えた。

権之進がふさを市郎兵衛に預けるという強硬手段をとるなど、思いもつかない。半蔵はびっくりして、

「相違ないか」

と権之進に糺した。

「はい」

権之進ははっきり答える。

「いくらなんでもそれはやりすぎだ」

半蔵は顔をしかめていう。

「あの人はあくまでもとぼけられる。ですから、なんとしてでも懲らしめなければならないのです」

「そうはいうが、このこと、世間に聞こえるとまずい」

「なにをおっしゃるのです。世間に聞こえるようにやっているのではないですか」

「とにかく迎えにいってくる」

「およしなさいませ」

と権之進が引き留めるのを振り切るように、半蔵は市郎兵衛の屋敷に向かった。

そのころたまたま、市郎兵衛の弟子の一人で、小十人頭の小沢勘兵衛が市郎兵衛の屋

敷に立ち寄った。

ふさを預けられて、市郎兵衛や妻ますはうろたえている。

「一体、なにがあったのです？」

と聞くと、

「実は……」

と、もちろん自身が不埒な振る舞いにおよんだというのはとぼけ、妻ますの甥、野村図書に話したように、身に覚えはなく、もちろん事実でもないのに無体なことを申しかけられ、外聞もあり、はなはだ当惑、迷惑していると同情をもとめるようにいった。

小沢勘兵衛は羽太半蔵とは相弟子で、羽太家のことはあらまし知っている。ふさが尻軽女であることをもだ。

「そんな無体な法があるものか」

怒って、ふさに向かい、

「そなたもそなただ。用人のいいなりになってやってきて居座ろうなど不届き至極。これから送り届ける。ついてこられよ」

といって先に立ち、ふさを同道して羽太家に向かった。半蔵が着く前のことで、半蔵とは行き違いになって、小石川御門近くの羽太求馬の屋敷に着いた。

「それがしが当家の用人渡辺権之進でございます」

顔見知りの権之進が出迎えると、小沢勘兵衛は一喝した。

「用人のでる幕ではない。主人の羽太求馬殿か、さもなければ羽太半蔵殿に小沢勘兵衛がまいったと申しつたえよ」

「あいにく主人羽太求馬は出仕中で、半蔵は小南市郎兵衛様の屋敷に向かいました」

「だったら致し方ない。そのほうにふさ殿を引き渡す。受け取れ」

「受け取れません」

「聞けば、そのほうが小南殿に無理難題を吹っかけてのことだとか」

「なにをおっしゃいます」

権之進はいきりたつ。

「そうではないか。ふさ殿が身持ちがよくないというのはかねて人の知るところ。たとえ小南殿となにかがあったとしても、小南殿は承知のとおり妻帯者。尻を小南殿に持っていくのは筋違いだ」

「ではないのです」

と権之進はいって、

「小南様はおふさ様の縁談を取り持つと約束をされたのです。なのにおふさ様と不義密通におよばれた。ありえないことで、とにかく責を負っていただかなければならないのです」

「用人の分際で」
と勘兵衛は顳顬をひくつかせた。
「いつまでも聞き分けのないことを申しておると捨ておかぬ。事によっては……」
と腰を落として刀の柄に手をかけた。
権之進はさすがにびっくりしていった。
「ひ、引き取ります」
勘兵衛は諭すようにいった。
「これ以上難題を持ちかけるでないぞ」
権之進は無視して横を向いた。
「聞いておるのか」
勘兵衛が威嚇し、権之進はしぶしぶ答えた。
「分かりました」
勘兵衛の威嚇には屈したが、盗っ人猛々しいとはこのこと。逃げようたってそうはいかない。こう権之進が腸を煮え繰り返していたところへ、行き違いになった半蔵が帰ってきた。
権之進は半蔵をそそのかすように、引き取った経緯を説明していった。
「このままにしておきますと、すべては何事もなかったことにされ、こっちは赤っ恥を

掻いたままということになります」
「たしかに」
と半蔵は乗せられて聞く。
「なにかいい思案はあるのか」
「ありますとも」
権之進はつぎなる手段を思いついていた。
市郎兵衛の屋敷の目と鼻の先に、羽太家の親戚筋にあたる横地三郎兵衛という旗本が住んでいた。
「横地三郎兵衛様にお預けするのです」
預けは一種の刑罰だが、私の制裁にも使われる。
「市郎兵衛に当てつけるわけだな」
「そうです」
「それは名案」
半蔵は同意し、権之進はまたもふさを引きずるように、横地三郎兵衛の屋敷に同道して預けた。
横地家と小南家はおなじ裏二番丁通りにあって十軒と離れていない。横地三郎兵衛は、なぜふさを預かることになったのかの事情をすぐに知った。

羽太家と小南家の痴話喧嘩のような争いに巻き込まれるのは真っ平ご免と、一日預かっただけでふさを送り返した。

五

羽太半蔵は当初、権之進に引きずられていた。いまや権之進と同様、小南市郎兵衛憎しに凝り固まった。市郎兵衛をへこまさねば気がすまなくなった。

「なにか、いい思案はないか」

権之進を呼んでいった。

「こういうのはどうでしょう」

待ってましたとばかりに権之進はいう。

権之進は、ふさが横地三郎兵衛から送り返されてから、またも思案を重ねた。

「おふさ様を比丘尼にして、髪を市郎兵衛に届けるのです。そうすれば市郎兵衛も今度こそは恐れ入り、平身低頭して詫びを入れてくるはず。そうだ、髪は市郎兵衛の奥方に直接届けるというのはどうです。そうすれば奥方は呆れ果て、離縁を申しでるかもしれず、離縁となれば、市郎兵衛におふさ様をお迎えいただきたいと迫ることができる」

「うむ」

半蔵はまたしても名案と思った。

求馬、とみの両親を説得、嫌がるふさの頭を剃った。そしてみずからふさの髪を手に市郎兵衛の屋敷にでかけ、妻ますに、手紙を添えて押しつけた。

ますは仰天した。ふさの髪など受け取る謂れはない。

「馬鹿もほどになされませ」

と返事を添えて、髪を送り返した。

恐れ入って平身低頭して詫びを入れてくるどころではない。半蔵と権之進はともに怒髪天を衝いた。

「されば、こういたしましょう」

権之進はまたも思いついた思案を半蔵の耳に入れた。

「本来なら、市郎兵衛の不埒な振る舞いを書状にしたため、市郎兵衛の御支配に送りつけてやるところです。ですがそうするとなにやかやと詮議されて難しくなり、こちらもとばっちりを被る。そこで、〝御支配に差しあげたいのですが、御支配を存じませんので〟といって、書状を親戚に突きつけるのです。親戚もよもや黙ってはいられますまい」

「それは名案」

またしても半蔵はそう思った。

「して、親戚の誰に？」
「奥儒者の成嶋邦之丞様。たしか市郎兵衛の先代が成嶋家から後妻を迎えられていたはず。おなじ奥勤めだからなお好都合というものではないでしょうか」
「よくぞ気がついた」
奥儒者という職掌柄もそうだが、成嶋邦之丞司直は堅物で知られていて、けっして放ってはおかないという計算もあった。
書状は、訴状といってもいいものだが、これもあらましを権之進が練ることになった。
「恐れ乍ら書状を以て願いあげ奉り候。今年の二月七日、初午の日に、大御番格奥詰小南市郎兵衛殿を酒宴にお招き致し候砌、小南殿は酒を過ごされたとかで、ごろ寝をいたされ……」
と書きはじめたのだが、まさかふさも横でごろ寝をしたとは書けず、
「夜分に紛れて奥に忍び入り、羽太求馬娘ふさを強淫（強姦）致し……」
と粉飾し、
「小十人頭小沢勘兵衛殿は御門弟衆ともども、刀を振りまわしてふさを脅しつけ……」
事実ではないのに、勘兵衛への意趣返しついでにそう認め、
「何卒、厳正公平に御取り調べの上、小南殿に然るべき御処置を仰せ付けくださりますよう、願いあげ奉ります」

と結んだ。
これを半蔵は清書して懐に、下谷練塀小路の成嶋邦之丞の屋敷に向かった。事件から十三日後の二月二十日のことで、半蔵はあらましを述べていった。
「当方としてもできることなら穏便にすませる所存でござった。されど小南殿は知らぬ存ぜぬと突っ張られる。なにやら当方がいいがかりをつけているといわんばかりにでござる。このままに捨ておいては当方の面子が立ちもうさぬ。そこで持参している書状を、小南市郎兵衛殿の御支配にあげ、御支配にしかるべくご処置いただこうと考えるにいたりもうした。されどあいにく御支配がどなたか存じませぬ。そこでおなじ奥勤めであり、親戚でもある貴殿を頼って、貴殿より御支配に届けていただこうとかく持参つかまつった次第でござる。よろしくお取り計らいくだされ」
半蔵は書状を「御支配に」といった。支配に届けると、〝評定所もの〟になる。
寺社、町、勘定の三奉行に、大目付、目付各一人、計五人が任命され、協議して審議し、裁談、裁許を申しつけるのを〝五手掛り〟といい、評定所ものになるという。
評定所ものになると容赦はない。不始末のあった旗本や御家人に切腹を仰せつけられるのはきわめて稀になったが、諸侯への永の預けや改易、遠島、重追放はしばしば申し付けられた。強淫が事実なら、合意のうえの密通であっても、永の預け、もしくは改易は避けられない。

いずれにしろ放ってはおけない。

門人の山崎又蔵組御中間金田故十郎を呼んだ。

中間というとあちらの屋敷こちらの屋敷と渡り歩く渡り者が多いが、幕府の御中間はわずか十五俵一人扶持とはいえ、親から子、子から孫へと家督を引き継ぐことのできる譜代席である。御徒などのように一代限りの御抱え席ではない。軽い者ではない。

金田故十郎は市郎兵衛の妻ますの甥野村図書とともに、市郎兵衛と羽太半蔵の間を行き来した。権之進は半蔵の軍師という立場だ。あれこれ入れ知恵した。

結果、こう話がまとまった。

「小南市郎兵衛は、ふさ縁付きの手当金として二十四両を支払う」

結局は金だったのだが、金田故十郎が、市郎兵衛から託された金子二十四両を持参し、互いに異存はない旨の書面を取り交わし、二十四両は半蔵が懐に入れた。

権之進はしつこい。そこで、さらにこう粘った。

「もしおふさ様が懐妊していたら、出産入用金三両をあらためてお支払いいただきたい」

これは、密通を事実として認める無条件降伏といっていい条件だ。

「そればかりは勘弁してもらいたい」

と市郎兵衛は金田故十郎を通じていう。

「聞き入れていただけなければ、すべてご破算にします」

権之進は突っ張る。

やむなく市郎兵衛は飲んだ。槍術師範として名も高く、大勢の弟子を持つ小南市郎兵衛は、一介の旗本用人渡辺権之進の前になす術もなく敗れた。

二月も末のことで、しかしさすがにこのころになると、騒ぎが世間で取り沙汰されるようになった。婿を世話しようと約束した者が、花嫁になる女と密通したという特異な事件で、解決まで揉めに揉めた、となれば、関心を持つ者も少なくなく、一部で、面白おかしくひそひそ語られはじめた。

「いかがなものかと世間で取り沙汰しておりもうす」

組頭曾我伊予守が羽太求馬を招いて、いった。

「それゆえ、しばらくお慎みありたい」

羽太求馬は、伜半蔵と渡辺権之進があれこれ画策して、小南市郎兵衛から二十四両をふんだくっているのを知らなかった。二人を呼んで糺した。

「相違ございません」

半蔵は答える。

「それではまるで市井無頼の強請りたかりとおなじではないか。二十四両は、即刻、お返しもうせ。また懐妊の節は三両を受け取るという条件も白紙に戻せ」

せっかく二十四両をせしめたのにと残念でならないが、親には逆らえない。半蔵は二十四両を返し、三両の件も白紙に戻すと通告した。

六

御目付は幕府の組織機構における特異な役職である。

いわゆる〝十人目付〟といって定員は十人。役当りと称して、座敷番、供番、評定所番、名代番、学問所および医学館廻り、米廩および囚獄廻り、勘定奉行役宅立会、諸普請出来栄見分などを順に勤めるが一切発言しない。

評定所ものの五手掛りなど以外は、〝立会〟と称してただ立ち会っているだけだ。そして非や曲があればその場で糺すなり、あるいは上役に報告する。

配下に御徒目付、御小人目付を有していたが、彼らもまた同様だ。

アメリカの初代外交代表、総領事のタウンゼンド・ハリスが下田に上陸して、下田奉行以下の日本側と話し合ったとき、物いわない御徒目付や御小人目付がいつも同席するのが不審でならず、江戸から送られてきているスパイではないかと疑い、

「一体、あなた方は何者なのか」

と激怒して問い詰めたことがある。たしかに外国人ならずとも、現代人にも理解しがたい職分の御役であった。

とはいえ御目付は、たいそうに権威があり、閣僚といっていい老中に非曲があった場合、将軍に直接言上する権利まで与えられていた。また旗本が出世していくには、例外はあるが、多くが歴任しておかなければならない役職でもあった。

その御役、御目付に戸塚備前守なる男がいた。サラリーマンでも、役人でもおなじだ。出世を目指す者は人目につく仕事をして、業績をあげたがる。戸塚備前守もそんな一人で、小南市郎兵衛の一件を聞きつけ、配下の御徒目付や御小人目付を使って、一件を調べあげた。

密通一件も恥さらしだが、最後は強請りたかりまがいのことまでやっている。これを評定所ものにして五手掛りで調べあげれば、綱紀粛正の一環にもなり、事件にした自分の手柄にもなる。

戸塚備前守はそう考え、竜ノ口の役宅に老中首座で実力者の水野出羽守を訪ね、内容を詳しく語っていった。

「不届き至極ゆえ、五手掛りで糺明されたい。さようお取り計らいいただきたい」

水野出羽守は大手柄を三つ立てていた。一つは、貨幣の改鋳をおこなって幕府の財政を大いに潤したこと。また一つは、将軍に太政大臣、将軍の父に准大臣のそれぞれ官職、将軍の子に従一位の位階を京からいただくのに大いに働いたこと。そしていま一つは、

うようよいる将軍の伜や娘を諸侯の養子や花嫁に片付けたことだ。

以上の大手柄によって将軍の信頼が厚く、それを笠に着て賄賂政治をはびこらせたと、巷には評判の悪い政治家だったが、柔軟で懐の深い、世情をよく知る、経済にも明るい政治家だった。小南市郎兵衛の一件ももちろん耳にしていて、戸塚備前守を窘めるようにいった。

「当事者どうしが内済したと聞いておる。あれこれほじくり返すこともあるまい。捨ておくのが上分別というものでござろう」

「そうですか」

といって引きさがったものの、戸塚備前守は面白くない。

せっかくの出世の糸口がふいになる。だけでなく、このまま捨てておいたのでは、おめおめ実力者に屈したことになる。卑怯者になる。ここは一歩も引きさがれない。こう意地を張った。

御目付は若年寄の支配を受けており、若年寄といえばこのころ、林肥後守という、水野出羽守とおなじ将軍のお気に入りがいた。本知四千石の、御用御側とも御側申次ともいわれている将軍の側近だったのが、漸次加増されて万石となり、つまり大名になり、若年寄に累進していたという男だ。

水野出羽守にすげなくされて、戸塚備前守は林肥後守を頼った。

「それは捨ておけぬ」

林肥後守は水野出羽守と違って、こう反応した。

「ならば」

と備前守は膝を進める。

「ぜひ、一件を取りあげ、ご糾明ありたい」

この時期、水野出羽守は晩年でやや老衰の気味があり、のちに天保の改革をおこなった出羽守の同族、遠州浜松の水野越中守と、石州浜田の松平周防守がつぎの実力者の座を虎視眈々と狙っていたのだが、二人の先輩に相州小田原の大久保加賀守という老中がいた。

円満温厚な人柄で、それだけに線が細く、いま一つ頼りない面もあったのだが、だからこそ、

「加賀守殿を頼れば角もたつまい。それがしも口添えしておく」

と林肥後守はいった。

大久保加賀守は戸塚備前守と水野出羽守との経緯を知らない。将軍の覚えめでたい林肥後守から口添えがあって、戸塚備前守の進言に答えた。

「それがしに異存はござらぬ。同列に諮ってみることにいたそう」

加賀守は御用部屋で、同列、老中の閣議に持ちだした。

「御目付戸塚備前守殿より、しかじかの案件が持ちだされもうした。聞けばもっとも。御呼出御吟味があってしかるべしと存ずる。いかがでござろう」

水野出羽守にはぴんときた。戸塚備前守が林肥後守を頼ってのことであろうと。だが出羽守は大人だ。いちいちそんなことで目くじらを立てない。

「ごもっとも」

と同列が賛同するのに、あえて異をとなえなかった。

一件は御呼出御吟味、いわゆる評定所ものとなり、羽太求馬、同半蔵、小南市郎兵衛、渡辺権之進が、一通り尋の上揚屋入り、三男鬼八郎とふさが、一通り尋の上同道人に預け返す、となった。

事件発生から百十数日後の六月一日のことである。

七

五手掛りから大目付と寺社奉行が抜け、町奉行、勘定奉行、御目付の三人で簡略に審理するのを〝三手掛り〟といった。一件は三手掛りで審理されることになった。

町奉行は筒井伊賀守、勘定奉行は土方出雲守、御目付は堀小四郎で、彼らは、小伝馬町の牢の揚屋に入れられている羽太求馬ら四人と関係者を随時呼びだして吟味をはじめた。

公事三年という。審理はいつの世も長引く。一件落着したのは閏十一月の二日で、関係者は以下のとおりに処罰を受けた。

まず羽太求馬――。

「畢竟家来に見掠められ候始末未熟の至り」

家来渡辺権之進にいいように振りまわされたのが未熟の至りだというのだ。

「そのうえ家中不取締にて、伜ども身持ち宜しからずをも、その分に差しおき候段、不埒の至り」

以上が罪状で、

「これに依って御番召し放たれ」

西丸御小姓組番士を免職され、

「小普請入り、閉門を仰せつくるものなり」

惣領羽太半蔵――。

「（二十四両を受け取るなど）卑怯なる致し方、ことに漁猟を好み、弟鬼八郎ともども不束なる体にて網を打ち候段」

半蔵は弟鬼八郎とともに漁師同然の格好をして隅田川とか綾瀬川辺りまで押しだし、網を打っていた。四十を過ぎても部屋住みだから、暇を持て余してのことでもある。

「かたがた以て御旗本の伜に不似合いの義、不届きの至りにつき、これに依って改易を仰せつくるものなり」

改易は所領や家禄、屋敷を没収することだが、半蔵は家督を継いでいない。跡取りの資格を失うだけで、羽太家は御家断絶にはならなかった。それがまあ幸いといえばいえた。

小南市郎兵衛――。

「勤柄身分不似合いなる致し方」

奥詰という勤め柄からいっても、旗本という身分からいっても、しでかしたことは不似合いだという。たしかにそうだ。だから、

「不行届不埒の至りに候。これによって御奉公召し放たれ、小普請入り差扣仰せつくるものなり」

御役御免ということでは羽太求馬とおなじだが、羽太求馬の閉門に対して、こちらは差扣ですんでいる。事件を引き起こした当事者とはいえ、その後はずっと受け身で押しまくられ、被害者的立場に終始したというのを考慮されたのだろう。

羽太求馬娘ふさ――。

「畢竟そのほう不身持ちより事起こり、親兄弟どもまで御詮議を受け候次第に相成り候段」

たしかにすべてはふさの不身持ちから起こったことである。

「御旗本の娘の身分に不似合いの儀、不埒の至り、これに依って押込を仰せつくるものなり」

〝押込〟だからこれも罰としては相当きつい。

羽太求馬三男鬼八郎――。

鬼八郎は何もしていない。だが、やはり漁猟と網打ちを咎められて〝押込〟。側杖を食ったようなものだが、兄半蔵が改易だから、このあと家督を継ぐことができる。鬼八郎当人にとっては災い転じて福となった形である。

側杖を食ったということでは、羽太求馬の妻とみもそうで〝押込〟。この一家は閉門が一人、改易が一人、押込が三人とさんざんだった。

そのほか関係者はそれぞれ〝叱り〟とか〝差扣〟を申しつけられているのだが、当人にとって納得がいきかねたのが、羽太求馬の姪くわと、小南市郎兵衛の妻ますだ。

くわは、小南市郎兵衛とふさの密通現場を目撃したとき、渡辺権之進に厳しく問い詰められて、「たしかにお二方は怪しげな振る舞いにおよんでおられました」と答えた。さらに渡辺権之進から「不義密通しておられたのですな？」と念を押されて、「そうです」といった。これが、

「叔母（ふさ）に対して不実の致し方、不埒の至りに候」

ということで〝押込〟。長幼の序を重んじる身分社会ならではの罰といえよう。

小南市郎兵衛の妻ますは、半蔵が書状を添えてふさの髪の毛を送りつけたとき、「馬鹿もほどほどになされませ」と返書を添えて髪の毛を突き返した。それが、

「不束なる返書相添え、差し戻し候ゆえ、右（渡辺）権之進儀いよいよ憤り」

事件はさらに進展してしまったから、かれこれ不行届で、

「これに依って叱り置くものなり」

とされた。髪の毛など送り届けられれば、かっとなって文句の一つもつけようというものだが、それが咎められた。

さて問題の渡辺権之進――。

多くの者が側杖を食ったり、とばっちりを被ったりしたのだが、渡辺権之進は騒動の火付け役でかつ主役である。調べは時間をかけて綿密におこなわれ、それだけに申し渡しの条文も論旨が明快なのだが、結論はこうだ。

「私欲に拘わり候儀はこれなく候とも」

私欲でやったことではないが、

「（小南）市郎兵衛は身分柄の儀」

小南市郎兵衛は旗本という身分である。だから、

「掛け合うべく筋は主人へ申し聞き、指図受くべくところ」

掛け合うとすれば、主人羽太求馬に相談して指図を受けなければならないのに、

「一己の了簡を以て万事取り計らい」

独断ですべてを取り計らい、

「ことに御役人取り計らい筋等容易ならず儀を取り繕い、認め取り」

渡辺権之進が羽太半蔵にすすめて、小南市郎兵衛の御支配へ差しだされたいといって、奥儒者成嶋邦之丞に書状を渡したことをいう。

「主人をも蔑に致し候仕方、主人ども軽からず御疑いを受け候次第に相成り候段」

主人羽太求馬らをないがしろにしたやり方が、主人どもがいろいろ取り調べを受ける結果を招いてしまい、

「武家方用役を相勤め候身分にて右始末不届きにつき」

用人の身分で右のような始末はまったくもって不届きだから、

「遠島これを申しつくる」

遠島は極刑といっていい。小南市郎兵衛の対応が悪いとつまらぬ意地を張り、とことん相手を押し詰めた結果、遠島となった。

遠島は船が仕立てられるまで、小伝馬町の牢で待機させられる。牢で船が仕立てられるのを待ちながら、渡辺権之進は、

〈思い起こせばなぜあんなに意地を張ったのだろう〉

と我ながら不思議な思いで振り返ったのだが、むろん御目付の戸塚備前守が意地を張り、水野出羽守に盾を突いて、強引に一件を評定所もの、御呼出御吟味にしてしまったせいだというのにまでは、当然のことながら思いがおよばなかった。

世の中自分の知らぬところでなにがおこなわれているか、予測もつかないということの一つだが、戸塚備前守は一件を評定所ものにした功を称されて、早々と六月二十八日に大坂町奉行に栄転した。

大坂町奉行は、そこから直接、もしくは小普請奉行なり普請奉行を経て勘定奉行か町奉行へ栄転するという役職で、前途洋々かに思われた。だが、所詮(しょせん)はつまらぬことを暴き立てて立身しようなどという卑しい心根(こころね)の持ち主だからお里が知れ、二年後の天保五年七月八日、江戸に呼び戻されて西丸留守居という、引退間際の老人が弁当を遣うためにだけ登城するといわれている閑職に左遷された。

槍持ち佐五平の首

一

江戸に近い大名は半年交代だが、まあだいたいが一年交代の参勤出府・御暇帰国の大名旅行は、殿様を頭に戴く団体が数多の荷物を携行して大移動するから、それはもうたいそう下準備に手間暇がかかった。

例年三月から四月にかけての決まり切ったことだが、それでも事前にやっておかなければならないことが多々あり、道中筋にまず先触状というものを送らなければならなかった。御暇帰国のときは江戸の大伝馬町や南伝馬町にある伝馬役所に届けて伝馬役所から、参勤出府のときは国許の伝馬役から、道中筋の問屋場に、何日の何時にそちらを通過する、人数は何人、荷物はこれこれ、だから人足を何人、馬を何匹、用意しておいてもらいたい、泊まる場合はさらに宿の手配もしてもらいたいと、宿継ぎで送る要望書が先触状である。

宿場によっては、他の大名、幕府の公用の役人、公家などとかちあったり、あるいは込み合ったりして、要望に応じかねますと返答を寄越す場合もある。そのようなときは通過する時間や泊まる宿場を変更した追触状というものを送り、事によると追触状を三度、四度と送らなければならないことがあり、万端段取りをととのえて、御道割（旅

日程）を決定した。しかもなおそのうえで、先触状と追触状どおりに段取りがととのっているかどうかを確認するため、宿割役人が大名行列より一日早く先行した。

ころは文政（一八一八～一八三〇）の初年――。宿割役人を務めて十数年になる宿割巧者の、陸奥相馬、相馬長門守益胤の家来絹川弥三右衛門は、この年もまた本隊より一日早く、外桜田の上屋敷を出発した。

もちろん一人ではない。宿場、宿場の者に、相馬家の宿割役人という威厳を見せつけなければならない。侍、若党、槍持ち、挟み箱持ち、草履取り、小者、馬の口取り各一人と、総勢七人に馬も引き連れての、それなりにものものしい行列を仕立ててのことだ。

陸奥相馬は江戸から水戸、平を経て陸前岩沼にいたる、陸前浜街道とも、単に浜街道ともいわれている街道筋のずっと北方に位置する。だが浜街道の宿場は、宿場として整備されておらず、荷物の多い団体の大名旅行には適していない。それゆえ、御暇帰国には五街道の一つ奥州街道をとり、福島の宿から逸れ、阿武隈の高地を越えて相馬へ、参勤出府はその逆という道順をとった。

いつものことで、絹川弥三右衛門はそこが奥州街道のはじまりの千住の宿から、草加、越ヶ谷と足早に歩を進めていった。

殿相馬長門守の泊まりは順に粕壁（春日部）、古河、宇都宮となっている。絹川弥三右衛門も粕壁、古河、宇都宮と一日ずつ早く泊まって、その日、朝早くに宇都宮を発っ

た。

奥州街道は宇都宮まで日光街道と重なっている。宇都宮からが独自の奥州街道だ。だから宇都宮から先は街道もなんとなく鄙びてくる。そんな街道を脇目を振ることなく、弥三右衛門はこの日も、白沢宿、氏家宿、喜連川宿、佐久山宿と、継ぎ送りの段取りがきちんとなされているかどうかを確認しながら、日も暮れてからつぎの宿泊予定地の大田原に入った。

「ご免！」

絹川弥三右衛門は本陣の門前に立って、声をかけた。

「ようこそ、いらっしゃいました」

本陣の主人が迎える。主人はこの夜、弥三右衛門が本陣を訪ねるのを承知している。心積もりして待機していた。

「お待ちいたしておりました」

つづけて横にいた問屋が挨拶する。

いわゆる卸問屋という意味の問屋と語がおなじで紛らわしいが、ここでいう問屋はその問屋ではない。問屋場の長、責任者をさす。

宿場にはどこも問屋場という役所があり、そこの長の問屋、問屋の下に助役の年寄、事務担当の帳付、人足に荷物を振り分ける人指、馬に荷物を振り分ける馬指などがいて、

人足・馬子を差配して荷物を継ぎ送った。

人足・馬子は助郷、増助郷などといって、近隣の村々から狩りだした。むろん無賃で、狩りだされるほうも難儀したが、狩りだすほうも、人足何人、馬何匹を、何日の何時にとそろえなければならず、なにやかやと手間暇をとらされた。

「先触状で知らせているとおり」

と弥三右衛門は本陣の主人にいった。

「明日ここに、わが主人相馬長門守がお泊まりになられる。段取りは万端ととのえられておるな」

「もちろんでございます」

主人が答える。

「人馬の手配も抜かりはないな」

と今度は問屋に向かっていった。

「先触れのとおりに」

おなじく問屋が答える。

「では、関札を立てよう。用意は？」

「これに」

と主人が上り框に目をやる。

そこには幅一尺（約三十センチ）、長さ五尺（約一メートル五十二センチ）のぶ厚い杉板が三枚おかれていて、傍らに墨と筆とが用意されている。

「よし、では」

と弥三右衛門は気合を入れ、筆にたっぷり墨を含ませ、杉板の一枚に「相馬長門守」と大書し、右肩に「四月二十三日」と小さく振った。つづけて二枚目の杉板にも、三枚目の杉板にも、おなじように「相馬長門守」「四月二十三日」としたためた。それらは関札といういわば表札で、関札は三枚必要だった。

「いつものように」

と弥三右衛門がいい、

「承知しました」

と主人が答えて、本陣の男衆が三枚の関札を、それぞれ長さ一丈五尺（約四・五メートル）の太い青竹に括りつけた。

すでに本陣門前の適当な場所をえらんで、棒杭四本を地中に打ち、交差するように棒を二本ずつ上下二段に渡してある。その真ん中に関札をとりつけた青竹を括りつけるのだ。

男衆は手際よくやってのけた。

本陣門前に、「相馬長門守」という表札ならぬ関札が立てられた。

宿場の両外れを棒鼻という。棒鼻にもおなじように関札が立てられるように棒杭が打ちつけられていて、北と南の棒鼻にもそれぞれ関札を立てた。

明ければ四月二十三日――。その日は相馬長門守がここに大田原宿の本陣に泊まっていると、関札を立てて宿場中に知らせるのだ。そしてその夜、相馬長門守は隊列を組んでやってきて、本陣に定紋入りの幕を引きまわし、一泊してまた先へ進む。

弥三右衛門は関札が南北の棒鼻にもきちんと立てられたのを見届けて、本陣へもどった。

本陣はふつうの宿とずいぶん趣を異にした。宿には賄いつきの宿と手賄いの宿の二種があり、賄いつきの宿を旅籠屋、手賄いの宿を木賃宿といったのだが、本陣はそのどちらでもなかった。

大名は鍋釜、布団、風呂桶、便器など家財道具の一切合切を携行しており、本陣に着くと、家来の料理人が鍋釜で飯を炊いてお菜をつくり、小者が風呂場に風呂桶を据えて沸かした湯を入れ、近習の者が布団を敷く。大名は自分賄いの飯を食って、自前の風呂に浸かり、自前の布団に寝て、大小の用も自前の便器でたした。

つまり誰もが安直に泊まれるようにはなっていないのだが、宿割役人の弥三右衛門は本陣の見分役でもある。供の者の分も含めて相応に代金を支払い、本陣私用の風呂を使わせてもらい、本陣の家族がつくった料理を食わせてもらって、それぞれ身分にふさわ

しい部屋に入って寝た。

なにしろ強行軍だ。また明日も朝は早い。宵っ張りの朝寝坊などというわけにはいかない。弥三右衛門は布団にもぐると、すぐに寝息をたてた。

二

弥三右衛門が眠りについて間もなくだ。

どんどん！

本陣の表戸を叩く者がいて呼ばわる。

「物申オー」

こんな時刻に、はて、誰だろう。

主人はいぶかりながら土間におり、閉め切った表戸越しに聞いた。

「どちら様でございましょう？」

「会津の宿割役人沢田清左衛門である」

名前に記憶がない。夜も更けていて、押込みの一味ということも考えられる。迂闊には開けられない。

「会津のお役人様がこんな時刻に見えられるなど、伺っておりません。どういうことでございますか？」

「それより、とにかく戸を開けてもらおう」

「しかし」

「会津の宿割役人沢田清左衛門と申しておるではないか」

「とおっしゃられましても」

「四の五の申しておると、戸を蹴破るぞ」

「ちょっとお待ちください」

主人は男衆に目配せする。男衆は二階にあがって透き間から下を覗き見、すぐにもどってきていう。

「怪しい様子はありません」

表では、

「いいかげんに開けんか」

「なにをぐずぐずしておる」

とやかましく騒いでいる。

「いま、開けます」

主人は潜り戸を開ける。

「無礼者めが！」

沢田清左衛門が怒鳴りながら真っ先に入ってきて、あとに高齢の侍がつづき、ほかにも侍、若党、槍持ち、挟み箱持ちなど二十人ばかりがどかどかと入ってきた。

本陣の主人は商人ではない。したがっておおむね裕福でなく、本陣に金目の物は少ない。だから本陣を狙う者などそういないが、彼らが押込みの一味ならひとたまりもないところだ。

「とりあえずここへお掛けください」

高齢の侍はかなりの身分らしく、沢田清左衛門は上り框に腰をおろすようにすすめ、主人に向きなおって詰め寄る。

「どういうことなのだ？」

土間には主人が持つ手燭の明かりしかなく、主人は、

「行灯を」

と男衆に声をかけ、男衆が行灯を持ってくるのを待って、不審げに首をひねった。

「どういうこと、とおっしゃいますと？」

「なぜ、棒鼻とここの門前に」

と侍は顎で表をしゃくって、

「関札を立てておる？」

主人はまたまた首をひねって、

「明日、相馬様がお泊まりになるから立てているのでございます。それがなにか？」

「さっきも申したように、それがしは会津の宿割役人である」

「伺いました。それで？」

と主人はなおも首をひねる。

「明日は我が会津松平家の主人がここへお泊まりになられる。早々に関札をとり払うよう」

「なんですって？」

「聞こえぬのか。早々に表の関札をとり払えと申したのだ」

「そんな無体な」

と主人は口をとがらせてつづける。

「だいいち、会津様から先触れは届いておりません」

会津松平家はこの年、相馬家とは逆に国表から江戸に向かう。したがって会津の伝馬役から先触状が届いていなければならないのだが、それが届いていないと主人はいうのだ。

「まさか忘れたのではあるまいなあ」

と沢田清左衛門は主人の顔をしげしげと見つめる。

「なにをでございます」

「ここは我が会津松平家の定宿で、明日は永代御掛ケ日である」

大名によっては、参勤出府・御暇帰国の、この時期の三日なら三日、四日なら四日を永代予約しておくことがあり、予約日を「永代御掛ケ日」といった。

「さようではございますが、いまも申したとおりなにぶん先触れが届いておりませんので……」

本陣は大名が引っ越してきたかのように所帯道具を一切合切運び入れて泊まるから、宿泊料も、いくらいくらですと請求して支払ってもらうのではなく、大名が心付として一両ないし二両を支払ってすませた。だからこの時期の何日かを「永代御掛ケ日」と指定されてもらっても、三日分とか四日分の宿泊料をいただけるわけでなく、いただけるのは心付だけだから、先触れがなく、他の大名から予約が入れば、そちらの大名を泊まらせた。当然のことである。

だが沢田清左衛門はこういい張る。

「明日は我が会津松平家の永代御掛ケ日。ここに我が主人がお泊まりになられる。表の関札をとり払わせ、早々に、当方の関札を立てるように」

「とおっしゃられても」

と主人は困惑して、

「相馬様から先触れがあり、あのように関札を立ててしまった以上、いまさら相馬様に

宿替えをお願いするなど、できることではございません」

「くどいぞ。明日は我が会津松平家の永代御掛ケ日だと申しているではないか。何度いわせれば分かる」

「さようではございましょうが、ここはこのように塞がっております。ですから、一つ先の宿場佐久山か一つ手前の宿場鍋掛にお泊まりください」

「佐久山も鍋掛も本陣は塞がっておる」

この時期は、参勤出府・御暇帰国の諸大名がいっせいに移動する時期で、それぞれが先触状・追触状を送り、空いている本陣、空いている本陣と予約して出府し、帰国する。したがってこの時期の本陣はおおむねどこも塞がっていた。

「お伺いしますが、なぜ先触状をだされなかったのです」

当然のことで、主人は聞いた。

「それは事情があってのこと。そのほうごときに申し聞かせることではない。とにかく何度も申しているように、このようなこともあろうかと、明日ここを永代御掛ケ日にしているのだ」

だからといってその分、お代を頂戴しているわけではございませんと、主人は喉から声がでかかったが、ぐっと我慢していった。

「相馬様にお泊まりいただく約束をし、あのように関札を立ててしまったいまとなって

は、わたしどもとしてはもはやどうしようもありません」
「なにイ！」
清左衛門は肩をいからせ、主人は開きなおるように口をつぐむ。
「清左衛門」
上り框で遣り取りを聞いていた高齢の侍が呼びかけ、顎をしゃくってこっちへこいと目でいう。清左衛門は近寄る。高齢の侍は清左衛門になにやら耳打ちする。
「ははあ」
清左衛門は頭をさげて、
「主人」
と向きなおる。
「相馬の宿割役人殿はここに泊まっているのであろう」
「泊まっておられます」
「相馬の宿割役人殿にじかにたのむ。起こしてもらおう」
「それは……」
相馬の宿割役人絹川弥三右衛門はこういって寝た。
「夜明け前に旅立つ。朝は頭数分握り飯を竹の皮に包んでもらうだけでいい」
寸刻でも余分に寝ていたい様子だった。寝たばかりというのに叩き起こすなど、でき

ることではない。
「起こせないと申すのなら、我らが起こして、じかにたのんでみる。部屋はどこだ」
よけいに話がおかしくなる。
「分かりました。起きていただきます。ですが、お聞き届けになるかどうかは保証のかぎりでありません」
「我らが掛け合う。つべこべ申さず、相馬の宿割役人殿をこれへ」
「しばし、お待ちを」
と主人が奥に入ろうとしたところへ、
「忠兵衛さん」
と声がかかる。
「これは源蔵さん」
先ほどまでいた問屋だ。
「男衆の卯吉さんが家へやってきてしかじかと……。それでこっそり裏口から入れてもらって遣り取りを聞いていたのですが、厄介なことになりそうですねえ」
「相馬の宿割御役人様がすんなり聞き入れられるとも思えませんし……。しかしまあ、とにかく起きていただきます」

三

「もし」
という声に絹川弥三右衛門は眠りを破られ、目を開いて辺りを見まわした。戸は閉め切ってあるが、障子の向こうに明かりがある。
「もし」
本陣の主人らしい。身体を起こして聞いた。
「なにか？」
「折り入ってお願いが……」
「何刻だ」
「先ほど亥の上刻（午後十時）の鐘が鳴りました」
「こんな遅くに、何事だ？」
弥三右衛門は不機嫌にいう。
「それが、いささか難しいことで……」
「うーん」
とうなって、弥三右衛門はいった。

「分かった。いま起きる」
「申し訳ありません」
弥三右衛門は起きあがって着替え、障子を開けた。
「実は会津の宿割御役人様が……」
と主人忠兵衛が子細を打ち明け、弥三右衛門は腕を組んでいう。
「会津の宿割役人殿に応対する義理はない」
「おっしゃるとおりです。しかし……」
「そのほうが起こせないと申したら、我らが起こして、じかにたのんでみると申したのだな」
「さようでございます」
どっちにしろ会わなければおさまらないということのようだ。
「そういうことなら会うだけは会ってみよう。ただしゆずれないものはゆずれない。それは承知しておいてくれ」
「もちろんです」
弥三右衛門は忠兵衛のあとにつづき、土間に立って名乗った。
「それがしが相馬の宿割役人絹川弥三右衛門でござる」
清左衛門も名乗る。

「それがしは会津の宿割役人沢田清左衛門」
「子細は主人忠兵衛殿からうけたまわった。されどなにぶんあのように関札を立て、万端取り計らったあとでござれば、宿替えはできかねもうす。この大田原にも脇本陣があり、また佐久山、鍋掛と宿場もあることでござれば、宿はほかにもとめられよ」
沢田清左衛門は意外なといった顔をしていう。
「お聞き及びではござらぬのか」
「なにをでござる」
「この本陣の明日という日は、我が会津松平家の永代御掛ケ日になっているというのを。明日は永代、我が主人がここへ泊まる約束になっている。それをこの家の主人が度忘れしたかして、違約して御尊家をお泊めすることに相なったのでござる。そこのところをよくよく理解されて、早々に関札をとり払われ、どこぞへ引き移られよ」
「無体を申されるな」
弥三右衛門は顔をゆがめた。
「我らは三月も前から伝馬役所を通じて先触状を送り、明日ここへ泊まる段取りをつけ、いましがたあのように関札も立てたのでござる。明日がたとえ御尊家の永代御掛ケ日であろうと、先触状を送らなかったのはそちらの落ち度。先触状さえ送っておられれば、たとえ我らの先触状が先であったとしても、永代御掛ケ日ということならばおゆずりしたはず。申されていることは横槍を入れられるにひとしい。とにかくすでに関札を立てておることでもござれば、面目にかけてもゆずれるものではござらぬ」
沢田清左衛門は弥三右衛門をぐいと睨みつけていう。
「面目にかけてもと申されるか。たいした大言を吐かれるものでござるのう」
相馬家は下総の千葉氏の出で、源頼朝から藤原氏征伐の恩賞として陸奥相馬の地をたまわり、いまに生き残っているという名門だが、いかんせん代々六万石で従五位下の並び大名。会津松平家は二代将軍秀忠の流れを汲み、代々二十三万石で従四位下侍従。しかも当代の二十歳にならぬ松平肥後守容衆は十一代将軍家斉の娘元姫との婚儀がととのったばかり。このあとすぐに将軍家の婿になる。そもそも格が違うのに逆らっていいのかと、清左衛門は脅しているのだ。
「大言など吐いてはおり申さぬ。筋を申しているのでござる」
脅しなど利くものかと弥三右衛門は突っ張る。
「あれこれぐずぐず申されず、すぐさま関札をとり払い、どこぞへ引き移られよ」
「お断りいたす」
「腕にかけてもでござるか」
沢田清左衛門は刀に手をかけんばかりにいう。
「いかにも」

弥三右衛門も一歩も引かずに応じる。

宿割役人は本陣の者や問屋場の者を相手にするだけではなく、このように他家の家来とのごたごたにも対処しなければならない。だからどこの御家も腕も度胸もあり、また機転も利く男を配しており、弥三右衛門もそうだが清左衛門もそうらしく、二人の間に殺気がみなぎったその瞬間、

「お待ちくださりませ」

遣り取りをずっと見つめていた問屋源蔵がさっと間に入り、

「絹川様、ちょっと」

と弥三右衛門の袖を引く。

顔に必死の色があり、やむなくついていくと、源蔵は本陣奥の座敷に誘っていう。

「おすわりください」

いわれるまま、弥三右衛門は床を背に腰をおろした。

「申し訳ございません」

源蔵は、がばっと這いつくばる。

「なにがだ」

戸惑う弥三右衛門に、源蔵は平伏したままつづける。

「あきらかにあちら様は理不尽を申されておられます。されどあちら様は公方様ともご

縁の深い名門の御大家。筋を申したからといって通用する相手ではございません。長い物には巻かれろとも申します。またこのうえの騒動の余波は、我ら宿場役人に降りかかってまいります。道中御奉行様は会津様の理不尽には目をつむられ、なにゆえ、かちあうように宿割したのかと、我らをきつくお叱りになられるに違いありません。ですからなにとぞご堪忍いただき、おゆずりいただいて脇本陣にお移りくださりませ」

「聞くが、明日、会津松平家もここ大田原に泊まるとなると、人足も大勢、馬も何匹もこれから掻き集めなければならぬのだぞ。できるのか」

「これからみんなを叩き起こして、近郷近在の村々に人を走らせます。明後日の朝のことですから、なんとか間に合うでしょう」

できることなら、そうでした、いまからだと人足も馬も手配できません、だからやはり会津様にどこぞへ移ってもらいましょうといってもらいたかったのだが、そうではなかった。

さて、ならばどうする。

「なにとぞ、なにとぞ」

問屋源蔵は額を畳にこすりつける。

会津は御大家。ゆずっても不名誉ということにはならない。また会津とごたごたを起こしたところで、なんの得にもならない。会津の宿割役人沢田清左衛門の無礼は我慢な

らぬが、ここはゆずるほかない。いや、ゆずったほうがいい。

弥三右衛門は分別をつけていった。

「あい分かった。ならば脇本陣に移ろう」

「申し訳ございません」

源蔵はふたたび額を畳にこすりつける。

弥三右衛門は、本陣門前の、関札をとりつけた青竹を外させ、寝ぼけ眼（まなこ）の供の者に抱えさせて脇本陣に移った。

四

脇本陣の門前には、関札を立てるように棒杭など打っていない。あらたに棒杭四本を打ち、上下二段に棒を渡してと、脇本陣の男衆が作業をはじめているのを見守っているところへ、槍持ち佐五平がやってきていう。

「槍を忘れてきただ」

とっさになにをいっているか分からず、弥三右衛門は首をひねった。

「槍がどうしただと？」

「忘れてきただ」

「どこへ？」

「本陣へ」

この時代、槍持ちを常雇いしている侍は少ない。江戸の旗本御家人の場合、槍持ち、挟み箱持ち、草履取り、馬の口取りなどは必要に応じ、一緒くたに人宿（ひとやど）から雇い入れた。将軍からいうと陪臣（またもの）である大名の家来など、威儀を正して表を出歩くことがないからなおさらである。

とはいえ宿割役人は御家を代表して行動する。威厳をとりつくろわなければならない。挟み箱持ち、草履取り、馬の口取りなどのほかに、槍持ちも引き連れた。

大名は参勤出府・御暇帰国で、江戸と国許を行ったりきたりするとき、江戸の六組飛脚問屋が抱えている〝通しの日雇い〟という専業の人足を雇った。それが常態になっていた。弥三右衛門も六組飛脚問屋の相模屋から、本隊の〝通しの日雇い〟を雇うついでに、自身の槍持ち、挟み箱持ち、草履取り、馬の口取りなど四人を雇い入れた。佐五平はそのうちの一人、槍持ちである。

だから佐五平は槍持ちとはいえ、素性は〝通しの日雇い〟。槍を専門に持つことはほとんどなく、槍を荷物の一つくらいにしか考えていなかったから、ついうっかり本陣に忘れてきてしまったのだろうが、槍は刀と同様、武士の魂である。気軽に忘れてもらっては困る。

「なにをぼけーっとしておった！」

本当ならこう怒鳴りつけるところだが、時が時だ。関札をとりつけたらすぐに布団に潜り込み、疲れをとりきらねばならない。またどこに置き忘れたか覚えていないというのでもない。おなじ宿場のさして離れていない本陣にというのだ。

弥三右衛門は声を荒げずにいった。

「すぐにとってこい」

「へえ」

声こそ元気がいいものの、佐五平はやがて五十になろうかという歳で、月明かりのない暗がりの中を、提灯をぶらさげ、よたよたと本陣に向かった。

「これでよし」

供の者が関札をしっかりとりつけたのを見届けて、弥三右衛門が床几から腰をあげたところへ、佐五平がもどってきていう。

「槍を返してもらえねえだ」

弥三右衛門はまたも首をひねった。

「どういうことだ？」

「さっきの会津のお侍さんがこうおっしゃるだ。槍が侍の表道具であることくらい、貴様も知っておろう。忘れた、返してもらいてえといわれて、ハイそうですかと右から左に渡せるものではない」

「それですごすご帰ってきた？」

「へえ」

「馬っ鹿者！」

弥三右衛門もさすがに今度は怒鳴った。

「力ずくでも奪い返してくるのが槍持ちの務めだ。なんのための槍持ちぞ」

佐五平は口をとがらせる。

「おらは〝通しの日雇い〟。ただ槍を持てばいいといわれて雇われたにすぎねえ。槍持ちだからといって特別に手当を増やしてもらってるわけでもねえ」

「一人前に仕事もできないでいて、つべこべと……。いいからいま一度でかけていって、なにがなんでもと、とり返してこい」

「会津のお侍さんはよくもまあ、請書も持たずにとおっしゃっておられただ。請書を書いてもらえねえだか」

さっきの遣り取りを意趣に含むとしたらこっちである。ゆずってやったのに、請書まで寄越せとはなんたるいい草……、と会津の宿割役人沢田清左衛門のにくにくしげな顔が瞼に浮かび、おのれ、と腸が煮え繰り返ったが、これ以上ごたごたしているわけにはいかない。明日は夜明け前にここを発たなければならない。

「しばし待て」
といって懐から懐紙、矢立から筆をとりだし、すらすらと書きつけた。
「槍一本。たしかに請け取り申し候。
相馬長門守家来絹川弥三右衛門」
会津松平家御家中
「これを」
と弥三右衛門は書き付けを佐五平に突きつけ、
「渡して槍を受け取ってまいれ。それでおれはもう寝る。受け取った槍は二度と忘れることのないよう肌身に括りつけておけ」
「そんなことをしたら、おらは眠れねえだ」
「つべこべいってないで、さっさと受け取ってこい」
佐五平はまた提灯片手によたよたと本陣へ向かった。

五

「旦那様」
寝入って熟睡しているところを、弥三右衛門はまたも起こされた。

「佐五平か？」
「へえ」
「もういい。勘弁してやる」
「それが……」
「なんだ？」
疲れをとるどころではない。いらつくのを我慢して、弥三右衛門はいった。
「まだなにか話があるのか」
「槍を返してもらえねえだ」
「なんだと」
がばっと跳ね起きていった。
「どういうことだ」
「それが、はあ」
佐五平はもそもそ語りはじめる。
佐五平はまたまた本陣に沢田清左衛門を訪ねた。清左衛門は明後日の朝の人足と馬の手配で、問屋源蔵とあれこれ遣り取りに忙しい。放ったらかすようにしばらく佐五平を待たせておいて、そうそうと思いだしたように、土間に呼んでいった。
「さっきも申したように槍は表道具だ。忘れました、返してくださいといわれて、ハイ

そうですかと右から左に渡せるものではない。聞いていなかったのか」

「へえ、それで」

と佐五平は弥三右衛門がしたためた請書を清左衛門に差しだしていった。

「旦那様の請書でございます。これをお納めいただいて、槍をお返しくだせえ」

「見るところ、そのほうは……」

と宿割役人は佐五平の天窓のてっぺんから足許までしげしげ見つめ、

「〝通しの日雇い〟だな」

隠すことでもない。佐五平は答えた。

「いかにもさようでございます」

「おぬしの主人殿だが、槍一筋を立てて歩くほどの身分であれば、二本を差す相応の家来も抱えているはず。そのような者が主人の請書を持参して、返してくださいと頭をさげるのならともかく、〝通しの日雇い〟に託し、返してくださいといわせたからといって返せるものではない。そのくらいの道理は主人殿も弁えておられるはず。それとも弁えておられぬか？」

「おらは頭が悪いだからおっしゃられることはよく分からねえだが、さきほどは、請書を持参すれば槍をお返しいただけるような口ぶりでございました。ですから、へえ、旦那様に請書をしたためていただき持参いたしたのでございます。どうかこれを受け取られて槍をお返しください」

「その請書だがのう。誰が書いたものか分かったものではない。当方は主人殿の手跡を知らぬのだからのう。おぬしが偽って書いたものかもしれぬ」

「そんなあ、なんてことをおっしゃるだ」

「とにかく、武士の表道具の受け渡しをしようというのだ。それなりに手順を踏むのが筋というもの。お前は槍を忘れるような、臨時雇いの粗忽者。もしお前に槍を託してまたまた粗忽があったら、このうえまた一悶着も二悶着も起ころう。帰って主人殿にこう申せ。主人殿自身か、相応の家来が受け取りにまいるようにと」

「しかしそれでは、おらの立場というものが……」

「お前の立場？」

清左衛門は口をあんぐり開けていう。

「槍持ちでありながら槍を忘れるような粗忽者に立場などあるか。馬鹿者。だいたいそんな粗忽者を槍持ちに使っている主人殿自体が不覚者といえよう。こうなればなんだ。後来の見せしめに、粗忽な槍持ちの首を打ってこられよ。そうされれば槍はお返しする。帰って、主人殿にそう申せ」

佐五平は首をかしげた。

「粗忽な槍持ちの首を打ってこられよ、とのことでございますが、粗忽な槍持ちとはわ

たしのことでござえますか」
「決まっておろう」
「この首を」
と佐五平は手で首を撫でながら、
「打ってこい、と主人に申すのですか」
「そうだ」
「そんなア」
「とっとと帰って主人殿にそういわないと、俺がその素っ首を叩き斬る」
「ひゃあー」
佐五平は悲鳴をあげて表に飛びだした。
「……というわけでござえます」
佐五平は話を終えた。
槍持ちの首を持ってこられよといえば、相馬の絹川弥三右衛門なる宿割役人はほかの者に任せておけず、自身でやってこよう。やってきたら、さっきの意趣晴らしにさんざんにいたぶってやろうというのが沢田清左衛門の魂胆で、清左衛門の魂胆は弥三右衛門にすぐに読める。
ふつうならこんな場合、堪えがたきを堪えて無事これ太平、平穏におさめるのが御家のため、また自身のためである。だがものには限度があり、人には意地がある。限度を踏み外すとどんな目に遭うか。思いあがった会津の宿割役人に思い知らせてやらなければならない。
「そのほうはしばし待て」
と佐五平にいって、弥三右衛門は供の侍が寝ている部屋に向かった。
六万石の相馬家に、供の侍を常雇いしている者はこれまた少ない。供の侍は婿養子に迎えている宗八郎である。ついでにいうと若党は一年がかりの江戸見物にやってきた親戚の少年。小者は近所の職人の倅。
ぐっすり眠っている婿養子宗八郎を起こし、子細を語っていった。
「このうえは佐五平の首を打って会津の宿割役人沢田清左衛門に受け取らせ、清左衛門を討ち果たして、それがしも斬り死にする。だからそのほうはそれがしに構わず、予定どおり明日早朝にここを発ち、それがしの仕事を引き継げ」
「そういうことですと」
と宗八郎は眉を曇らせ、
「それがしは親を見殺しにした親不孝者ということになります。それがしもお供つかまつります」
「親の申したことに従わぬことこそ親不孝者だ。それがしが申すことに黙って従え」

「百歩ゆずって、黙って従うことにしたとしてです。そうなればここ大田原の宿はてんやわんやの騒ぎになり、下手をすると我が相馬家と会津松平家が一戦を交えるということになりかねません」

弥三右衛門はにっこり笑っていった。

「一戦を交えることに、なればなったでいいではないか」

「それで御家が改易ということになったら、父上は不忠者ということになります」

「黙っていたぶられる腰抜け侍を家来に持つより、殿にとってはそのほうがまだましだ。だがなあ」

とまた弥三右衛門はにっこり笑い、

「ゆめゆめ一戦などということにはなるまい。会津とて、主君がこれから将軍家の婿になろうという時だ。騒動など構えぬはず」

「だったらよろしいのですが」

と宗八郎はいって、

「とにかく仰せに従います。存分にご無念をお晴らしくださいませ」

「間違ってくれるなよ。無念を晴らすというのではない。思いあがっている奴に天罰をくだしてやるのだ。相馬侍の意地を見せてやるのよ」

と弥三右衛門はいって、

「あとのことはよろしくたのむ」

「お任せください」

弥三右衛門は自室にもどり、ぼんやりすわっている佐五平に念を押した。

「会津の宿割役人沢田清左衛門は、たしかにそのほうの首を打ってこいと申したのだな」

「さようでございます」

「分かった」

といって弥三右衛門はあらたまった。

「会津の宿割役人がいうとおり、槍はたしかに武士の表道具である。槍を返してもらえなければそれがしは武士として面目が立たぬ。大手を振って道中を歩けなくなる。なんとしてでも槍はとり返さなければならぬ。されど会津の宿割役人は粗忽者の槍持ちの首を持参しなければ槍を返さないと申しておる。となるとだ、それがしとしては粗忽者の首を打って持参するしかない」

「なんですって？」

佐五平は目を丸くして弥三右衛門をじっと見つめた。

顔はふだんと変わりない。とても恐ろしげなことをいっているようには思えない。おそらくなにかの間違いか冗談だろうと思って、弥三右衛門のつぎの言葉を待っていると、

「まことに不憫であるが、これからそのほうの首を打つ」
「なんとおっしゃいましただ」
「そのほうの首を打つと申した」
「げえっ！」
佐五平はのけぞる。
「だが考えてみれば、そのほうはそれがしの奉公人ではない。一季、半季で雇った足軽小者ですらない。国許に帰り着けば、ただちに暇をつかわすただの〝通しの日雇い〟。なのに首を打たれなければならないとはまことにもって不憫というか気の毒千万。だから〝通しの日雇い〟のままでは死なせぬ。ただいま現在からそれがしの家来にしてやる。それがしの家来になれば侍だ。せめてものこと侍になって往生しろ」
「そんな！」
「すべてはそのほうの粗忽から生じたこと」
といって弥三右衛門ははったと佐五平を睨みつけた。
「嫌とはいわせぬ」
「嫌だといったら」
「この場で成敗する」
弥三右衛門は刀を手繰り寄せる。

弥三右衛門の目には、逃げれば背後からばっさりの決意が見てとれる。佐五平はがくりと首をたれていった。
「たしかにわたしめの粗忽から生じたことでございます。このうえは旦那様のお立場が立つよう、存分に首を打ってくださりませ」
「それがしの家来で侍ということだと、作法どおり切腹させねばならぬ。ただ、ここは明日、殿がお泊まりになる脇本陣。血で汚すことはできぬ。外へでよう。ただし逃げるような真似はするな。逃げれば背後からばっさりだぞ」
「分かっております」
「では、立て」
土間におりると、男衆が待っていていう。
「おでかけですか」
「うむ。今度は二人してでかける」
「お帰りは？」
「明け方になるかもしれぬ。戸締まりをするがいい」
「お帰りが早いようでしたら背戸の木戸を叩いてください。わたしはその側で寝ております」
「そうしよう」

提灯を持ってでたが、遅い月が空にあって明かりには不自由しない。
「さてと」
弥三右衛門は小川が流れている脇道に入り、小藪の脇で立ち止まって、
「ここがよかろう」
と脇差を放り投げた。
佐五平はへたり込むようにすわっていう。
「でも、おらは切腹の作法を知らねえだ」
「知らなくともよい。ただ腹を切ればいい」
「だども」
「臆したか」
「臆したというより、おらはただの〝通しの日雇い〟、なんで腹など切らねばなんねえと、いまさらながら納得がいかねえ」
「お前の首を持参しなければ、それがしの面目が立たぬのだ。何度、いい聞かせれば分かる」
「だども」
「だからせめてのこと、それがしの家来にして切腹させてやろうといっておるのだ。聞かずば、即刻その首を刎ねる」

「そんな……」
「だから腹を切れ。介錯してつかわす」
といって弥三右衛門は刀を振りかぶった。
佐五平は観念して脇差の鞘を払い、弥三右衛門が投げた懐紙で刀身をぐるぐると巻いて腹を突き刺そうとするが、腹をチクリと突いただけでイテテ、イテテと大仰にわめき、首の位置が定まらない。
一刀のもとに打ち落とせず、首に鋸で引いたような疵跡ができては、沢田清左衛門が剛腹な男なら不覚者と笑い飛ばされる。
「いいかげんに腹を括れ」
弥三右衛門は叱咤した。その瞬間、
「止めた」
と佐五平は左足を蹴って逃げにかかる。
首がちょうどいい具合に伸びた。
「えい！」
弥三右衛門はびゅんと刀を振り落とした。
首はころんと転がった。弥三右衛門は髻を摑み、小川で血を洗い流し、用意した桐油紙に包み、さらに風呂敷に包んだ。そのうえで、これまた抱えてきた新しい下帯と下着

に着替え、月明かりをたよりに、風呂敷包みをぶらさげて本陣に向かった。

六

「会津の宿割役人殿に物申ーす」
弥三右衛門は本陣の前に突っ立って呼ばわった。
「どちら様で」
と本陣の男衆がでてきて、
「あぁ」
と気づく。
「会津の宿割役人沢田清左衛門殿に取り次ぐよう」
「ははぁ」
男衆は奥へ引っ込み、でてきていう。
「どうぞ、奥の座敷へ」
弥三右衛門は土間の隅に佐五平の首をそっとおいて、ついていった。
清左衛門は起きて待っていて、口許にうすら笑いを浮かべていう。
「これは、先ほどの……。して御用は？」

弥三右衛門は向かい合うようにすわっていった。
「槍持ちがここへおき忘れた槍を受け取りにまいった。お引き渡しいただこう」
隣の部屋に三、四人いて、事の成り行きを面白がって聞いている様子で、わざとらしく清左衛門はいう。
「槍持ちに申したはずでござるが……、はて、伝わっておらぬようでござるなあ」
「相応の家来か主人が自身で受け取りにまいるようにとの伝言ならたしかにうけたまわった。だからこのように、それがしが自身でまいった。どうかお引き渡しいただきたい」
「いや、その伝言ではござらぬ」
沢田清左衛門は首を横に振る。
「と申されると？」
「それがしは槍持ちに、帰って主人にこう申せと申したのでござる。後来の見せしめに、粗忽な槍持ちの首を打ってこられよ、そうすれば槍はお返しすると」
「その伝言ならたしかにうけたまわった」
といって弥三右衛門はうなずいた。
「うけたまわっておられるのなら、そのようになされよ。さすれば、すんなりお返したす」
「さようでござるか。ならばしばしお待ちを」

弥三右衛門は土間にとって返し、風呂敷包みを抱えてきて、どんと清左衛門の目の前におき、

「よろしいか」

といって、風呂敷包みを開いた。

「槍持ち佐五平の首でござる。とくとご覧あれ」

「う、うう」

清左衛門は白目をむいて喉を詰まらせる。

「ささ、遠慮なく」

弥三右衛門は指先で首をつつとすすめる。

「そ、そんな」

清左衛門はあとずさるように腰を引く。

「遠慮なくと申しているではござらぬか」

弥三右衛門はそういい、髻をむんずと摑んで、

「ほれ！」

と首を清左衛門に投げつけた。

「ぎゃあ！」

清左衛門がのけぞったところへ、弥三右衛門は刀を抜き打ち、

「死ね！」

と振りおろした。

清左衛門は悲鳴をあげてその場に倒れた。

弥三右衛門の刀は清左衛門の額を真っ二つに割っていて、額からどくどくと血が噴きでる。

「いかがなされた？」

隣の部屋の唐紙（からかみ）が開いて、刀を片手の男が顔をだし、異様な光景に顔を引きつらせて、

「このオ！」

と刀を抜いて飛びかかってくる。

弥三右衛門は十分に引きつけ、片膝（かたひざ）を立てた下段の構えから、

「えい！」

真一文字に腹をえぐった。

「むむ、むっ！」

いま一人が目を引きつらせて突っかかってくる。弥三右衛門は相討ちを覚悟で、

「とお！」

と突進した。

弥三右衛門の刀は相手を串刺（くしざ）しにした。

相手の刀も弥三右衛門の脇腹をこすり、血が滲みはじめたが、弥三右衛門はかまわず相手の腹に足をかけ、刀を引き抜いて隣の部屋を見まわした。

高齢の侍が、部屋の隅でわなわなと身体を震わせていていう。

「い、命ばかりは……」

「ご心配めさるな。かかってこられぬお方を刃にかけたりはいたさぬ」

「さ、さようでござるか」

といって高齢の侍は部屋の隅を伝い、

「誰かア！」

と叫んで、外へ飛びだしていく。高齢の侍だけではない。供の者もなにやら喚いて、ばたばた飛びだした。

文政の初年にあった事件だが、会津松平家にとっては不名誉な事件で、また主君が将軍家の婿になることになっていたから、道中奉行あたりが間に入って事件を揉み消したようだ。したがって弥三右衛門がその後どうなったか、もちろん記録は残されていない。

ヨフトホヘル

一

旗本近藤重蔵はエピソードに事欠かない。

御弓奉行として大坂に赴任して間もなく、後に〝大塩の乱〟を引き起こす東町奉行所の与力大塩平八郎がある朝、屋敷に訪ねてきた。

約束などしていない。重蔵はむっとして取次にこういわせた。

「主人は本日、政庁には出仕いたしませんが、公務繁多にて面会いたしかねます。ただ夕刻黄昏どきには用がすみます。それまでお待ちいただけますのなら、お会いすると申しております」

「心得た」

大塩はそういうと、表座敷にどっかとすわりなおした。

見渡すと床の間に十匁筒の小筒が飾ってある。ご丁寧に飾り物ではないのだといわんばかりに合薬（火薬）まで添えてある。

大塩は小筒に合薬を詰め、奥の部屋にいる重蔵を威嚇するように、空砲を三度、四度と鳴らした。

やがて黄昏どきになり、重蔵は大塩を部屋に迎え入れた。大塩はとぼけていった。

「さきほどからしばしば小筒の音が聞こえてきておりました。あれはどこで鳴らしていたのでしょう？」

重蔵もとぼけて答えた。

「わたしの耳にはいっこう聞こえませんでした。ひょっとすると、下僕らの放屁の音かもしれません」

とまあ、そんなやりとりがあって、

「一献」

ということになり、重蔵は酒をだし、

「下物がなくて申し訳ござらぬ」

とたくあん三切れを添えた。しばし杯を酌み交わしていて、重蔵はいった。

「そうそう。今朝到来した下物を忘れておりました。しばしお待ちあれ」

重蔵はさがり、岡持ちを携えてきて、

「どうぞ」

とおく。大塩は蓋を開けた。のそのそとスッポンが這いだす。

「これは珍重」

大塩はそういい、スッポンを捕まえて脇差でスパッと首を刎ね、逆さにして生血をごくごくと啜って、いった。

「いや、結構な下物でした」

大塩平八郎も近藤重蔵もともに名高き学者で、またともに一癖も二癖もある人物。いかにもあったろうと思わせるエピソードで、訪ねたのは重蔵で迎えたのが大塩と立場を異にして伝えている書もある。

幕府の役職の一つに御鷹匠というのがあり、将軍の鷹を飼育するので、御鷹匠が道をいくときは、「御鷹、御鷹」と呼ばわった。出会った者は平伏するか、それが嫌なら避けるしかない。

たまたま郊外を歩いていて、重蔵はその御鷹匠と行き合った。

「御鷹、御鷹」

御鷹匠は背をふんぞり返らせていう。重蔵は平伏するでもなく、避けるでもなく、こういいながらどんどん御鷹匠に向かう。

「御人、御人」

重蔵は六尺豊かな大男である。御鷹匠は閉口し、恐れをなして道を避けた。

重蔵は幼少のころから学問に励み、神童といわれたほどでき、二十四歳の寛政六年（一七九四）に聖堂学問所の学問吟味を受け、

「学問心掛け一段の事、なお出精仕るべく旨、仰せ渡られ候」

と賞された。

ただし上には上がいて、この年の御目見以上の首席は遠山の金さんの父、遠山金四郎景晋、御目見以下の首席は寝惚先生こと文人大田南畝（直次郎）。近藤は平合格だった。

それでも合格の甲斐あって翌寛政七年、長崎奉行手付出役に登用されて長崎に出張。長崎奉行中川忠英の命を受けて『清俗紀聞』の編纂に従事し、また『安南紀略藁』などを著し、献上した。

長崎から帰ってくると、九年に支配勘定に昇役し、関東郡代手付となった。

重蔵は職務に励みながら、幕府の重要懸案事項となっていた蝦夷地の取り締まりについて建言。容れられて蝦夷御用取扱を命ぜられた。

以後、重蔵は四度にわたって蝦夷に赴き、二度目の寛政十一年には択捉島に渡海して、島内の一角カムイワッカオイにあったロシア人が建てた十字架を撤去し、「大日本恵土呂府」の標木を建てた。

蝦夷というと、間宮林蔵、最上徳内、高橋三平らの名が知られているが、重蔵の名も彼らにひけをとらないほど知られるようになった。

やがて北辺が静かになり、蝦夷御用がなくなると文化五年（一八〇八）、書物奉行に登用され、文政二年（一八一九）に大坂御弓奉行に転じた。

とまあこうエピソードや経歴を並べると、重蔵は一種痛快な豪傑のようだが、実像はそうでない。

文政期の政界の実力者水野出羽守は、こう重蔵を評している。

「彼は小人の学問したるにて、已が役にてもなき（同じ部署でない）諸役人のことを種々に悪評し、重き御役人衆を惑乱せしむ」

近藤重蔵が水野出羽守の屋敷に出入りしていたのは、出羽守が若年寄、重蔵が書物奉行の時代。そのころ重蔵は老中とか若年寄とかの権門に出入りして、同僚でもない諸役人の悪口をさかんに吹きまわっていた。

『甲子夜話』という膨大な記録を残している、肥前平戸の前殿様松浦静山は、同書にこう書き留めている。

「（重蔵は）予（が）嘗て当職の際（殿様だったとき）、松平信州、市橋総州、福山侯、林子（林大学頭）等と風月に相会せし筵に文雅を以て下風に陪せし者にて、著述は有用の書も多かりき。然るに何れの年か復び蝦夷地の役に赴きし帰後、予その宅を訪ねしに、見違えしばかりに人品くだりしゆえ、そのことを密に林子に通ぜしこともありぬ」

もともと人品骨柄が卑しかったのだが、北辺蝦夷といえば近藤重蔵と少しは世間に知られるようになって卑しさが表にでるようになったということで、重蔵はとりわけ自己顕示欲が鼻持ちならぬくらいに強かった。

これは書物奉行時代のこと。重蔵は日本橋川に近い大坂町の屋敷の敷地に、擁書城と名づけた土蔵造り二階建ての書庫を、これみよがしに建てた。

建築費用はというと、殿中で諸侯からせびった。それでついたあだ名が〝殿中の追い落とし〟。〝追い落とし〟とは追い剝ぎのこと。

「擁書城という書庫を造ろうと思っております。ご寄進を」

と殿中をうろついてせびってまわったというのだ。

そんな男だから、大坂では、豪商をゆするようにして身分不相応の、唐和蘭風の邸宅を建てた。また千種大納言の娘を妾にした。

大納言の娘を妾にというのは本当だろうかと疑う者もいた。直接、重蔵に確かめると、重蔵はこう嘯いた。

「籍には入れておらぬゆえ、たしかに妾にちがいござらぬ。納言の娘を妾にしたのは、九郎判官義経以来でござろう」

それらが江戸に聞こえ、様々不遜であるとされ、任にあることわずか二年で江戸へ呼びもどされて、重蔵は小普請入差扣を命ぜられた。

小普請入というのは無役になるということだが、重蔵は、仕事は誰よりもできると自負している。酒の席などで重蔵を、

「かかる英雄をとり用いなきは如何なることにや」

などとくすぐると、重蔵は感極まるように涙し、不遇を嘆いたという。そこで御目見以下首席の大田南畝は芝居の番付に見立ててこう評した。

「重蔵　実はオロシアの廻しもの　ヨフトホヘル」

ヨフトホヘルは酔うと泣るのもじり。なんとなくロシア人の名のようだから、大田南畝はそう評した。いずれにしろ重蔵はすこぶる評判の芳しくない人物であった。

武州荏原郡三田村（現・東京都目黒区）に住む、百姓、といっても下男、下女など召使を使っているから、まあまあの自作農だ。自作農半之助は、重蔵がそんな男とは知らずに、ある頼み事をすることになった。

二

この時代、富士講という富士山を信仰する講を組み、「六根清浄」と唱えながら富士登山することが流行った。されど富士は遠い。そこで富士山に模した富士塚という小山を築き、富士登山するかわりに、富士塚へ登山するということもまた流行った。いまでも富士塚は都内のところどころに残っている。

自作農半之助の三田村の地所は目黒川の北東岸で見晴らしがよく、そこに富士塚を築立てれば登山客が殺到し、蕎麦屋でも商うと大繁盛する。半之助はそう思いついた。

だが、あいにく一帯は代官中村八太夫の支配地。富士塚を築立てるには代官の許可をとりつけなければならないが、中村八太夫は強欲で知られていた。かなりの袖の下、賄賂を使わなければ、願いは店晒しされるか、ことによっては却下される。できることなら賄賂を使わずにすませたい。どうしたらよかろうかと半之助は知人に相談した。

「だったら、こうすればいい」

と知人はいう。

「地所を御旗本の抱え屋敷という名目にして、富士塚を築立てるのだ。御旗本の抱え屋敷なら代官中村八太夫もあれこれ文句はつけられない。幸い、近藤重蔵という御旗本を知っている。たのむがいい」

重蔵の近藤家は御家人だったのだが、蝦夷地での働きが認められて、永永御目見以上、つまり永代旗本となった。

旗本にしろ御家人にしろ、全員、幕府から拝領地という住まいを与えられていたが、この時代は〝相対替え〟という名目で、拝領地が実質売買されるようになっていた。地所を失くしていた者も少なくなかった。かの勝海舟の勝家など、四ッ谷御簞笥町に二百七十六坪の拝領地が与えられていたのだが、何代も前に人手に渡り、海舟の父小吉はずっと借地借家住まいしていた。

重蔵も同様。御弓奉行となって大坂へ出向くとき、大坂町にある屋敷を眼科医土生玄碩に売り渡したため、罷免されて江戸へ呼び戻されたものの住む家がない。玄碩にたのんで、玄碩が家賃収入を得るために敷地内に建てていた長屋の端を借りた。

そのあとだ。重蔵はなに食わぬ顔をして、借りている長屋の端の周囲を板囲いした。そこは玄碩の屋敷の出入口で、玄碩は出入りに不自由する。

「板囲いをとり払ってもらいたい」

玄碩はたのんだ。

「できない」

重蔵はにべもなく撥ねつける。

借家人が勝手に板囲いをして家主の出入りを妨げる。考えられないことだ。

「ならば訴えるまで」

玄碩は息巻いた。そのころ、土生玄碩には奥医師への登用という話が持ちあがっていた。

「大事なときです」

諫める者がいて、玄碩は争うのをあきらめ、大坂町の家はそのままに二葉町（現・新橋一丁目）の家に移った。

玄碩は文字どおり庇を貸して母屋をとられたのだが、重蔵としても長屋住まいが楽しいわけではない。

豊島郡滝野川村の正受院という寺に隣接する一帯に野間正順という者がいて、かねて心安くしていたところから、重蔵は野間正順に乞うて若干の地所を割いてもらい、そこに家を建てて移り住んだ。

それから間もなく——。重蔵は交遊のあった画家谷文晁に己が甲冑を着した像を画かせ、その像のとおりに、石屋に石像を彫刻させて「壽蔵」と名づけ、滝野川に面する洞穴に安置した。

「不相応の所業なり」

お偉方の間でこう噂されていると、重蔵の耳に入った。されば、と重蔵は筆をとった。

「私墓地構えの内洞穴へ差置き候甲冑を着し候石像の儀は、去る寛政十午年蝦夷地御用の為彼の地に差し遣られ候砌」

こう書きだし、

「松前より東海四百余里エトロフ島と申し候、古来日本船更に往来これなき離島に候得ども私儀初めて渡海仕り」

と延々と手柄話を書き立てた長文の弁明書をしたため、先手を打つように寺社奉行松平伯耆守宛に差しだした。

重蔵は学者というより健筆家といったほうがいいかもしれない。とにかく筆まめで、書物奉行だったころ、御書物蔵にある書物を渉猟し、これはと思うものはことごとく筆写し、ときには女房に墨を磨らせつづけて、一昼夜で七冊も筆写したことがあるという。御弓奉行を罷免させられたのは、そのことを咎められてのこととともいわれていた。

長文の弁明書を差しだされて松平伯耆守は辟易し、相手にすると、続けざまに弁明書を読まされて骨が折れるとでも思ったのだろう、石像を見逃しにした。ために「壽蔵」と名づけた石像は、いまでも安置した場所に現存している。吉川弘文館の『国史大辞典』の近藤重蔵の項には、結構滑稽な石像の写真が載せられている。

重蔵は健筆家でかつ自己顕示欲が強いせいだろう。滝野川に住むころには自著が千五百巻余に達し、集めた古書数百巻とともに、滝野川文庫と名づけた書庫に収めて悦に入っていた。

荏原郡三田村の自作農半之助が人を介してやってきて、富士塚云々の話をし、

「なにとぞ近藤様の抱え屋敷ということにしてくださいませ。名義をお貸しください」

と願ったのはそんなころである。

「そういうことならわけもない。遠慮なく名義を使うがいい」

重蔵はあっさりそういったが、素早くあれこれ計算してのことだった。

三

肥後熊本細川家の家来某があるとき、罪を得て逃亡し、重蔵をたよった。窮鳥懐に入れば猟師も殺さずで、重蔵は某をかくまった。

だが、いつまでもかくまいとおせるものではない。一日、長棒駕籠を雇い、従僕をも雇って、東叡山凌雲院の使者と称し、細川邸を訪ね、家老に面会をもとめていった。

「よろしく、某の罪を許されたい。こは法親王の命でもござる」

法親王とは一品法親王輪王寺宮で、日光門跡を兼ねる寛永寺の門跡。代々、京からくだってこられる親王だ。法親王の命とあらば逆らうわけにいかない。家老は抗弁することなくいった。

「承り申した」

そのあと、重蔵は凌雲院の僧正を訪ねていった。

「かくかくしかじかで、凌雲院の使者と詐称し、法親王の命といつわりました。深くお詫びいたします。されど、人命を救うは僧正の務め。法親王にあらせられても、けっして非とはなさりますまい。それでも非だ、許せぬと仰せられるのであれば、腹を切りもうす」

凌雲院僧正もまた辟易していった。

「それはいいことをなされた。法親王におかれましても、あれこれは申されますまい」

ここまでは美談だが、この話には後段がある。凌雲院僧正は法親王の財を管しており、

余財は諸侯や旗本に貸しつけていて、毎年年末に帳簿を締め、法親王の監査に供していた。

むろんなかには年末に返済することになっているのに都合がつかず、延期を願う者もいる。それらの者は五両なり十両を凌雲院僧正の懐にそっと突っ込んでこう願った。

「なにとぞいましばらくお待ちください」

年末になるとよくあることだから、凌雲院僧正も心得たもので、いただく物をいただいたうえで、銅片を紙に包んで封印し、返済してもらうはずの三百両なり、五百両なりということにした。そのことは慣習のようになっていて、僧正がそうすることを誰も怪しまなかった。

重蔵も縁ができ、凌雲院僧正から二百両を借りた。そして年末、僧正を訪れ、いくらかを包んで願った。

「申し訳ありません。返済を延期してください」

「承知しました」

僧正はそう答え、二百両分の紙包みをつくって封印し、傍らの箱に入れた。すると重蔵、つかつかと進みでて、封印した紙包みをむんずと摑んでいった。

「お預かりいたす」

「なにゆえ？」

僧正はびっくりして聞く。重蔵は涼しい顔をしていう。

「貨幣を偽造する者は死罪。知っていわざるもまた同罪。しかるべき役所に届けるのでござる」

「ま、待ってくだされ」

僧正は重蔵の袴の裾を摑んで必死に止める。重蔵は振り払う。

そのあと、ああでもないこうでもないとやりとりがあって、重蔵が借りている二百両の証文を破り捨てることで一件は決着した。ちょうどこの時代の人、河内山宗春もどきのことをやって、重蔵は二百両を踏み倒した。

この数年前、定飛脚問屋嶋屋の金飛脚ともいわれている飛脚が鈴ヶ森で殺され、輸送している三百両を奪い盗られるという事件があった。凌雲院僧正から借りた二百両を踏み倒すようなことをやっていたからだろう、賊は近藤重蔵ではないかという噂がわりとしつこく流れた。

自作農半之助がたのみ事をした相手近藤重蔵は、そんな銭金のことでもとかく問題のある男でもあった。

四

国学者に喜多村信節という人がいて、『ききのまにまに』という随筆にこんな話を書き留めている。

喜多村はある日、目黒祐天寺の宝物を見ようと思いたって家をでた。途中、目黒川の手前三田村に、そこいらでは名高い富士塚があると聞き、喜多村は立ち寄った。

富士塚に登ると頂上になんと、甲冑を着した石像がおいてある。富士塚をおり、蕎麦屋の前で突っ立っている老婆に聞いた。

「なんで頂上に石像が？」

「実は……」

老婆は説明する。近藤重蔵は、滝野川の洞穴に安置した石像「壽蔵」を彫刻した石屋に、そっくりおなじ石像を造らせて頂上においた。あわよくば登山する者に手を合わさせようとしたのだ。

近藤重蔵の名は喜多村も知っている。なんとも大人げないことをするものだと呆れて聞いていると、老婆は指をさす。

「あれをご覧ください」

富士塚の下にこれまた石造りの標柱が立てられていて、なにやら刻んである。近寄って見るとこうある。

「近藤正斎昇天之處」

正斎というのは重蔵の号。ここで近藤重蔵は死んだという標柱である。むろん重蔵はまだ生きている。ふざけた標柱というしかない。

「あそこに黒い板塀の家がございましょう」

老婆はまた指をさす。たしかに見える。

「それがどうかしたのか」

喜多村は聞いた。

「近藤重蔵様はあそこにお住まいなのですが、重蔵様に騙されて、本当に難儀しております」

老婆はそう嘆いてつづける。

「お咄申さば、さまざまのことがございます」

だが喜多村としては、

「（老婆が）いたく恨めるけしき（気色）、聞きてやく（役）なく、おかしからねば」

聞いたところでしょうがないから、

「余所事に紛らして立ち出ぬ」

いいかげんに聞いて立ち去った。

半之助は代官に賄賂を遣うのをけちり、代官からけちをつけられぬよう、富士塚を築く一帯を、控屋敷として重蔵に譲り渡したという証文をこしらえた。一帯は名義上、重蔵のものということにした。そのうえで、あちらこちらから土を運んできて富士塚を築立てた。

もともと見晴らしはよく、築立てた富士塚にのぼって見渡すとはるか南に品川沖、そのまた向こうに房総の山々が遠望できた。絶好の景勝地となった。さらに目黒川から水を引いて蕎麦屋を建て、蕎麦を商った。富士塚は評判になり、登山客が大勢やってきて蕎麦を食っていく。目論(もくろ)みどおり、〝事業〟は大成功した、かに見えた。

そこへ突然重蔵がやってきて、別荘を建てるといって普請をはじめ、建物ができあがると住みついた。そのうえ、毎日のように江戸から客を招いて富士塚を見物させ、あとは決まって蕎麦屋にあがり込み、飲ませ食わせした。勘定を払ってくれるのなら文句はない。だが一銭も払わない。

半之助にすれば「冗談じゃない」ということになる。喜多村信節が立ち寄ったのはそんなころだ。半之助の家族は、喜多村信節が老婆といった女房、長男林太郎、林太郎の女房、年端のいかぬ赤ん坊の五人だが、親子二代の夫婦は重蔵の所業に憤った。重蔵が客を連れて蕎麦屋にあがってくると、露骨に嫌な顔をした。重蔵と顔を合わせてもろく

ろく口を利かなくなった。今度は重蔵が憤った。

「誰の屋敷と心得おる」

といって庭師を呼んだ。

蕎麦屋は、目黒川から水を引き、富士塚を借景に座敷を造っている。その座敷と富士塚の間に、重蔵は竹矢来(たけやらい)を雁字搦(がんじがら)めに張り巡らせてしまった。座敷にすわると、座敷牢(ろう)かなにかに閉じ込められている気分である。客は気味悪がって座敷にあがらなくなった。

「冗談じゃありません」

半之助は捩(ね)じ込んだが、いかんせん地所は重蔵に譲り渡したことになっている。

「それがしの屋敷だ。なにをしようとそれがしの勝手である」

重蔵はこういってとりあわない。

「恐れながら」

半之助は代官所に駆け込んだ。代官中村八太夫にすれば、なにをいまさらだ。

「図々(ずうずう)しいことを申すでない」

撥ねつける。

富士塚には引きつづき大勢の人が登山にきているが、登山料は徴収していない。蕎麦を商って儲けるつもりで、現に大儲けしていたのだが、不格好にも竹矢来を張り巡らされ、蕎麦屋への客足が途絶えて、半之助は途方に暮れた。

五

「どうか、竹矢来をとり払ってください」
気をとりなおして、半之助は重蔵に頭をさげた。
「ならぬ」
意地でもとり払うものかとばかりに重蔵は突っぱねる。
「とり払ってください」「ならぬ」とやりとりをして、なんと二年が過ぎた。
半之助はその間にも、何度も代官所に出向いて訴えた。
「なにとぞ、竹矢来をとり払うようにと、近藤様に掛け合ってくださいませ」
すると重蔵は逆襲した。
「我が屋敷地内のことについて、隣接せる百姓半之助があれこれ理不尽なことを申して困っており申す。理不尽を申さぬように、しかと申しつけられたい」
このような趣旨の目安（訴状）を代官所に提出した。非はどう見ても重蔵にある。しかし経緯はどうあれ、地所はたしかに重蔵のものだ。目安は受けつけざるを得ない。受けつけておいて、半之助を呼んでいった。
「争うとおぬしが負ける。いちおう詫びておけ」

仕方がない。半之助は泣く泣く詫びた。そのあと、代官所の手代、下っ端だが歴とした幕臣身分の者が重蔵の家へ足を運んでいった。
「半之助も困り果てております。竹矢来をとり払ってやっていただけませんか」
手代には、ごねていると思われたくない。重蔵はすましていった。
「あい分かった。とり払おう」
手代はその旨、半之助に伝えた。
だが重蔵は知らぬ顔の半兵衛である。そんな約束をしたかいなあというような顔をして、放ったらかしにしている。
「竹矢来をとり払ってください」
半之助は執拗に迫った。
半之助には、葺手町与兵衛店に所帯を構えていた忠兵衛という次男がいた。忠兵衛は心配してやってきて、このところずっと実家に寝泊まりしており、半之助と一緒に重蔵に掛け合った。
「あい分かった」
重蔵は答えていった。
「とり払おう。ただしこちらには人手がない。そちらで勝手次第にとり払え」
「そういうことでしたら、さっそく明日にでもとり払います。ありがとうございまし

た」

半之助は愁眉を開いて帰っていった。

この親にしてこの子ありで、重蔵には富蔵という不束な倅がいた。

富蔵は、残されている記録の断片によると、どこの誰のかは分からないのだが、いずれにしろ他人の「具足匱の錠前を捩じ切り、入れ置き候用金子三十両を盗みと」って、武者修業と称して東海道をのぼった。ついでに両掛に、重蔵が拝領した御紋服（葵の御紋のついた服）を詰めていき、御紋服を着て京の二条新地の遊所で遊んだりして大坂へ出向き、四国へ渡ろうと、小倉からやってきた船に乗っているところを捕まって江戸へ護送され、こう申し渡された。

「御目見も相済み候身分にもこれあるまじき儀、殊に金子を盗み取り候条、武士に似合わず仕形……、第一公儀へ対し奉り不届き至極につき、切腹申しつくべく候得ども」

本来なら切腹を申しつけるところだが、

「一体、愚昧の生質（性質）かつ阿耨院様、清静院様御慈愛なられ候儀につき」

阿耨院様、清静院様というのは髪をおろした大奥の女のようで、富蔵はどうやら子供のころ、大勢いた若君の誰かのお相手にあがっていたようで、一体愚昧（馬鹿）で、阿耨院様、清静院様らとの縁もあるから、

「格別の勘弁を以てこの度はまず糾明におよばず候」

このたびは知らぬ顔をしておいてやるということになった。そんな〝前科持ち〟の二十五歳の倅が、傍らで聞いていて重蔵にいう。

「竹矢来をとり払わせるなど、正気でおっしゃってるのですか？」

「誰が」

重蔵は笑ってつづける。

「とり払わせはせぬ」

「でもいま、半之助らに、そちらで勝手次第にとり払えとおっしゃったではないですか」

「よいか、半之助一家はよくよく己に楯をついた」

自分の所業は棚にあげておいて、重蔵はそう思っている。

「許し難い」

重蔵はヨフトホヘル状況にある。

「では、どうなさるおつもりです」

「殺す」

「なんとおっしゃいました？」

富蔵はびっくりして聞いた。

「殺すのだ。放っておけば、いよいよつけあがり、己の面目は丸つぶれになる」

「殺すって、どうやって？」
「明日、それがしは菩提寺のご住職を訪ねて、小石川の氷川様に詣でる」
「なぜ？」
「現場に居合わせぬためだ」
「すると？」
「殺すのはそなただ。それがしが殺すと、遺恨が重なってのことと思われる。おぬしだと、単なる行き違いがあってのことですむ」
先に引いた富蔵への申し渡し状は「この度はまず糾明におよばず候」のあと、こうつづけている。
「ついては其方、心願の通り武術修業のため、柴田勘丈方へ門弟に差遣し候間、万事勘丈指図の通り違背いたす間敷候」
富蔵はもともと刀を振りまわすのが好きだったほうで、事件を起こしてから、柴田勘丈なる剣術師匠の許で修業に励んでいた。心得は十分にある。それに「一体、愚昧の生質」でもある。だから、
「殺すのはよろしいのですが……」
とさらりといって聞く。
「殺すとただですみますまい」

「無礼討ちということにすればいい。公儀にはそう届けでる」
無礼討ちは『御定書』にこうある。
「足軽体に候とも、軽き町人百姓の身として法外の雑言等不届きの仕形、止むを得ず切り殺し候もの。
吟味の上、紛れ無きにおいては、構え無し」
足軽体の者であっても、町人百姓から法外の雑言等不届きがあって、止むを得ず切り殺した場合は〝構え無し〟無罪であると。
「殺すきっかけは？」
「竹矢来をとり払わせぬように仕向け、悪態をつかせて、無礼討ちにするのだ。そうだなあ。まず、こう書いた証文を差しだせといえ」
といって重蔵は筆をとり、すらすらとしたためた。
「ご慈悲を以て敷地をお借りし、富士塚を築立てて蕎麦屋を商わせていただいており、冥加至極に存じます。お陰様にて、このたび竹矢来をとり払っていただくことになり、ありがたき仕合わせに存じます。つきましては、二度と無礼は働きませぬ。そうお誓い申しあげます。またお気に染まぬことをいたして、ふたたび竹矢来をとりつけられるようなことがあっても異存は申しませぬ」
重蔵は紙片を富蔵に渡していう。

「こう書いた証文を差しだせ。でなければとり払わせぬ。こういうのだ」
「なるほどそれは名案。半之助らは、そんな証文はとうてい差しだせませぬというに違いありません。そして、差しだせ、差しだせませぬ、とやりとりして、無礼者とやるわけですね」
「そうだ。だからそうだな、明日朝一番に書面を遣わし、しかじかの証文を差しだせといってやれ」
「そうします」
「それで」
と重蔵はつづける。
「半之助、長男林太郎、次男忠兵衛の三人、ほかに女房二人、五人全員を討ち果たせ。討ち洩らすでない。死人に口なしにするのだ」
「となると、一人ではとても」
「高井庄五郎、奥住伊三郎、助十郎、文助の四人を残しておく」
高井庄五郎と奥住伊三郎は家来、助十郎と文助は中間（従僕）だ。
「高井庄五郎はそこそこ遣える。五人もいれば、なんとかなるだろう」
富蔵はうなずいていった。
「なんとかしてみせます」

六

半之助はまあまあの自作農だから、金次郎という召使と文蔵という日雇いを常雇いしていた。半之助、林太郎、忠兵衛と合わせると五人になる。竹矢来のとり払いくらいなら、五人で十分だ。だが重蔵は一筋縄ではいかない。それに馬鹿息子の富蔵もいる。知り合いの渋谷広尾町甚兵衛店の勘五郎と、兼房町五人組持店の藤助を応援にたのんだ。
当日五月十八日の朝、
どん、どん
夜が白々と明け、女房二人が飯の支度にとりかかっていると、誰かが表の戸を叩く。女房と顔を見合わせて半之助がいった。
「おらがでる」
半之助は戸を開けた。中間の助十郎だ。半之助は不吉な予感を覚えながら聞いた。
「こんなに朝早く、なんです？」
「富蔵様からの書面だ」
「殿様（重蔵）は」
「御殿様は今日、おでかけになられた」

なぜ重蔵が急に外出することになったのだろうかと、半之助は首をひねりながら書面を受けとった。宛名はこのところ掛け合うことが多かった忠兵衛となっている。だがまあそんなことはどうでもよい。半之助は書面を開けた。

「……しかじかの証文を差しだせ。でなければとり払うことはあいならぬ」

とある。要するに、かつてのようにただで飲み食いしても文句はいわせない。いえば、立ち所に竹矢来を構えなおすという内容の証文を書いてよこせとある。

半之助は重蔵宅までかけていって、口を尖らせて富蔵にいった。

「おっしゃるような証文を書いてお渡しするわけにはまいりません。だいいち約束がちがいます。殿様とはこんな約束などしておりません」

富蔵はすましていう。

「父上は今日小用があって江戸に出向かれたのだが、出向かれる前にそういいおかれたのだ」

「今日、とり払っていいというお許しを殿様からいただいております。人手も集めております。約束どおりにとり払わせていただきます」

「だからとり払っていいと申しておるではないか。ただその前に証文を差しだせ」

「失礼します」

半之助は家に戻って、いった。

「やはり敵は無理難題を用意しておった」

「どうされます？」

林太郎と忠兵衛が聞く。

「どうしたらいいと思う？」

思案もつきて、半之助は逆に聞いた。

「重蔵がとり払っていいといったのです。富蔵がなにをいおうと関係ありません。強行しましょう」

忠兵衛がいう。

「富蔵一人ではない。家来の高井庄五郎、奥住伊三郎、従僕の助十郎、文助の都合五人がおる。重蔵もひょっとしたら家にいるのかもしれない」

半之助がそういい、林太郎が不安げに眉を寄せていう。

「重蔵がいると向こうは六人。こちらは七人だが、うち三人は年寄り。向こうは刀を腰に差していることだし、揉めると危ない」

「だがここでじっとしていると重蔵や富蔵の思う壺。とにかく竹矢来まで押しだしていって様子をみよう。あるいは富蔵は重蔵に断りなしにいいかげんなことを申しているのかもしれず、とり崩しにかかってもなにもいわないかもしれない」

半之助がそういい、七人は腹ごしらえして、竹矢来まで押しだした。そうと知って、

富蔵側五人も押しだしてくる。
「とり払います。いいですね」
半之助がいった。
「その前に証文を書け」
富蔵が応えていう。
「そんなもの、書けません。書けるわけがない。だいいちそんな約束などしていない」
富蔵は睨みつけていう。
「書けぬのなら、とり崩しはあいならぬ」
とり崩そうとすると、たちまち富蔵は襲いかかってきそうな気配である。とても手をつけられそうにない。さりとてすごすご引きさがるわけにもいかない。
半之助側が見たとおり、富蔵は誰かが竹矢来に手をかければ、即座に飛びかかるつもりでいた。七人対五人が睨み合ったまま、刻々と時は移った。
ごーん
祐天寺の鐘が遠くに聞こえる。昼だ。
「飯にしよう」
半之助は家に向かい、林太郎や忠兵衛らがつづく。富蔵も七人が家に入ったのを見届けて家に向かった。

「飯だ」
と半之助はいって土間にすわる。
「お前様が欲を掻いて、お代官様への賂をけちるから、こんなことになったのです」
半之助の女房がいつものように愚痴る。
「まさか、あのようなお方だとは思わなかったのだ。鬼、でなければ蛇だ。あのようなお方はこの世に二人とおられぬ」
「また愚かなことに名義上だけだなどといって、地所の大半を近藤様の名義にしてしまった。ご先祖様からの大事な地所を。粗忽といって、これほどの粗忽はない」
「うるさい！」
自分でも粗忽だったと悔やんでも悔やみきれない思いでいるだけに、半之助としても女房に責め立てられるとつらい。
「とにかく辛抱強く、粘りに粘り、相手が音をあげて引きあげるのを待って、竹矢来をとり払う。そうするしかありません」
林太郎がそういい、食事をすませ、七人はまた竹矢来のところへ押しだした。
富蔵ら五人も負けじと押しだしてきたが、昼飯を食っている間に富蔵はこう考えた。
いずれにしろ無礼討ちにするには、半之助らが勝手にとり崩しにかかったという状況証拠を残しておかなければならない。とり崩してもいないのに、無礼討ちはおかしい。

富蔵は半之助らにいった。
「じゃあまあ、とり崩すがいい。証文のことはそのあとのことにしよう」
半之助は富蔵の魂胆を知らない。富蔵がゆずったと思い、ほっとして林太郎らにいった。
「今日中にはとり払える。急ごう」
半之助らは作業にとりかかった。
作業半ば、半分くらいとり払ったころ、富蔵は押しだしていった。
「さあ、そろそろ証文をよこしてもらおうか」
半之助は首をひねっていう。
「証文のことは、あとのことにしようとおっしゃったではありませんか」
「たしかにそういったが思いなおした。やはり先に証文をいただく。いまこの場で差しだせ」
「差しだせませぬ」
「盗っ人猛々しいことを申す」
富蔵は挑発した。
「ここはもともと我が屋敷地。盗っ人はそっちじゃないですか」
半之助は挑発に乗った。

「なにィ。聞き捨てならぬ」
富蔵は見えを切る。
「だったらどうしようってんです」
半之助は開きなおるようにいった。
「こうだ」
というと、富蔵は抜き打ちざまに、
「エイ！」
と刀を振りおろした。
「ぎゃあー！」
半之助は猫が踏んづけられたような叫び声をあげて引っ繰り返った。即死だ。
「つぎはおのれだ」
半之助の側でぐちぐちと文句を並べていた林太郎に向かって、富蔵は構えた。
「うへえー」
林太郎はびっくりして逃げる。弟の忠兵衛もその他のみんなもだ。
「忠兵衛を討て。討ち洩らすな！」
富蔵は家来の高井庄五郎に命じておいて、血刀をひっさげて林太郎を追う。日雇いの文蔵と手伝いの藤助が前を逃げている。追いつきざまに、

「ヤア！」
と富蔵は斬りつけた。狙いは彼らの命ではない。林太郎だ。林太郎は家に逃げ込んだ。文蔵と藤助の二人は放っておいて、富蔵は家にあがりこみ、
「思い知れ！」
と背後から林太郎を斬って捨てた。
「人殺しィ」
林太郎の子、孫になる赤ん坊を背負っている半之助の女房が金切り声をあげる。富蔵は返り血を浴びて夜叉の形相だ。
「うるさい」
女房を突き殺し、ついでに赤ん坊をも手にかけた。
「ぎゃあー」
赤ん坊は断末魔の声をあげ、押入に逃げ込んでいた赤ん坊の母、林太郎の女房がびっくりして、
「きゃあー」
と声をあげる。
「そんなところに隠れておったか」
富蔵は唐紙を蹴破り、林太郎の女房をも突き殺した。富蔵はほとんど瞬時に、赤ん坊を含めて半之助夫婦、林太郎夫婦を手にかけて表にでた。高井庄五郎が肩で息をしている。
「忠兵衛は？」
富蔵が聞き、庄五郎は答えた。
「仕留めました」

七

重蔵には従僕の助十郎が走って事態を知らせた。重蔵はいった。
「でかした。よくやった」
重蔵は小普請組吉田内蔵頭の支配を受けている。なにはともあれ、吉田内蔵頭に届けなければならない。三田村の屋敷に戻り、富蔵から顚末を聞いた。
死人に口なしだ。都合のいいように、富蔵が提出する届けをおよそこう仕立てあげた。
「控屋敷に隣接して百姓半之助が住んでおり、地境のことで争いが生じましたので、父重蔵が半之助を相手どって吟味を願いますと、半之助は心得違いをいたしましたと詫びを入れました。そこで吟味願いをとりさげ、これ以上ごたごたしないように、往来できないよう竹矢来を設けました。ところが半之助父子は毎度、竹矢来の向こうから悪口雑

言におよびます」

重蔵はできるだけ部外者という立場にしておいたほうがいい。重蔵はふだん控屋敷に住んでいなかったということにして、

「重蔵が（控屋敷に）引き移ってきたら、どのような事態が生じるか予測がつきません。それがし（富蔵）は心痛のあまり、半之助父子がいよいよ不法におよべば討ち捨ててもよろしいかと、重蔵に聞きました。重蔵はなるべくなら堪忍するように、もし捨て置き難い不法におよべば、搦め捕るように、それで万一手に余り、討ち捨てるようなことになったら倅どもは遺恨を含むから、父子三人とも討ち果たすようにと申しました。ですがいずれにしろ和熟するつもりで、以後〝不法にはおよばない〟旨の証文を差しだせば竹矢来をとり払ってよいと申し、何度も話し合いました。だが、相手は承知いたしません」

この届けでは、竹矢来を設けたのは地境の紛争を避けるためらしいというのは分かるが、ではどうして半之助父子が竹矢来をとり払ってくれといっているのかが、いっこうに分からない。そこのところにはあえて触れずにつづける。

「当五月十八日のこと、相手は突如、竹矢来をとり崩しにかかり、なにをいたすと叱りつけますと、やにわに竹矢来の垣根を乗り越えて乱入し、狼藉を働きます。そこで打ち捨てがたく、かような仕儀におよびました」

六人を惨殺したのは事実で隠しようもなく、相手がかかってきたから止むなく迎え討ったのだと、どういう順で殺したかを書いて届けを締めくくった。

重蔵はすぐさま届けを小普請組支配吉田内蔵頭に提出。富蔵や高井庄五郎らはとりあえず、吉田内蔵頭に預けられた。

事件があったのは文政九年の五月十八日。富蔵らが預けられたのが二十二日。翌月六月三日に、富蔵と重蔵は揚り座敷に、高井庄五郎は揚り屋に、従僕の助十郎らは牢に入れられた。いずれも小伝馬町の牢屋内。揚り座敷は旗本用、揚り屋は御家人や陪臣用の牢である。

そのうえで審理がはじめられたのだが、やはり死人に口なしだった。ほぼ富蔵と重蔵のいい分どおりに審理はすすめられたが、十月六日、富蔵に、

「たとえ父のためと存じ候とも、如何ようにも取り計らい方これあるべくところ、事を設け、罪なき女子供まで多数人殺害せしめ候段、残忍の所業、そのうえ見分の節、有り合わせの棒を（半之助の）死骸の脇に差し置き、半之助持参候趣に、家来に申し立たせ段候、彼是とり拵え候仕形、御旗本の倅にこれ有る間敷く、不届きの至りに候」

という理由で、

「依って遠島仰せつけられ候ものなり」

と遠島が申し渡された。

重蔵はこうだ。

「（富蔵が）其の方へは（半之助父子らが）竹矢来等とり崩して乱入、狼藉手向い致し候につき、右始末におよび候段（に）とり繕い、相違の段（嘘を）申し聞け候を」

兼房町五人組持店藤助は重傷を負ったが、ともあれ現場にいた四人は生きている。さすがに半之助父子らが竹矢来をとり崩して乱入、狼藉を働いたという嘘は通用しなかった。

「（富蔵の）不都合の次第、まったく申し偽り候儀と存じながら、伜の儀、無事に相済み候よう致したく存じ、そのまま相違（嘘）の届け差しだし候段、御後暗敷致し方、不届きの至りに候」

という理由で、

「依って分部左京亮へ御預け仰せつけられ候ものなり」

近江大溝（滋賀県高島町）二万石の大名分部左京亮に〝預け〟が申し渡された。

忠兵衛を殺した家来の高井庄五郎は、主君の命というのが考慮されて江戸十里四方追放。喜多村信節は先の記述をこうつづけている。

「さて両三年経ちて」

喜多村信節が半之助の女房から愚痴を聞いたときから数えると三年が経っていた。

「このごろ聞くに、近藤氏父子にて隣家の百姓が、家内男女老少嬰児まで残らず殺害し

て、相手口なく証拠もなければ、（近藤父子の）我がいうままにて御糺済み。正斎は何れへか御預けになり、子息のみ配流せらる。親の罪を負ひけるなるべし」

富蔵が親の罪を負った、つまり重蔵の所業だったとしている。『藤岡屋日記』の著者藤岡屋由蔵もこうしたためて、重蔵の所業としている。

「（半之助が）日雇い相頼み、およそ半分ほども（竹矢来を）掘り抜き候ところに、重蔵家来引き連れ駆け来り、我が屋敷の垣根を理不尽にとり払い候段不届き至極と、抜き打ちに日雇い（と）半九郎（半之助）を切り殺し」

重蔵は現場に居合わせないという小細工を弄したが、なに、重蔵こそが張本人と世間は見ていた。

もっとも預けは終身禁固刑のようなもので刑としては重い。富蔵も遠島。

富蔵は無礼討ちで構いなし。重蔵本人は現場にいなかったから無関係。おなじくお構いなしと高を括っていた重蔵にとっては、とんだ計算違いだった。

無礼討ちで無罪になるためには、百姓町人ら下輩の「法外の雑言」などの無礼があって、武士がそれに反撃したということが「紛れ無い」こと、いいかえれば立証する目撃者がいなければならない。でなければ遠島という判例があった。重蔵はそれを知らず、富蔵にはその判例が適用された。

一方、原因はすべて重蔵がつくっており、結果、「罪なき女子供まで多数人殺害せし

め候段、残忍の所業」となったことを公儀も見逃すわけにいかなかった。これで重蔵が関係なしでは世間が承知しない。重蔵は預けとされた。

預けは預けさせられるほうがえらく金がかかって迷惑するのだが、重蔵は翌年の二月に大溝に送られ、外から順に皮肉にも高さ一丈五尺の竹矢来、高さ一丈の木柵、高さ一丈の高塀と三重にとり囲まれた四間八間の獄舎の四畳半の畳の間に閉じ込められ、一年と数カ月後に病死した。ヨフトホヘル男だ。こんなはずではなかったと、ぼやきつづけながら死んでいったのだろう。

もちろん江戸から検使の役人が出向いた。死骸は塩詰めにしてあるが真夏のこととて、傷みが早い。役人がやってきて包みを開くと、猛烈な悪臭が襲ってきて、役人は、

「もうよい、もうよい」

といってろくろく死骸をたしかめなかった。ちなみに頭髪や口髭はかなり伸びていて、爪も一寸余にもなっていたという。

遠島とされ、八丈島に流された富蔵は、判決後三十三年ののちの万延元年（一八六〇）、文恭院（十一代将軍家斉）様の十三回忌に赦を申し渡されたが、そのまま八丈島に残り、明治の初年に東京にやってきたが島に帰り、明治十四年に大溝で父重蔵の法要をいとなんだあと、また島に帰ったのだという。島流しの身は生きていくのがやっとというほど辛いのだが、女房、子供もできて、島を後にするわけにはいかなかったのだろう。

重　怨思の祐定

一

どこの世界にもいじめはある。江戸幕府の役人の世界にもあり、いじめのご多分に洩れず、これまた陰湿で執拗だった。

ご存じ鬼平こと長谷川平蔵をライバル視し、平蔵の後任の火盗改に登用されたこともある四百石取りの旗本に森山源五郎孝盛という男がいた。森山孝盛は随筆を二編書き残しているのだが、それにいじめの実態をいくつか紹介している。

その一つ――。

森山は彼の表現によると「俗にいふ燈心もて竹の根を掘る（苦労して効のないたとえ）如く」にして就職運動に励み、ようやく小普請組組頭に登用された。このことは小普請組組頭にかぎらない。どこの御役にもあったことだが、御役の仲間入りすると同役を自宅に招いて振る舞う仕来りになっていた。小普請組組頭の同役は二十三人。森山も同役二十三人を招いて振る舞ったのだが、振る舞いには、料理はどこそこの仕出し屋、酒は数奇屋河岸の矢野の「山の印」、菓子は鈴木越後と決まりがあった。それで恐ろしいことに、たとえば鈴木越後の菓子代だけで二十両、合計四十五両がかかった。

米百俵がおよそ三十五両の時代で、百俵取りというとまずまずの御家人だが、振る舞いの支出は彼らの年収をはるかにうわまわった。

幕府では御役に就く新入りを先輩が指導し、指導する先輩を師匠番といった。もちろん森山も師匠番についたのだが、森山が小普請組組頭になってしばらく経ってのこと。永井求馬なる者がおなじく小普請組組頭に仲間入りして、船田兵左衛門が師匠番になった。恒例のもてなしをどうするかも船田が指導した。自宅に招いて宴がはじまった。すると、先輩同僚の一人がこういいだした。

「この羊羹は味が粗い。鈴木越後のではないのではないか」

これに同役数人が、

「たしかにおかしい。鈴木越後のはもっと味が濃やかだ」

と口々に同調して、船田と永井を座敷の真ん中にすわらせてなじった。

「鈴木越後のではないのであろう。どうなんだ」

永井はたまらず白状した。

「おっしゃるとおりです。羊羹は鈴木越後ではなく、金沢丹後であつらえました」

金沢丹後の羊羹は安い。すわこそ、と先輩同僚は鬼の首でもとったように責め立てた。

「なにゆえ、そのようなことをいたした」

「有り体に申せ」

「それは……」

永井も船田もいい渋る。

「いわずば村八分にする」

仲間外れにするといって迫る。

理由は聞かずとも分かっている。金がないからで、永井が船田に事情を打ち明け、ならばと船田が金沢丹後のにしたらどうかと教えてのことだ。しかしそうとは永井も船田も口にしにくい。なのに同役はどうあっても吐かせようとしてゆずらない。たまらず永井がまたも白状した。

「金がなかったからです」

「よし。だったら手を突いて謝れ」

先輩同僚はさらに迫る。

「申し訳ありませんでした」

永井も師匠番の船田も手を突いて謝った。

大の男の、歴とした武士がやることではない。幕臣はいつしかここまで腐りきっていたのだが、おなじようなことがあって謝らない者がいた。先輩同僚はおさまらない。杯盤狼藉におよび、嘘のような話だが、ついでにお椀に糞までひった。

小普請組組頭という御役は、御役に就いていない旗本御家人が所属する組の頭で、組頭はこんないじめも日常茶飯事におこっていた。

御家人は多くが御切米という俸禄を受け取って暮らしを立てており、春夏冬三季の米を受け取る時期がくると、小普請組組頭から札（御切米請取手形）を頂戴し、蔵前にある札差のところに持参して必要な分だけ米を受け取り、残りは金に換えた。

小普請組は地域ごとに編成されているのではない。アトランダムだ。それゆえ組頭が江戸の西、本人が江戸の東に住んでいるということもあり、そのような場合、札を受け取るだけでも一日がかりを余儀なくされたのだが、糞意地の悪い小普請組組頭になると、やれ「例文と違う」「書体が分からない」などといって札の支給申請書を突き返した。なかには「今日は忙しい」といって対面もせずに追い返す者もいた。内職仕事に追われている者も少なくない。むろんそれを知っていてのことだ。

以下は森山の時代より三、四十年ほど後の時代の城中であった事件――。

町奉行にまで昇った矢部駿河守定謙という男がいた。矢部は天保の改革をおこなった老中水野越前守忠邦の恨みを買って、改易のうえ伊勢桑名松平家に御預に処され、餓死という形をとって自害するのだが、矢部が御小姓組番士という御役に採用されてすぐのこと。宿直の順番がまわってきた。

かつて宿直のときは新入りが汁番、弁当番などといって夜食の用意をしたが、出来不出来があっていざこざが絶えず、仕出し屋からまとめて一汁一菜付きの弁当をとるようになっていたのだが、それでも夜中になると腹が減る。そんなとき古参の連中は決まっ

て新入りに命じた。

「粥をつくれ」

新入りは台所にいって残り飯を調達し、鍋に入れて水を差しくわえ、火にかけ、椀に盛ってうやうやしく、

「どうぞ」

と差しだし、古参は傲然と受け取って食った。だけでなく、ちょっとでも手抜かり手違いがあると、耐えがたいほどに面罵した。

話に聞いて嫌な風習だと矢部はかねて不快に思っていたのだが、ついに自分にも順番がまわってきた。

「おい、新入り、粥をつくれ」

矢部はこう命じられた。

この頃、蠟燭は貴重品だ。城中でもおもに照明には油皿を使っていた。皿に菜種油を注ぎ、浸した燈心を灯して明かりをとるといういたって簡単な仕組みのものをだ。矢部はその油皿の油を鍋に落としてかきまぜ、古参の連中に差しだした。連中はそうとは知らずに粥を口に入れた。口に合うわけがない。

「げえー！」

「なんだ、これは！」

全員がぺっぺっと吐きだしていった。

「油がまじっている」

「なんでこんな粗忽なことを」

「許すべからず」

連中は矢部を引き据えてなじった。覚悟のうえのことで、矢部は一言も抗弁せず、翌朝、城をさがると、番頭の家に直行して辞職を申しでた。

この話はとりもなおさず、古参連中は暴君のように振る舞い、新入りは下僕のようにつかえるということが日常茶飯事におこなわれていたことを教えてくれるのだが、矢部と違って、ほとんどの新入りはこのような古参連中の横暴やいじめに耐えた。現代でいうなら体育会、一昔前でいうなら陸軍内務班にあった構図が、そっくりそのまま幕府役人の世界にもあった。

まずそんな背景があった。だけでなく親が関わる依怙贔屓があったものだから、このすさまじい営中殺傷事件は、むしろ起こるべくして起きたといえるのかもしれない。

二

十八松平という。幕臣に松平姓は多かった。そのうちの桜井松平といえば、先祖が徳

川家に背いて弓を引いたことで知られている。寛政時代に大名、旗本、御家人の家譜を編纂した『寛政重修諸家譜』にこうある。

「清康君御事ありし後（家康の祖父徳川清康が家来に殺されて不慮の死を遂げた後）、（桜井松平家の祖松平信定は）織田備後守信秀（信長の父）と志を通じ、岡崎を押領するの企ありしかど、広忠卿（家康の父）御帰城におよび、降をこひて諸士とおなじく岡崎に出仕す」

家譜は大名、旗本、御家人が書いて提出したものを幕府が編纂したもので、この家譜の差出人はむろん桜井松平家の現当主である。先祖がかつて徳川家に背いて弓を引いたなどということは書きにくいことだが、書かざるをえなかったほどの周知の事実だったわけで、そう威張れた家系ではなかったのだが、されども十八松平の一つである。時は移ってこの時代、当主松平忠誨は尼崎に城を持つ四万石の大名になっていた。

そしてむろんこの桜井松平家にも分家がいっぱいあった。その一つ、分家の分家が廩米（御切米のこと）三百俵を弟に分け与えてさらに分家させた松平家が、本事件の主人公松平外記の松平家で、この松平家は旗本とはいえ知行所を持たない、御家人のような御切米取りの旗本だった。

御切米三百俵取りと知行三百石取りとは同等だ。御切米取りを知行取りになおす場合、三百俵取りなら三百石取りに、二百俵取りなら二百石取りになおした。とはいえ実質の

実入りは違った。知行取りは知行所の百姓に無理がいえた。百姓を江戸に呼んで私的に使うこともできた。

〝泣く子と地頭（旗本）には勝てぬ〟という俚言はここから生まれているのだが、御切米取りは知行取りのように融通をきかせられなかった。それに三百俵取りというと年収がほぼ百両。桜井松平家一族の末席に名を連ねていたとはいえ、百両の年収では食うのがやっとだった。

外記の松平家は代々御番入する家筋である。御番入とは旗本が御小姓組御番士や御書院御番士などに登用してもらうことで、旗本が出世コースを這いあがっていくにはまず御番入を果たさなければならなかったのだが、外記の父頼母も天明六年（一七八六）、二十一歳で御小姓組御番士となった。そして『寛政重修諸家譜』が編纂されるに当たっては、自分の履歴をこう書き記して提出している。

「しばしば騎射を勤め、あるいは的を射、あるいは鷹狩のとき鳥を射て、時服黄金等を賜る」

厩に馬を繋ぐどころか馬に乗れる武士が少なかった時代、頼母は騎射を勤め、的を射、鷹狩のとき鳥を射たというのである。それで時服黄金等をたまわったというから、運動神経は相当に発達していたようだが、おつむのほうはいまいちのようだった。

ふつう優秀な旗本は御番士から他部署に転じたうえで御目付に登用され、さらに遠国

奉行、小普請奉行、普請奉行などを経て、勘定奉行、町奉行へと累進した。頼母はこの官僚コースから外れ、三十八歳のときに将軍世子家慶がいる西丸の御小納戸に転出した。

御小納戸は将軍や将軍世子の理髪、食膳など身のまわりの世話をする役で、小姓（御小姓組御番士とはことなる）とほぼおなじ存在。千石以下の御役で、禄高が五百石から千石には御役料として三百俵がつき、五百石以下は足高されて五百石高となった。頼母は家禄が三百俵だから二百俵がプラスされた。年収でざっと、百七十両となり、暮らし向きはいくぶん楽になった。

時は移って外記に妻を迎える話が持ちあがった。所帯が二つになる。金がかかる。そこで頼母はこう考えた。

「右大将様（将軍世子家慶）にお願いして、伜を御番入させていただこう」

一口に御番入といったが、誰も彼もが採用されたわけではない。御番入できない旗本も少なくなかった。まして伜の外記は、長男で跡取りとはいえ部屋住みだ。部屋住みの御番入などふつうは認められなかった。

もちろん例外はあった。

寛政の改革以降、幕府の文化事業を一手に担った林述斎という大学者がいた。『寛政重修諸家譜』も述斎が手掛けた文化事業の一つだが、述斎の外孫で幕末の日本外交をリードした岩瀬肥後守忠震など例外の一人だ。岩瀬は養父が現役なのに御番入した。学問所での学問の実績が認められての採用で、これは本人が優秀だったケース。ほかにも大奥や将軍、また将軍世子などに願って認めてもらうというケースもあった。

頼母はふだん右大将様の身のまわりに仕えていることでもあり、甘えようとしたのだ。

御番入すれば御役料三百俵がいただける。部屋住みの身でもだ。三百俵は父頼母がもらっている家禄とおなじで、御役料をいただければおなじ屋敷に同居していることでもあり、妻帯しても独立して生計をいとなめる。頼母は、

「恐れ入り奉りまするが……」

と右大将家慶に伜外記の御番入を願った。

家慶の父、十一代将軍家斉は野放図なところはあったが性格は穏やかで優しかった。家慶は思慮は深くなかったが、父とおなじく穏やかで優しかった。

「たやすいこと」

とあっさり応じた。頼母の願いを聞き届けた。

西丸の御書院御番は四組あり、外記は番頭酒井山城守の三番組の御番士に採用された。

森山孝盛――長谷川平蔵をライバル視した男だ――は両御番（御書院御番と御小姓組御番の総称）ではなく大御番に番入することによって役人生活をはじめている。大御番士は両御番士とおなじ番士であるが両御番士に比べると格が落ちた。また勤務も上方在番で、全員単身赴任だったが、最初の単身赴任時の様子を森山はこう書き記している。

「さて一とせ（年）がほど御城のうちにありて隊中のならわしを見るに、一組五十人を組頭四人にて十一人ないし十二人に割って預かれり。一組のうち、年久敷勤むるものは伴頭（副組頭）とて、（組の）十一、二人のことすべて万のことを取り扱ふに、彼伴頭に向ひて頭をあぐる者さらになし。敬ひ恐れること神仏をも越えたり。毎日彼に行て安否をとひ……。朝夕彼伴頭にへつらふこと、権門の出入にも増れり。芸は下手なれども上手とおもねり、非は理と称してへつらひ敬ふ」

外記が就職した西丸御書院御番もさして変わりはない。また古参連中の音に聞こえた横暴に新入りいびりもある。頼母は自身がかつて御小姓組御番士だっただけにそのことはよく知っている。

「よいか、よく聞け」

と営中での仕来りをはじめ、古参の横暴やいじめの対処法などを耳にタコができるほどに教えた。

外記は御番士に採用されたという晴れがましい気分に胸を高鳴らせる一方、予想される横暴やいじめに肝を冷やしながら登城した。

御書院御番士や御小姓組御番士は若手だけの集団ではない。他の部署に転じることができないでいた四十代、五十代といった古参がごろごろいる集団で、彼らにも長男の跡取りがいる。しかも家禄三百俵取りなどというのはごく稀で、ほとんどが八百石、千石、

千五百石といった高禄の知行取りだ。それだけに、「なんで、三百俵取りの頼母の伜が」という思いがある。外記に白い目を向けた。

とはいえ外記の御番入は西丸の御大将、右大将様のお声がかりだ。露骨にいじめるわけにもいかない。そこで彼らは無視するという態度をとった。年齢の近い同僚も古参に気を使い、古参の目を憚って、外記に対して心を開かなかった。よそよそしく振る舞った。

もちろん外記は恒例になっている同僚五十人を自宅に招いて振る舞いもした。だがそれで、古参をはじめとする同僚の態度が変わるわけでなく、外記にとっては針の筵の毎日がつづいた。

三

「外記殿」

桜に蕾がかかった春も間近なある日の朝、営中の詰の間で外記は同僚から声をかけられた。

「なんでございましょう？」

外記は聞いた。

「組頭殿がお呼びです」
外記は組頭大久保六郎右衛門の詰める部屋に出向いて声をかけた。
「お呼びでございますか」
「うむ」
そこへまた同僚の岡部半之助が、
「お呼びでございますか」
と姿をあらわした。
「うむ」
ふたたび答えて組頭大久保は外記と岡部を前にしてあらたまった。
「初夏に、右大将様は恒例の追鳥狩を駒場野であそばされる。ついてはそこもとら二人に拍子木役を仰せつけられることになった。粗忽の儀これなきよう、神妙に相勤めるように」
追鳥狩と風流な名を冠しているが、実体は軍事演習である。御番士は将軍の身のまわりを固める騎乗の士。いわば武官。御番士にとって徒や疎かにできない行事で、拍子木役は万端を指図する名誉の役である。
「ははあ、仰せのとおりに」
外記と岡部の二人はうやうやしく頭をさげた。

外記の父頼母は『寛政重修諸家譜』に認めて提出したとおり、馬も弓も達者だ。そのことを右大将家慶も知っていた。それでこの初夏、駒場野で追鳥狩をおこなうと決まったとき、頼母にいった。
「そのほうの伜はどうなのだ。馬や弓は達者なのか」
よくぞ聞いてくださいましたとばかりに頼母は答えた。
「ゆくゆくは御番入させていただかなければなりません。それゆえ子供のころから剣術はいうまでもなく、槍術、弓術、馬術など武芸百般を一通りまなばせておりました。親の口からいうのもなんでございますが、どれもこれも人に抜きんでております」
「そうか」
と家慶はいって、
「ならば今度の拍子木役、そのほうの伜に仰せつけることにいたそう」
「ははあ、有り難き仕合わせ」
こういうやりとりがあっての、外記への拍子木役の任命だった。
ただ、拍子木役はほぼ年齢順に仰せつかっていて、この初夏の追鳥狩は岡部半之助、曲淵大学、安西伊賀助ら四十代前半の者が任ぜられるはずだった。それゆえこのとき三十三歳の外記への拍子木役任命は、とりわけ曲淵大学と安西伊賀助を刺激した。頭を越されて二人は激怒した。

「外記が拍子木役を仰せつかるなど、冗談ではない」

二人だけではない。その他の古参も怒った。

「ありうべからざること」

歳の近い同僚も怒った。

「なぜ外記が」

同僚五十人はほぼ全員、外記が拍子木役に任じられたことを難じた。

森山孝盛はこんな話も書き残している。

「翁（森山）が御番入した大御番組は自余（他）の組とは違ひ、望月八郎右衛門といひ、廉直にして度量ある人にて、殊に古かりしかば、一組の取締り風俗が他の組とは違ひてよく、少しも物入のあることなし。古番（古参）にさいなまるることもなかりし」

とそこまではよかったのだが、

「そのかわり勤めは殊の外むづかしく、御番入すると相番五十人の宅に行きて必ず面会せよとの掟なり。見習御番などいろいろあるに、五十人の宅を残らず訪ねて対面するは容易でなく、短日のころなどはとても行き届くものではなかりし。翁が近所の人にて伊丹弥兵衛といふ人のところへは十五度行きたりしが、ついに逢はずにしまひたり。そのほか伊丹にかぎらず、十七度、二十度と行きしが、逢へざりし相手もありし」

これと似ていて、拍子木役に任命されると同僚五十人一人一人を屋敷に訪ねて報告し、

こういわねばならなかった。

「名誉の役なればご吹聴かたがたおもてなしをいたしたいので、幾日の何刻、我が屋敷にお出でいただきたい」

五十人ともなると江戸のほぼ全域にわたっている。非番の日を待ち、同僚の住まいを記した書付を手に、外記はあちらへこちらへと訪ね歩いた。さすがに森山の例とは違って「必ず対面せよ」という仕来りにはなっていなかったから、二度手間三度手間ということはなかったが容易でないことに変わりはない。

「ここか」

番町は裏四番丁の角から三軒目の屋敷の門前で外記は立ち止まった。表札などはむろん掛かっていないが、屋根瓦の丸に三引の紋はたしかに安西家の紋だ。

安西伊賀助は知行八百五十石。早くに本丸の御小納戸、御小姓を経て西丸の御書院御番士となっており、『寛政重修諸家譜』には御小姓時代に「放鷹にしたがひ鳥を射て時服を賜る」とある。外記の父頼母ほどの腕ではないようだが、弓を引いて鳥を射た経験はあった。歳は外記より十ばかり上の四十三。年上でもあり、「なぜ外記に先を越されなければならない」と憤懣やる方ない。

「ご免」

訪ねてきた外記を客間に通し、外記の口上が終わるのを待ちかねるように、安西は聞

いた。

「そこもとが拍子木役に任ぜられたとの口上でござった。たしかでござるか？」

「はい」

外記は答えた。

「お伺いいたすが、拍子木役は名誉の役ゆえ古い者順に勤めており申す。ご存じでござろうな」

「承知しております」

「なのになにゆえ貴殿が我ら古参を差しおいて推挙されたのか。いかにも不審。理由をご存じならばお教えいただこう」

安西らは頼母が将軍家慶にたのみこんでのことと確信しているが、それは口にできない。遠まわしにからんだ。

「あいにく存じませぬ」

外記は首を振った。

「ならばその穿鑿はさておくとして、結果として我らの面目は丸潰れになっており申す。このこと、お分かりいただけまするな？」

なんともいいようがない。外記は黙ってうつむいた。

「我らの面目は丸潰れになっていること、貴殿はいかが考えられる？」

安西がいいたいのは、だから拍子木役を辞退しろということで、安西は追い討ちをかける。

「なにもお考えにならない？」

「それがしにはなんとも……」

外記が恐る恐る口を開いていいよどむと、安西はせかす。

「口ごもられずに申されよ」

「うーん」

「はっきり、しかと」

と迫って安西はとうとう声をあらげた。

「だいたい、三十三歳の、それも本高わずか三百俵取りの部屋住みの身で拍子木役を勤め、我らを指図するなど僭越にも程がある。本来なら進んで辞退すべきではないのか。我らをなんと思っておる。ええ、なんとかいったらどうなんだ。なんとかいえ！」

外記は罵声に耐えていて、安西の面罵が一段落つくのを待っていった。

「いまも申したとおり拙者宅においてご吹聴かたがた一献差しあげたく、どうかお出で願わしゅう存じます」

暖簾に腕押しになり、安西は口をへの字に曲げていった。

「それがしにもいろいろ用がござる。参れるかどうかは確約いたしかねる」

「そこをなんとか」
「くどい」
「よろしくお願いいたします」
外記は深々と頭をさげ、安西の屋敷を辞した。
四十一歳の曲淵大学の屋敷でも同様だった。怒りは安西より曲淵のほうが激しく、けんもほろろの挨拶で、外記は罵りを背に曲淵の屋敷を後にした。

四

「話がござる。ここではなんでござるから、よければ帰りにそれがしの屋敷に寄っていただきたい」
相役の四十三歳の岡部半之助が耳元でささやく。
「拍子木役の一件についてでございますか」
外記は聞いた。
「さよう」
岡部は答える。
岡部の屋敷は田安門をまっすぐくだっていった先を左に曲がったところにある。外記の屋敷は築地小田原町。まるで逆方向だが致し方ない。
「承知いたしました」
外記は答え、槍を一本立てた岡部の後に、若党に中間を従えてつづいた。
岡部半之助は千二百石取りだ。三百俵取りの外記の松平家より、屋敷の構えは数等大きく、表座敷に通して岡部はいう。
「安西殿と曲淵殿が怒り狂っておられるというのはご存じでござるな」
「はい」
外記は素直に答えた。
「怒っておられるのはお二人だけではござらぬ。古参の方々も、それがしら安西殿と同年配の四十代の面々も、貴殿と同年配の三十代の面々も、みな、今度の一件を面白く思っておられぬ」
安西や曲淵には一言も抗弁しなかった。だが岡部は相役だ。いくらか心安く思って、外記はいった。
「といわれても、それがしにはなんともいたしようがございませぬ」
岡部はぴしりという。
「そんなはずはござらぬ」
「とおっしゃいますと」

「ご自身の胸によく手を当てて考えられよ」
「と仰せられても」
「安西殿や曲淵殿は面目が丸潰れになったと思っておられる。だから、お二方の面目が立つようになされば万事が丸くおさまる」
「なにをおっしゃっておられるのか……」
よく分かっているが、分からないと外記はいった。
「ならばお話し申そう」
岡部はあらたまる。
「貴殿は三十三歳というのに、四十代の安西殿や曲淵殿に先んじて拍子木役に任ぜられた。だからことに安西、曲淵のお二方は面目が丸潰れになったと思っておられる。こうまで申せばお分かりでござろう。拍子木役を辞退なされよ。辞退なされれば、たとえ他の四十代の方が拍子木役に任ぜられようと、お二方の面目は立つ」
右大将様からじきじきにお声がかかった拍子木役である。辞退すれば右大将様の期待に背く。またあっぱれ晴れ姿を右大将様に見ていただきたい。
「お言葉ながら」
と外記は岡部の顔をまっすぐに見つめていった。
「拍子木役は組頭の大久保様から命ぜられたことであります。ということはとりもなおさず右大将様から命ぜられたということ。ですからたとえ病でも押して勤めなければなりません。なのに辞退など、ご奉公をなおざりにすることにほかなりません。その儀は承服いたしかねます」
岡部は顔をしかめていう。
「辞退はご奉公をなおざりにするとおっしゃるのはなるほど正しい。だが何事も表と裏がござる。正しいことを正しいとして突っ張るのが必ずしも正しいこととも思えぬ。辞退されて万事を丸くおさめるほうがよほど正しい。それがしはそう思う。まして貴殿は部屋住みの新入りで、年配の方々の多くは部屋住みを抱えておられ、必ずしも貴殿の御番入を快く思っておられぬ。そこのところに思いをいたさば、辞退はごく自然に頭に思い浮かぶこと」
「いまも申しましたとおり、ご奉公をなおざりにするわけにはまいりません」
「これだけ腹を割って申してもか」
「はい」
「そんなに突っ張られると、こちらも考えねばならぬということになるがよろしいのか」
「なんと申されましても」
「あい分かった。帰られよ」

「失礼いたします」
外記は岡部の屋敷を辞した。

五

築地小田原町は東本願寺の南にあり、外記の屋敷は備前橋と、俗称をサムサ橋といった明石橋の間の堀沿いの通りに面している。
西丸御書院御番の四組は、日中勤、夜中勤、昼夜勤と、順に交替して勤務していて非番の日は少なくなく、非番のこの日、外記の招待にしぶしぶ応じて同僚が集まってきた。
本小田原町は日本橋魚河岸に接しており、一帯は魚店が軒をつらねている。ここ南小田原町ともいう築地小田原町も海に近く魚店が軒をつらねていて新鮮な魚料理を食わせる仕出し屋も少なくなく、外記は大枚をはたいて豪華な料理に酒を用意して客を待った。
一人、二人と姿を見せ、ほぼ全員が集まった。だが例の二人、安西伊賀助と曲淵大学が姿を見せない。むろん、遅れるとも不参するとも知らせは入っていない。
「まだ見えぬか」
外記は表通りにでて、客を案内していた中間に聞いた。
「はい」

中間は答える。約束の刻限がとうに過ぎている。外記はじりじりしながら二人がくるのを待った。
外記に辞退を断られたあとだ、岡部は気分を悪くした。むろん辞退をすすめたのは、曲淵や安西と相談してのことで、翌日、岡部は二人にいった。
「残念ながら不首尾でござった」
「小癪な」
曲淵も安西も眉を吊りあげる。
「それで考えたのでござるが」
と岡部はいってつづけた。
「お二方とも外記の振る舞いの席を不参されてはいかがか。さすれば外記もいくらかは堪える」
「それは妙案」
曲淵は手を打つ。安西は、
「うーん」
と腕を組んで、
「二人してというのはいかがなものでござろう。露骨すぎて、組頭殿からどういうことかと聞かれたらいい逃れがきかぬ。だからこういたそう。曲淵殿は不参されよ。それが

しは出席いたす。ただし刻限に遅れて」
「しからばさように」
こんな計略があり、曲淵は休み、安西は遅れて参加することになっていた。
「仕方がない」
表でともに心配している父の頼母がいう。
「刻限も過ぎたことであれば、振る舞いをはじめよ」
外記は下座にすわって口上をのべた。
「本日はご多忙中にもかかわらずご参会いただきましてまことに有り難うございます。すでにご吹聴申しあげましたように、それがしはこたび、きたる駒場野での追鳥狩の拍子木役を仰せつかりました。未熟者ではございますが、誠心誠意あい勤めます。よろしくお願いいたします」
同僚の集まりである。三番組の番頭（長）酒井山城守と組頭（副）の大久保六郎右衛門は立場上出席しておらず、床の間を背にした伴頭（同僚の長）の本多伊織が代表して、このあと「ではそれがしが」と祝辞をのべる手筈になっているのだが、五十八歳の本多も今度のことを面白く思っていない。「では……」といっこうに切りださない。仕方なく外記はいった。
「なお、ささやかに酒肴も用意してございますれば、ごゆるりとおくつろぎください」

長老の本多がその調子だから、他は推して知るべし。ことに古参はみな難しい顔をしている。宴席は端からお通夜のように湿っぽく重苦しい。そこへ、
「お見えになりました」
と侍（家来）が安西伊賀助を案内する。
安西は肩をいからせて入ってきて、どっかとすわる。
「このように」
と本多が安西に話しかける。
「席が湿っぽくてかなわぬ。安西殿、席を賑わせてもらえぬか」
これも申し合わせていてのことで、
「されば」
と安西伊賀助が立ちあがった。
「我ら西丸御書院御番三番酒井山城守組五十人はこれまで和をもって貴しとなすで、一家一族のようになごやかにお付き合いしてまいった」
横暴いじめはうす汚ないが、いじめる側にまわっている者はもはやそのことに思いをいたさない。
「しかるにこのほど、さる者が公然と和を破った」
今度のことではほとんどの者がそのとおりと思っている。制する者はなく、黙って聞

き入っている。

「残念というほかはござらぬ。方々はこのこと、いかが思われるか」

四十六歳、年格好は安西や曲淵とほぼおなじの、沼間右京という八百石取りが声を合わせる。

「いかにも仰せのとおり」

三十二歳、外記とおなじ部屋住みの戸田彦之進もいう。

「それがしも同意」

戸田の父は御三卿清水家に用人として仕えている戸田嘉十郎で、嘉十郎も本高三百俵。もとより戸田の御番入は嘉十郎が式部卿（清水斉明）に願ってのもので、御番入した経緯も父の本高も外記とそっくりおなじ。歳も一つ違うだけ。それだけに戸田は人一倍外記に敵愾心を燃やしていた。

下座の外記はこの日もずっとうつむいたままで、その後もひとしきり誰彼がなにやかやいっていたが、頭がぼうーっとくらんで誰がなにをいっているのか聞き取れず、気がついたらただ一人になっていた。

六

「どうなされたのです？」

空の湯飲みを口にやったのを見咎めて妻の志津子がいい、外記はぼんやり答えた。

「なんでもない」

「お茶がお召しあがりになりたいんでしたら、そうとおっしゃってください。淹れてまいります」

「別に飲みたくはない」

「でもさっきから何度も」

「本当に飲みたくないのだ。それより父上はまだお帰りではないか」

「一体、どうなさったのです」

「というと？」

「これまたさっきから何度もおなじことをお聞きになられるからです」

外記は聞かれたことには答えずにいった。

「まだ帰ってきておられぬのか？」

「帰られたらすぐにお知らせしますと、嘉助が」

嘉助は小者だ。
「どうやらお帰りになったようです」
表がざわつき、嘉助が声をかける。
「殿様がお帰りになりました」
外記はふらふらっと立ちあがった。
「大丈夫ですか」
志津子が聞く。
「なんともない」
外記の家は離れにして造ってあり、母屋とは渡り廊下で行き来するようになっている。
「そなたはこなくてよろしい」
心配そうに後をついてくる志津子にいい、外記は母屋に向かった。春も盛りで障子は開け放ってある。
「お話が」
外記は部屋の外から声をかけた。
「うむ」
頼母が答えて、外記は中に入った。
「いかがいたした」

女中に着替えを手伝わせながら頼母は聞く。
「拍子木役、辞退したいと思います。よろしいでしょうか」
頼母も事情はよく知っている。
「よくよく考えてのことか」
「はい」
同僚五十人を自宅に招いて振る舞いをしたあと、営中で外記を見る目はいちだんと厳しくなった。だけでなく誰も彼もが無視して口を利かない。針の筵どころでない。蛇の生殺しといってよかった。また近郊で追鳥狩の稽古をしたとき、安西伊賀助は些細な失敗を咎め、大声であざ笑った。それに誰も彼も大失態を待っているかのように、外記の指示に従わない。このまま拍子木役を勤めると御役を仕損じる。
「辞退するしか道はないようです」
外記はつづけた。
「右大将様は残念がられようが致し方あるまい。ただそうなると右大将様への聞こえもある。病ということにしてしばらく引き籠もるがいい」
「そのつもりでおります」
外記は翌日「風邪に罹りました。しばらく休暇をください。ついては拍子木役も果たしかねます。辞退させてください」と認めた書状を侍に持たせて、組頭の大久保六郎右

衛門の屋敷に届けた。

大久保は書状を見て使いの侍にいった。

「承知いたしたと伝えてくれ」

七

外記は当初、内記と名乗ったが早くに母を亡くし、継母（ままはは）のもとで母に甘えるということを知らずに育ったせいか内気な性格になり、名を外記とあらためた。しかしだからといって性格があらたまるものでもなく、なにかがあると思いつめた。組頭に病の届けをだして引き籠もって以来、片時として一件について考えないことはなかった。こんなことをしていると気がおかしくなるというのは自分でも分かる。懸命に思いを振り切ろうとするのだが、安西伊賀助、曲淵大学の両人はいうまでもなく、伴頭の本多伊織、岡部半之助、沼間右京、戸田彦之進らの、嘲（あざけ）り罵る顔がつぎからつぎへと浮かんでは消えた。

それで、なんとか一件を腹に収めて忘れたとしよう。しかしその先どうなる。同僚みんなもおなじように腹に収めて何事もなかったように付き合ってくれるのか。とてもそうは思えない。事あるごとにいじめにかかろう。どうやっていじめを防ぐ？　防ぎようがない。では辞めるか。辞めたら男の一分が立たぬ。尻尾（しっぽ）を巻いて逃げたことになる。

どうしたらいい。

そんな風に外記は自分を追い込んでいった。

「追鳥狩がすんで一月が経つ。そろそろ快気届をだして出勤したらどうだ」

頼母が部屋にやってきていう。

出勤、と聞いただけで外記はどきっとした。出勤を異常に恐れているのだ。出勤していじめられるのが怖いのだ。しかし、いつまでも出勤しないでいるわけにいかない。

「どうなのだ？」

頼母に念を押されて外記はいった。

「出勤します」

病の届けは書状や代理でいいが、快気届はそうはいかない。外記は組頭大久保六郎右衛門の屋敷に出向いて、

「治りました」

と口上をのべた。

翌日、久方ぶりの出勤の日は宿直日で、ほとんどの者が城をさがり、殿中がらーんと静まった七つ（午後四時）ごろに三々五々登城し、一晩泊まって帰るという勤務になっている。

外記はいつものように、若党と挟み箱を持たせた中間を従えて屋敷をでた。西丸へは

二重橋御門から入る。橋を二つ渡り、御玄関の脇に刀を掛け、竹に虎の絵を画いた金張り付きの襖が立てかけられている部屋に向かった。そこが御書院御番士が詰める部屋で、ここ二、三日、梅雨前の夏のような暑さがつづいていて障子は開け放ってある。

部屋は二階造りになっており、伴頭の本多伊織は二階に詰めている。同僚は出勤するとすぐ本多の許に出向いて手を突き、こう挨拶する。

「ただいま出勤しました。まずもって長日のご退屈、察し入ります」

そのあとは、本当は上下姿でかしこまっていなければならないのだが、毎日のことて喧しくいう者もおらず、御番士は上下を脱ぎ白衣（着流し）になって、そこかしこでごろ寝をしたり、雑談したり、扇を投げて遊んだりと気ままに過ごす。

外記の出勤はあらかじめ同僚に知らされている。同僚は横目で外記を盗み見るが、声はかけない。

外記は二階にあがり、机を前にしている本多伊織の前にかしこまっていった。

「ただいま出勤いたしました」

だがその後の言葉がでない。「まずもって長日のご退屈、察し入ります」などとお追従をいう気にはなれないのだ。それが分かってか、本多はただ、

「ふん」

と鼻先で笑った。見ると、よくもでてこられたものだという顔をしている。外記はもちろん逆らうわけにもいかず、二階の隅に腰をおろした。

沼間右京と戸田彦之進が本多伊織に近づき、外記をちらちら振り返りながらひそひそささやいている。聞こえないのだが、外記にはなにをいっているのかが聞こえる。

「あのまま辞めるのかと思ったら、のうのうと顔をだしましたねえ」

「謝りに一軒、一軒、まわりもせずにです」

「図々しいにも程がある」

すうーっと外記の頭から血の気が引いた。堪忍もはやこれまでと外記は思った。本当なら安西伊賀助と曲淵大学こそを狙わなければならないのだが、それすら忘れてしまった。かたわらに伊丹七之助、小尾友之進がいた。二人にさしたる遺恨はない。こう話しかけた。

「それがしの脇差は備前長船の祐定です」

唐突に話しかけられて、二人はぽかーんと口を開けた。

「切れ味をご覧に入れよう」

外記はそういうとやにわに鞘を払って沼間右京に近寄り、

「思い知ったか！」

と袈裟がけに振りおろした。脇差はひょいと振り返った右京の、右頬下から喉へかけてを見事に切り裂き、右京は横転して喉から血をどっと噴きだした。

「な、なにをいたす」
本多が仰天して腰を引きながらそれでも立ち向かおうとする。
「おぬしにも遺恨は数々ある」
外記は飛びあがるようにして本多に刀を振りおろした。手応えは十分あった。耳の脇よりあばらまではすに見事に切り裂き、本多はこれまたどうと倒れた。
「た、助けてくれ」
戸田彦之進は腰を浮かして逃げようとする。
「逃すものか」
振りおろした刀は、戸田の尻をかすっただけだが、拍子に戸田は身体をひねった。その肩から襟に、
「思い知れ！」
これまた見事に決まって、戸田もどうと倒れた。
「乱心だ」
「逃げろ」
二階にいた者はどどっと先を争って階段をおりていく。運の悪いことに間部源十郎は転た寝をしていた。五十八歳のこの男も外記に辛く当たった。外記はもはや悪鬼の形相だ。

「おぬしも」
と騒ぎにびっくりして起きあがろうとする間部の頭に刀を振りおろした。間部はとっさに右手でかばった。血がどっと噴きだして眼に入り、たまらず間部はうずくまるように倒れた。
三十歳の神尾五郎三郎も二階で転た寝をしていて騒ぎに目を覚まし、仰天して階段をおりようとした。外記は追って刀を横にはらった。刀は尻をかする。
「イテテテ！」
神尾は階段を転がり落ちて逃げた。
外記は二階を見まわした。一人もいない。階段をおりた。神尾が、
「ひゃあー」
と叫び声をあげながら御番所の方に逃げていく。ほかに人影はない。
こうなれば、もはやるべきことは一つ。腹を切ることしかない。外記は覚悟を決めて二階にあがった。
二階から逃げた者も一階にいた者もいろんなところへ逃げた。神尾とおなじように御番所へ逃げた者もいた。神尾は恐怖のあまり、御番所から蘇鉄之間まで逃げた。
隣の部屋に逃げた者もいて、連中は外記が追っかけてこないように、御襖の差坪を差して部屋を閉め切った。

閉め切った御襖の建付けに左手を挟まれて身動きができなくなった者もいた。五十二歳の川村清次郎で、川村は、葛籠を隠すためにおいてある屏風を引き寄せた。

三十三歳の長野勝次郎は便所に逃げた。

そしてみんな息を殺した。

「どうなっているのだろう？」

御番所へ逃げた者はひそひそささやきあった。

五十二歳の池田吉十郎が三十二歳の井上政之助にいった。

「上下と脇差を貸してもらいたい」

御目付などが駆けつけていたら、白衣ではまずいと考えてのことだ。井上は御番所で張り番をしていて上下を身につけていた。

「分かりました」

井上は上下を脱ぎ、脇差とともに池田に渡した。池田は上下を着て脇差を差し、そろりそろりと忍び足で一階の部屋をのぞいた。誰もいない。階段の下からじいーっと二階の様子を窺った。物音一つしない。それでも階段をあがる勇気はない。部屋裏の階段をまたそろりそろりと忍び足であがった。

そおーっと顔をあげた。長日がようやく暮れようとするころで部屋は暗い。しかしぼおーっとではあるが見える。死骸が一つ、二つ、三つ——。外記は？　窓際に倒れている。

恐る恐る近寄った。腹を切ったうえ、喉を突いたと見えて血の海の上にうつ伏せに倒れている。

さてそうなると、誰も彼もが狼狽して卑怯未練な振る舞いにおよんだことに気づかされた。そもそも御書院御番士なる御役は将軍の身辺を警固するためにおかれている。だから日中はいうまでもなく宿直もした。みんなの振る舞いをありのままには報告できない。

池田吉十郎が謀主になり、番頭の酒井山城守、組頭の大久保六郎右衛門らを巻き込んで、誰も現場にいなかったことにしようと話をつくった。

たとえば池田吉十郎は五十一歳の近藤大膳とともに組頭の部屋に出向く途中、蘇鉄之間にさしかかったところで変事が起きたということに。便所に逃げ込んだ長野勝次郎は、痔疾が差し起こって便所に入っていたところで変事が起きたということに。

そして外記は自殺、後の者はみな病人ということにして〝駕籠断り〟し、外記と本多伊織ら三人の死骸と重傷の間部源十郎を駕籠に乗せて運びだそうと考えた。

組頭大久保六郎右衛門が西丸御目付新庄鹿之助、同阿部四郎五郎に、自殺一人、他はみな大病人と偽って〝駕籠断り〟をした。

西丸御目付新庄鹿之助らにも騒動は耳に入っている。大久保六郎右衛門らが騒動を丸

くおさめようとして〝駕籠断り〟を願ったというのはなんとなく分かる。意を酌んで丸くおさめたいが死骸を駕籠で運びだしたと後で分かったら大事だ。お叱りを受けるくらいではすまない。〝駕籠断り〟をことわった。大久保六郎右衛門らは再三願う。夜が明けないうちに死骸を運びだしたいのだ。

願う、断るとやりとりをしているうちにとうとう夜が明け、西丸御目付新庄鹿之助らは死骸を検分するという役目を怠ってしまった。

一方、御番医師藪原玄忠は大久保六郎右衛門らが願うまま、御目付新庄鹿之助らへの容体書を何度も書き換えた。

結果としてこの一件は御目付や御番医師、さらには外科医師らをも巻き込んでしまった。

評定所ものとなって約半年後の十月九日、三十一人に処罰がくだされた。

一番の重罰は「尻こぶた、横に三寸程、深さ五、六分程の疵一ケ所」の傷をこうむって蘇鉄之間まで逃げた神尾五郎三郎で「改易」。千五百石の高を失った。

張本人ともいうべき、安西伊賀助と曲淵大学は「御役御免小普請組入」の軽罪。

外記の父頼母は「西丸御小納戸役御免」。

無念を完璧に晴らせたわけではないが、外記としてはまあまあ成果をあげたというところであったろうか。

身からでた錆

一

ご存じ矢部駿河守定謙――。宿直の晩、古参に粥をつくれといわれ、粥に照明用の菜種油をたらして抵抗した御小姓組御番士だ（『重怨思の祐定』の巻）。

矢部定謙は幕末の三秀とか三傑とかいわれて、いまにその名を残している。矢部が役人生活を送った時代は文政から天保にかけて。時代はまだ幕末に入っていない。なのに、〝幕末の〟三秀とか三傑とかにくわえられてしまった。同時代やその後の時代を生きた人たちには、それほど矢部の印象は強烈だった。

矢部定謙の矢部家は三百俵取り。そこで史書は多く矢部を御家人としているが、矢部は御目見資格のある旗本である。三百俵取りは知行取りに直すと三百石取り。威張れた俸禄ではないが、そこそこの俸禄だ。父も旗本しか任官できない大坂城勤務の大御番に御番入して、徒頭、御目付と累進し、堺町奉行にまでのぼりつめている。

矢部もおなじように累進して、父とおなじ堺町奉行にのぼり、そこから大坂西町奉行、さらには旗本や御家人がのぼりうることのできる最高位の役職である勘定奉行と町奉行とを二つながら歴任する。だが町奉行を罷免されるとすぐ、伊勢桑名松平家に御預けの身となり、子鶴松は改易された。矢部はこの処分に憤然として預けられた先で絶食、み

ずからの命を断った。

壮烈な死に様で、そのことでもまた矢部は名を残しているのだが、ただ矢部にも非がなくもなく、そのことは矢部の人柄にも起因し、さかのぼると、粥に照明用の油をたらして抵抗した一件にいきつく。

明治も三十年代に入って世も落ち着くと、旧幕臣は、いまは懐かしい幕府時代を回顧して寄り集まり、史談、回顧談、伝記などをまとめた『旧幕府』という雑誌を刊行した。それに矢部のこの、照明用油たらしの一件がおさめられている。こんな風にだ。

矢部は古参に粥をつくれといわれ、粥の鍋を火にかけ、そのあとほったらかしにした。やがて粥は焦げ、古参は怒っていった。

「なにをしておる。焦げてるじゃないか。粥を掻きまわせ」

いわれて矢部は、

「予、小身といえども未だ曾て飯を炊かず。いかでか火加減を知らんや」

といい放ち、傍らにあった大蠟燭を摑み、鍋の中に突っ込んで掻きまわした。古参連中は矢部の気性の激しさに、啞然呆然、言葉もなかった。

大蠟燭で掻きまわしたのではなく、粥の鍋に照明用の油をわざとたらして古参を怒らせたというエピソードを紹介しているのは、幕末に幕府の外交畑で働き、明治になってからはジャーナリストとして活躍した栗本鋤雲だ。鋤雲は『匏庵遺稿』という著で「予

が友山口泉處」が老親林内蔵頭からいつも聞かされていたことだとして、この話を書き残している。

粥に油をたらされて、当然古参は怒った。口を極めて罵った。矢部は、

「わたしの粗相です。申し訳ありませんでした」

とひたすら謝し、翌朝、御城をでるとそのまま番頭を屋敷に訪ね、前夜の状をつぶさに述べた。だけでなく、そのようなことが起きたそもそもの原因、目に余る古参の苛めなどをも述べて、おもむろにいった。

「それはともかく、かく申し立てたは陰口を利いたも同然。その罪は軽くありません。職を辞します。お聞き届け願います」

番頭は辞職を聞き届けた。

以上の二つの話は似ている。だがニュアンスがかなり異なる。

『旧幕府』から受ける矢部の印象は、古参に媚びない、直情径行の、気性は激しいがさっぱりした男というもの。そんな話にできあがっている。

『匏庵遺稿』から受ける印象はそうでない。むしろしたたかな計算が感じられる。硬骨漢であるという印象を上役（番頭）に植えつけ、それを出世の足掛かりにしようとするという計算がだ。どちらが本当にあった話だろうか。

事件があったのは矢部が三十四歳のとき。それで、矢部がいつ御小姓組番に御番入し

たかだが、三十四歳のときではあるまい。親は堺町奉行にまでのぼっているのだ。『重怨思の祐定』の主人公松平下記もそうであったように、御小姓組番や御書院御番には部屋住みでも御番入できる。矢部も少なくとも三十までには御番入していたろう。すると、三十四歳までに、何度も「粥をつくれ」と命ぜられていたはずで、その夜はじめて粥をつくれといわれたわけではなかったに違いない。すると矢部は、

「予、小身といえども未だ曾て飯を炊かず。いかでか火加減を知らんや」

という啖呵は切れない。

もう、三十四歳。そろそろ一段高い役職へあがらねば、いつまで経っても出世はできない。矢部はそう考え、わざと油をたらして事件を起こし、上役の番頭に自分を硬骨漢と印象づけた。こういうしたたかな計算があった、と見るほうが正しいのではないか。

矢部が諮ったとおりだったろうと思われる。番頭は時をおいて、矢部を小十人頭に推挙した。

小十人頭は三百石高。矢部は三百俵取りだから御足高はつかないが、御小姓組番士から、出世の階段を一歩、這いあがった。

二

御老公といわれた御三家水戸の徳川斉昭の側用人、秘書兼相談役のような仕事をしていたのに、藤田東湖なる名物男がいた。矢部が小十人頭に登用された年から数えて八年後に、仙石騒動という御家騒動があり、これを裁いて一躍名を挙げた能吏に、川路聖謨なる御家人あがりの、下積みから這いあがった男もいた。東湖は〝人物〟というと会いにいって確かめるのを趣味にしていて、川路を自宅に訪ね、「その凡ならざる」を知り、以後、交遊をつづけた。

その川路が、あるとき東湖にいった。

「矢部駿州を知っておられるか」

東湖は答えていった。

「知らない」

川路はいう。

「知謀余りありて、断決流るるが如し」

ならばと、東湖は川路の紹介状を持参し、矢部駿河守を訪ねた。矢部は川路に聞いたとおりの人物で、東湖は以後矢部とも交遊を持つのだが、矢部が町奉行のとき、矢部は訪ねてきた東湖に、雑談のかたわらこういった。

「本高三百俵の小身者のわたしが、かくまで昇進できたのは才力があってのことではござらぬ。みなこれ賄賂のたまもの」

これに東湖は、

「たとえそうであっても、よき役人が世にでられればそれはそれでよろしい」

と大真面目に答えているのだが、むろん矢部がいったことははったりだ。矢部自身は、自分が出世できたのは才力があってのことと大いに自負していた。はったりをきかせて東湖を煙に巻いたにすぎないのだが、ただ、賄賂を使ったというのは嘘ではない。矢部が出世街道を必死に這いあがろうとしていた時代は、江戸時代でも一、二といっていいほど賄賂が横行した時代で、矢部とて手をつかねてはいられない。世間並み、いや、それ以上に賄賂を使った。そしてようやく御先手鉄砲頭に転役することができた。小十人頭に任ぜられた五年後、文政十一年（一八二八）、矢部三十九歳のときのことである。

御先手鉄砲頭は御先手御弓頭とともに、火付盗賊改を兼務する。おなじ文政十一年に、矢部は当分加役として火付盗賊改にも任ぜられた。

三

三田村鳶魚という、とうに故人になられている市井の歴史学者がおられる。書いてあることはどうも事実らしく、ときには驚愕するようなことが書かれているのだが、鳶魚先生は出典を一切明らかにされなかったから事実かどうかを確証することができず、学者先生を大いに悩ましたという人であり、歴史・時代小説の考証の杜撰さをこっぴどく叩いて、知ったかぶりで書いていた作家を震えあがらせたという人でもあった。その三田村鳶魚先生が『捕物の話』（中公文庫）という著書の中で矢部定謙のことをとりあげ、こんな話を紹介しておられる。

大名屋敷と旗本屋敷はいわば治外法権。町方はそこへ「御用」と踏み込めない。そこで、大名屋敷と旗本屋敷にある中間部屋が博奕場となり、御法度の博奕がさかんにおこなわれた。部屋頭がおおむね親分で、親分はテラ銭を掠めて太った。

そんな博奕打ちの親分の一人に三之助という男がいて、三之助は火付盗賊改の屋敷の中間部屋を根城にした。火盗改はいずれ入れ替わる。すると三之助はつぎの火盗改の屋敷へと移る、ということを繰り返した。火盗改は火付けや盗賊だけでなく、博奕打ちをも引っ括る。そういうことを御役目におかれている。その引っ括る側の、火盗改の屋敷

を根城にして博奕をやるのだ。天下御免というか、これほど安全な賭場はない。博奕場は盛る道理で、三之助の懐はどんどん太った。

三之助はまた気配りが利いた。溜め込むだけでなく、火盗改の家来、出入りしている組下の与力同心、町方の与力同心などにもせっせと賂した。家来、組下の与力同心らにとっては程のいい小遣い銭になる。彼らはむしろ三之助の賭場が盛るのを望んだ。

しかしむろんこれは不届き不埒な振る舞いで、やがて御用部屋（老中の執務室、転じていわば幕閣）の知るところとなった。老中大久保加賀守は矢部彦五郎（定謙）を呼んで、こう内意を伝えた。

「三之助を捕らえよ」

火盗改は御先手が兼務するから俗に加役といっているが本役である。ただ秋から春にかけて犯罪が増加するので、当分加役として一人を増員した。増役といってさらに増員することもあった。矢部はずっと当分加役として火盗改に任ぜられており、三之助は本役の松浦忠右衛門の屋敷にいた。

それで、だからといって、松浦忠右衛門の屋敷に踏み込んで「御用」とやればいいというものでもない。松浦忠右衛門の顔が潰れる。また火盗改が自分の屋敷に、三之助を部屋頭としておいていたということが公然明らかになると、松浦忠右衛門だけでなく、幕府そのものの失態不明が難じられることになる。だから三之助は屋敷の外で捕まえな

ければならない。

ならば、組下の与力同心に命じ、三之助が外出する機会を狙って「御用」とやるのか。三之助はあちらこちらに鼻薬を効かせている。矢部が組下の与力同心に、三之助を捕まえろなどと命ずると、たちどころに三之助の耳に入り、三之助は警戒する。捕まえようと思っても捕まえられない。

捕まえるのなら、誰にも明かさず、一人で事を運ばなければならない。では、どうやったら一人で事を運ぶことができるか？　矢部は思案し、家に引き籠もって、ぐずぐずと寝込んだ。組下の与力二人が心配し、病床に矢部を見舞って聞いた。

「どうなされたのです？」

矢部は肩を落としていう。

「見てのとおり、病がちなのだ」

二人は首をひねっていう。

「お見受けしたところ、病のようには見えません。また医者を呼ばれたようでもない。一体、どこがお悪いのです」

「実は」

とさらに矢部は肩を落としていう。

「罹っているのは医者では治らぬ病。貧の病だ」

火盗改は役高千五百石（千五百俵）。矢部は本高が三百俵だから足高が千二百俵。ほかに御役料が四十人扶持で、御役扶持が二十人扶持。合計六十人扶持。一人扶持は五俵換算だから、六十人扶持は三百俵。本高以外に合計千五百俵。百俵はだいたい三十五両前後。つまり本高三百俵以外に、五百二、三十両の収入があったのだが、火盗改はなにやかやと物入りが多く、収入で支出を賄いきれなかった。持ちだし覚悟の御役だった。

矢部が貧の病というのに嘘はなかった。

「蔵宿はいうまでもなく」

矢部はつづける。

「あちらこちらから借りつくして、もはや金策のしようもない。このうえは御役御免を願うしかない」

金のこととなると、与力二人にも相談の乗りようがない。

「はあー」

と矢部に調子を合わせるように溜め息をついた。

「ところで、ちと聞きたいことがある」

矢部は思いだしたようにいう。

「なんでしょう」

二人は聞く。

「本役の松浦忠右衛門殿のところで部屋頭をしているのに、三之助というのがいるそうで、これがたいそう金策上手と聞いた。たしかにそうか」

「はあ、まあ」

と二人はいって、一人が教える。

「されどなにかと評判のある男です」

「中間部屋で博奕をやり、掠りをとっているというのだろう」

「そうです」

「いや、だから金にも不自由せずに金策ができるのだ。そこで相談だが、三之助に金策を掛け合ってもらえないだろうか」

三之助が金策してくれるのなら、矢部の組下の者も金まわりがよくなる。結構なことだくらいに思って、二人はいった。

「そんなことでしたらお安い御用です。さっそく三之助に掛け合ってみましょう」

二人は三之助に接触した。

三之助に異存はない。本役松浦忠右衛門もいつまでも火盗改をつづけているものでもなし、保険をかけるようなものだから、

「よござります」

二つ返事で応じた。

与力二人はその旨、矢部に伝えた。それではともあれ会ってみようと矢部はいい、三之助に屋敷にくるようにといった。ただ三之助は中間。座敷にあげるわけにはいかない。庭先にまわして御目見という段取りになった。

三之助は下谷二長町の矢部の屋敷を訪ね、庭先に通されて待った。矢部は組下の与力同心全員に集合をかけていった。

「それがしが声をかけるのを合図に三之助を召し捕れ」

組下の与力同心はびっくりしたが御頭（矢部）の指図だ。庭先を取り囲んだ。矢部は縁側に出向いて聞く。

「そのほうが三之助か？」

三之助は神妙に答えた。

「さようでございます」

「召し捕れ！」

矢部が叫び、組下の与力同心がどっと踏み込み、三之助を押さえつけて召し捕った。

一件には御先手（火盗改方）与力同心、町方与力同心、その他いろんな者が絡んでいる。町奉行ではなく勘定奉行曾我豊後守の掛りで調べは進められ、三之助ほか三人が遠島、御先手与力同心、町方同心ら二十八人がなんらかの処罰を受けた。

鳶魚先生の以上の話は、例によって出典がないのだが、遠島の申し渡しがあったのは

天保二年（一八三一）五月二十七日とあり、『藤岡屋日記』で確かめると、たしかにその日付けで三之助らに遠島などの処分が申し渡されている。

水戸の名物男藤田東湖は、矢部が自害したと知り、矢部を称えて「七言古風八十韻」なる詩を賦した。その詩にこんなくだりがある。

「博徒横行街逵に盈つ」

逵は道。博徒が横行して、そこいらにいっぱいいる。

「巨魁潜に貴人第に託す」

第は屋敷。博徒の大物が、貴人（火盗改）の屋敷にひそかに身を寄せている。

「官吏禍を畏れ敢えて治せず」

官吏（町方）は災難が降りかかるのを恐れて、あえて逮捕しない。

「使君新に追捕の命を受く」

使君は矢部のこと。矢部はあらたに巨魁を捕まえるようにとの命を受ける。

「陰謀秘計機に応じて施す」

巨魁を捕まえるために陰謀秘計を臨機に張り巡らした。

「迅雷誰能暇レ掩レ耳」

がつぎのくだり。

暇レ掩レ耳をどう訳せばいいのか分からないが、迅雷誰ぞ能く云々ということで、素早く捕まえてしまったということだろう。

「狡賊捕に就き日塁々」

狡賢い賊はお縄に掛かって何日か経った。

「一朝擢れて堺浦の尹と為る」

尹は長官。ある日、抜擢されて堺町奉行となった。

矢部は三之助らが遠島を申し渡されてから五カ月後の十月二十八日に、堺町奉行に抜擢されている。

東湖は矢部に聞いたことを思いだしながら、「七言古風八十韻」を賦している。矢部は一件を自慢げに東湖に語って聞かせたということのようだが、このエピソードを紹介して、蔦魚先生は矢部のことをこう評しておられる。

「すこぶる陰の暗い人で、大いに探偵根性が突っ張っている」

あながち穿ちすぎとはいえないようである。

四

藤田東湖は矢部の堺町奉行時代の名御奉行である所以のエピソードをも「七言古風八十韻」に賦している。だがそれはここに紹介するに値しない。とはいえ川路によると、

矢部は「知謀余りありて、断決流るるが如し」だ。大いに働いて、働きが認められたのだろう。二年後に大坂西町奉行に栄転した。

『旧幕府』は、矢部の大坂西町奉行時代のエピソードとして、こんなことを載せている。

大坂西町奉行在任三年になる天保七年――。江戸時代の三大飢饉の一つ、天保の飢饉があった年だ。大坂の市中でも米が払底し、なにかと騒がしくなったところへ、さる豪商が米蔵十余棟に米俵を山積みにして米の値上がりを待っているという噂が立ち、矢部の耳に入った。矢部は豪商を呼んでいった。

「そのほうの納屋に俵のような物を運び入れるのを見た。あれは米ではないのか」

「炭です」

豪商はいい逃れ、矢部はすかさずいった。

「ちょうどよかった。炭を大量にもとめていたところだ。そっくり買いあげてつかわそう」

矢部は米蔵を封印し、大量の米俵を一俵当たり炭の値段で買い取った。

面白そうな話だが、似た話をどこかで読んだ。江戸時代のエピソードで油断がならないのは、面白そうなと思われるエピソードが、人物を置き換えてあちらこちらで語られることだ。大岡政談などほとんどその類いである。

それでも、矢部は「知謀余りありて、断決流るるが如し」だ。飢饉に手を拱いておらず、窮民救済に功があったのを買われたのか、飢饉という非常時に矢部の才を必要としたのか、飢饉の真っ只中の年天保七年九月に江戸へ呼び戻され、栄えある職の勘定奉行に抜擢された。

大塩平八郎の乱があったのは翌天保八年二月十九日。矢部は後任の大坂西町奉行跡部山城守良弼から、二十四日に内報を受けた。以下は翌々日二十六日の川路の日記風随筆（『遊芸園随筆』）からの抜粋。

「その節、駿河守（矢部）物語に、早大坂は落城し、堀伊賀守（東町奉行）は京都へ逃げ参り、跡部山城守は百目筒に当り、首微塵に砕け候由」

矢部は城中で「事々しく」そう語って聞かせたのだという。むろんいずれも矢部の推測だが、なぜ矢部は尾鰭をつけて推測を語って聞かせたのか。

大坂東町奉行所の与力大塩平八郎は、矢部の西町奉行就任以前に隠居していた。だが大塩もまた大坂の名物男で、かつ陽明学の学者としても名高く、矢部とも交遊を持った。飢饉に際しては、矢部に窮民救済について意見を具申し、矢部は大塩の具申を参考にした。その後、矢部の後任の跡部や東町奉行の堀伊賀守は窮民救済に熱意や誠意を見せなかった。大塩はそれに怒って乱を起こした。矢部としては、大塩の気持ちはよく分かる、跡部や堀が怠慢だったから大塩は乱を起こしたのだと、大塩に理解を示す気分があったから、尾鰭をつけて、川路らに推測を語って聞かせた。

そんなところだったろうと思われるのだが、面白いもので、新たに発見されて公表された、乱を起こすに当たって大塩が老中に書き送った『建議書』によると、大塩はついでに矢部の「不正」を書き連ね、「奸佞」ときびしく糾弾している。大塩は矢部のことを、心の底では面白く思っていなかったようである。なにかと癖のあるところを見抜いて嫌っていたのではないか。

ともあれ矢部は勘定奉行となり、加増されて五百石の知行取りとなった。浅草蔵前にある御蔵の米（蔵米）を支給されるのではなく、米五百石分の土地を各地に分割して与えられた。押しも押されもせぬ旗本になった。

勘定奉行は四人いて、勝手方（財政）と公事方（司法）を二人ずつが担当した。勝手方と公事方とはどちらが上で、どちらが下ということはないが、勝手方は予算を握っている。おのずと勝手方が幅を利かせた。そんな役職に矢部は抜擢されて就いた。ところがそのわずか二年後の天保九年二月二日に、矢部は突如として西丸留守居に左遷される。

三田村鳶魚先生はその理由をこう書いておられる。その年に、西丸が焼けた。西丸には大御所家斉が住んでいた。至急建て直さなければならない。だが、いかんせん百万両という巨額の金がかかる。そこで勝手方勘定奉行の矢部は財政責任者として、大御所は当分の間、二の丸に住まわれればいいといって反対した。そのため、矢部は西丸留守居に左遷されたのだと。

栗本鋤雲は『匏庵遺稿』でおなじように、西丸が焼失し、矢部が建て直しに反対したため、西丸留守居に左遷されたと記している。

『匏庵遺稿』の刊行のほうがずっと先だ。だから、鳶魚先生が『匏庵遺稿』を読んだ可能性は大いにあり、ついつられてそのままを引き写したのではないか。事実は、矢部が左遷されたのは二月二日。西丸が焼失したのは三月十日。矢部の左遷と西丸の焼失とは関係がない。また矢部といえども、江戸にいたままで太政大臣にまでのぼった最高権力者の大御所家斉に盾を突くような真似ができるわけがない。

ではなにゆえ、矢部は左遷されたか。それはのちに触れる。

西丸留守居は引退寸前、閾寸前の役人が一時的に席を置く、窓際のそのまた窓際という役職で、いかになんでもひどすぎると思ったか、幕閣はやがて矢部を小普請組支配に転じさせる。

小普請組は八つあり、家禄三千石以下で役職に就いていない旗本・御家人はいずれかに属して、なにかと指図を受けた。その小普請組八つの、長が小普請組支配である。布衣（六位相当）で三千石高。町奉行や勘定奉行は三千石高で諸大夫（従五位下）だから、官位は劣るがほぼ同格。とはいえ小普請組支配は、支配している旗本・御家人に威張れるだけの、たいした役職ではなかった。

五

天保十二年閏一月七日、大御所家斉が逝去した。家斉の時代の、家斉逝去までのおよそ二十年余は、賄賂がはびこるだけでなく、何事にも弛緩した時代だった。逆にいうと、だから江戸の文化は花開き、またとない絢爛豪華な時代が現出したのだが、家斉が逝去したときの老中首座兼勝手掛老中、いわば総理の水野越中守忠邦は、世情が何事にも弛緩していることを苦々しく思っていた。

国の外に目をやると、イギリスが大国清国を破ったばかり。座視していれば、日本も同様、イギリスにやられる。清国の二の舞いを演じる。水野はそう危機感を抱いていて、家斉が死に、政治の実権を握ることができるようになると、綱紀粛正、富国強兵をはかろうとした。

五月十五日――、将軍家慶（家斉の嫡男）の四十八回目の誕生日だ。水野は老中以下布衣以上の役人全員を西湖之間に集め、家慶に出御してもらって、こう申し渡した。

「上（家慶）は御改革を、御代々（歴代の将軍）のお考えはもちろん、とりわけ享保および寛政の御趣意にそっておこなうと決意された。おのおのもその心得で励むよう」

三大改革の一つ、天保の改革は、水野がこう宣言してはじまった。

そのおよそ半月前の四月二十八日、水野は矢部を小普請組支配から引きあげて南町奉行に抜擢した。これにも理由があるが、矢部が勘定奉行を罷免されたことに関連するので、これまたのちに述べる。

町奉行は町政の責任者で、北の町奉行は〝桜吹雪〟の彫物で知られる金さんこと遠山左衛門尉景元。水野は矢部と遠山の二人に、つまるところ〝奢侈の禁止〟と〝物価の引き下げ〟の二つをおこなえと強要した。

そんなことをしたら江戸の町は火が消えたように寂れてしまう。遠山はこう考えていて、水野に非協力的だった。水野に命ぜられた触れ流しをサボタージュした。水野は遠山の処分を将軍家慶に要求した。

公事上聴といって、江戸城内吹上の御庭で、将軍が寺社、町、勘定の三奉行、合計八人の裁判ぶりをじかに見聞する催しがあり、そのとき遠山は将軍家慶から、「今般の振る舞い、格別の儀、奉行たるべき者、左もあるべき事にて候」と賞詞された。家慶は遠山の人物を買っていた。「御目見差扣」という軽い処分ですませた。

いま一人の町奉行矢部も水野の改革に非協力的だった。だが、矢部の非協力的理由は遠山とはかなり違った。

ちょうどこのころ、藤田東湖は矢部を訪ねて聞いた。

「昨今の問題といえば物価の騰貴です。お上も頭を悩ませておられ、今度の御改革でも

重要問題になっているそうですが、どうしたら物価を引き下げることができるのでしょう？」

矢部は答えていった。

「その事、それがしも町奉行として日夜頭を痛めております。それで、閣老（老中）や御勘定奉行はというと、原因を奸商のせいにして、奸商の奸を摘発せよとしきりにそれがしに督促します」

この時代の商業はすべてに株仲間が結成され、株仲間が統制し、取り仕切っていた。そこで東湖は、つづけてこう尋ねた。

「奸商の奸というと十組をはじめとする株仲間が都下の諸物を占売占買して、価格を恣意的に操り、物価を高くしていることにつきます。奸商の奸を摘発するのは当然のことではないのですか」

矢部は答えていう。

「わたしは、物価高は十組など株仲間のせいだとは思いません。このところ、物価高を株仲間のせいにして、株仲間を糾弾する声が高くなっておりますが、いまの物価高は官府（幕府）の処置がよくなかったからなのです。官府が悪いことをしたから物価高になっているのです」

株仲間には、独占による物価高という弊害があるが、流通を円滑にするという利点もある。こういわなければならないところなのだが、矢部はそういわなかった。ほかにいいたいことがあるからで、矢部はつづける。

「物価高の原因をわたしはこう考えています。先年、新金銀貨が発行されました。それでたとえば、桜銀なる新銀貨は金百疋に通用しております。にもかかわらず、含んでいる銀の量は二十年前の南鐐（二朱銀）にほぼおなじ。その余も推して知るべし。だから物価は高くなっているのです」

金百疋というのは一分（金貨一両の四分の一の単位）のこと。桜銀というのは、桜が刻印してあるところからそう呼ばれるようになった通貨だが、それが金百疋（一分）に通用している。ところが桜銀（天保一分銀）の銀含有量は二十年前（正確には十三年前）に発行された南鐐とほぼおなじだと矢部はいう。

金貨は四進法をとっており、一分はイコール四朱だから、新しく発行された桜銀はほぼおなじ重さ（銀含有量）の南鐐の二倍もの価値が与えられることになったというわけで、「その余も推して知るべし」。ほかにも似たような通貨を発行している、と矢部はつづける。

そのような通貨を発行する幕府の狙いは、いうまでもない。益金を稼ぎだすことにある。しかしそれらの通貨の発行は、通貨の供給量を増やすことになるから、結果として物価高という弊害をもたらす。いまの物価高はそうやって起きているとも矢部はいう。

矢部が勝手方勘定奉行になったのは、天保七年九月二十日。翌年、天保八年十一月一日に五両判、十一月十五日に小判・一分判、十二月十八日に丁銀・小玉銀、十二月二十一日に一分銀（桜銀）が発行されている。そして翌年早々の天保九年二月二日に、矢部は罷免された。

時系列的に追えばよく分かる。矢部は通貨の改鋳に猛反対したのだ。それで、勘定奉行の座を追われたのである。

矢部のいうとおり、たしかに通貨の改鋳により物価高が起きていた。だが、天保八年からさかのぼること二十年前、文政元年からはじまった一連の通貨の改鋳による益金で、幕府は年々の財政を遣り繰りできるようになっていた。益金は財政収入の三割から四割を占める重要な財源となっており、益金なくして幕府は財政運営ができなくなっていた。

なるほど益金は民の利を奪う。また通貨の供給量が増大するので物価高という弊害ももたらす。しかし一方で、通貨の供給量増や幕府の財政支出増が、景気を刺激するという経済効果をもたらす。通貨改鋳を一方的に非難することはできなかった。だがこの時代の人たち、とくに矢部のようなインテリにはそこのところが理解できず、通貨の改鋳を断然〝悪〟とした。

矢部は大塩平八郎の乱があったとき、江戸城内で、「早大坂城は落ちた」だの、「堀伊賀守は京都へ逃げている」だの、「跡部山城守は百目筒に当って首は微塵に砕けた」だのと、尾鰭をつけて騒いだ。そのことに川路は「事々し」いと批判的だった。老中水野忠邦に面会をもとめて、「たかが浪人者になにができるというのです。駿河守（矢部）があわいったからといって、いたずらに騒がれませぬように」と忠告もした。川路はそのころ、矢部を軽躁な男と見て、矢部に批判的だった。それが東湖に「知謀余りありて、断決流るるが如し」というまでに評価をがらりと変えた。

川路も通貨の改鋳を〝悪〟とみなしていた。それで、堂々と論陣を張り、通貨の改鋳に身体を張るように反対して左遷された矢部を傑物と見直し、評価を百八十度、がらりと変えたのだ。

東湖に対する矢部の説明はつづく。

「官でそのような不正をおこなっていながら、ただ商賈（商人）のみを悪いと決めつけるのは間違っております。わたしもゆめゆめ奸商を弁護するわけではありませんが、物には本末があります。だから、閣老にはこういってやりました」

矢部は水野にこう反論した。

「まずは益金をとる目的で改鋳発行された金銀貨を元に戻されたい。それが先決です。そのうえでなおかつ物価が騰貴しているというのであれば、それがし、いかようにも奸商の罪を鞫問してご覧にいれましょう」

水野とて、通貨改鋳問題に対する考えは矢部や川路とおなじ。通貨を改鋳して益金を

得ることをいいこととは思っていなかった。いや、だから、通貨の改鋳に反対して勘定奉行の座を失った矢部を高く買い、矢部を町奉行に引きあげたのだ。しかし財政の現状は、益金にたよりきっている。いまさら如何ともしがたい。元に戻すことなどできない。

「できないことをいって人を困らせるものではない。それより株仲間を解散させれば物価は下がるのだから、さように早急に取り計らうよう」

水野は宥め賺すようにいう。

矢部はそれでも新金銀貨の撤廃を主張して譲らない。困り果てて水野は、みずからが町奉行に引き立てた矢部の首を切った。矢部を町奉行に復帰させて一年にもならない十二月二十一日のことである。

六

三田村鳶魚先生は「(矢部は)すこぶる陰の暗い人で、大いに探偵根性が突っ張っている」と書いたあと、こうつづけておられる。

「それから、矢部がすっかり探偵好きになってしまって、探偵を盛んに用いて人を排斥したり、立身出世の道具にしたりしたので、えらい騒動を惹き起すことにもなった」

なにをやったかというと、こうだ。

天保七年、飢饉のあった年だ。江戸も米不足で、南町奉行所の与力で「市中御救米取扱掛」の与力仁杉五郎左衛門は対応に追われた。

江戸の有力商人というと「町方御用達」で、十人近くいたが、その一人に芝田町に住む仙波太郎兵衛というのがいた。仙波太郎兵衛の先祖は京からやってきた牛車引き。五代目が身を起こして、江戸でも有数の両替商(実体は金融業者)となったのだが、仁杉五郎左衛門は当代の仙波太郎兵衛を呼んでいった。

「そのほうに米買付方を申しつける」

町方の与力は不浄役人とされており、江戸城に登城することなど皆無で、役人としてははなはだ貶められていたのだが、それでも町政においては大層な権力を持っていた。仙波は両替商だ。米の買い付けなど無縁だったが、断ることなどできない。迷惑だと思いながらも、

「有り難き仕合わせに存じます」

と手をついて謝辞を述べた。

仙波の米の買い付けは案の定はかどらない。それは仁杉も十分承知のうえのことで、仙波を呼び、深川佐賀町の米問屋又兵衛を引き合わせていった。

「この者をそのほうの手代として越後表に米の買い付けに差し遣わす。追って又兵衛より、米代を為替で送ってもらいたいといってくるだろうから、その節は立て替えてやる

ように」

「いかほどになりましょうか」

仙波は恐る恐る聞いた。

「一万両にもなろう」

「げえー」

仙波は仰天していった。

「そんな大金、とても用立てかねます」

「一時の立て替えだ。米は値上がりする一方なのだから、江戸へ運んできて売れば儲かる。そのほうにだって儲けは転がり込む。なにをためらっておる」

「一万両は大金です」

四、五十年前の寛政の改革時に、仙波の先代は八万両という御用金を幕府に上納した。一万両くらいわけもないと仙波の懐を見透かしてのことで、仁杉はいう。

「そのほうは方々に家屋敷を持っておるそうな。沽券状（権利書）を質に入れるだけでも、一万両くらい容易に都合がつこう。それでも用立てられぬと申すか」

「とはおっしゃいますが」

「お膝元でなんの大過もなく商売をしておられるのは誰のお陰だ。お上のお陰ではないのか。こんなときに、日頃の御恩顧、冥加に報いないでどうする」

仁杉からさんざんに脅されて、仙波は一万両の大金を用立てると約束させられた。そしてもし買い付けた米を江戸へ回漕して、損が生じたら、わたしが負担しますという、請書も提出させられた。

米問屋又兵衛は越後に米の買い付けに出向いた。又兵衛は仙波に一万両近くを送ってくるようにと申し送った。仙波はいわれたとおりの額を為替で送った。

買い付けた米の江戸への回漕は遅れ、売却価格は仕入価格を下まわった。金額ははっきりしないが損がでた。仁杉は約束させたとおり、損を仙波に被らせた。ついでに又兵衛が越後で使った酒食遊興費も仙波に持たせた。

まずこういうことがあった。つぎに仁杉は本材木町の地廻り米問屋孫兵衛らにも、ひそかに市中の米を買うように命じた。こちらは損をだしていないようなのだが、仁杉としては、損をだすようなら、仙波に負担させる腹積もりだったようだ。

これらの一件を通じて、仁杉は以下のように私腹を肥やした。

一、地廻り米問屋孫兵衛らから、多分儲けの中からだろう金子二百両を受け取った。

一、孫兵衛らは、ついては「東国米問屋」という名目の問屋を認めてもらいたいと願った。仁杉は認め、謝礼として鰹節一箱と具足代金六十五両を貰い受けた。

一、仁杉と妾は以後、孫兵衛らから、年々盆暮に金二両二分ずつ受け取ることになった。

一、仁杉が公用で大坂へ出向くとき、孫兵衛らから餞別として五十両を受け取った。

一、仁杉には鹿之助という与力見習い中の伜がおり、家出をしたり、放埒に振る舞っていた。若者には往々にしてあることだが、そのためそのつど、親の五郎左衛門が尻拭いをし、その金をまた地廻り米問屋孫兵衛に用立ててもらっていた。

さてそれで矢部定謙だが、どういうわけか矢部はこの仁杉の動きに目を光らせていた。これらの動きがあったのは矢部が江戸へ戻ってくる寸前くらいからで、矢部の勘定奉行時代だが、矢部は仙波から、「御救米勘定書控」を内々に差しださせた。

ただし「御救米勘定書控」からは、損を仙波に被らせたというのは分かるが、仁杉が私腹を肥やしたというのが分からない。そこでさらにその後、西丸留守居に左遷させられてから、南の年番下役（会計事務、営繕等を取り扱った）として仁杉の下で働いていた堀口六左衛門に接触をはかった。

三田村鳶魚先生は、矢部が堀口の娘を見初め、金にあかせ、妾にして堀口を取り込んだということだが、これまた出典が明らかにされていないから事実かどうかは分からない。ただし、同心の俸禄はわずか三十俵二人扶持。ありえなくもなく、ともかく矢部は堀口を抱き込んで、一件について事情を聴取した。

矢部の目的はなにか。鳶魚先生は南町奉行筒井伊賀守を蹴落として、自分が後釜にすわることにあったといわれる。西丸留守居時代のことなら分かる。勘定奉行時代から探

りを入れているのだ。町奉行のほうが上席だが、勘定奉行と町奉行は同格。筒井を蹴落として後釜におさまるためというのは理由が薄弱だ。

事実は、鳶魚先生がいうところの「すっかり探偵好きになってしまった」〝探偵癖〟が身についてしまったというところではないのだろうか。人の弱みを握っておいて、それとなく威嚇する。そんなところが矢部の狙いではなかったか。

大御所家斉が将軍職を伜の家慶に譲る前の、文政初年から天保初年にかけての実質総理は水野出羽守忠成という男で、この男は同僚の弱みを摑むが、摑むだけで暴かないということで、同僚に無言のプレッシャーをかけ、権力を維持した。矢部の狙いもそんなところだったろうと思える。

七

矢部が接触した堀口六左衛門の同僚の年番下役に、佐久間伝蔵という男がいた。佐久間はいつしか堀口が矢部と接触しているというのを知った。矢部が仁杉の不正を摑もうとしているのもだ。その矢部が事もあろうに、老中水野忠邦から抜擢され、御奉行として南町奉行所に舞い降りてきた。そしてときに堀口を呼んでひそひそやっている。

佐久間は仁杉の部下である。命ぜられるまま、あれこれやった。なかには不正もある。

それらあることないことを、堀口が矢部に吹き込んでいるのではないかと気が気でない。それに人一倍神経が過敏で、堀口が自分一人を悪者にして矢部の耳に入れていると思えてならず、ノイローゼ気味になった。あの男を生かしてはおけぬと思った。

佐久間と堀口はともに年番下役。おなじ部屋で働いている。朝一番に出勤して堀口を待った。堀口はいっかなやってこない。そこへ、見習いとして役所にでている堀口の倅貞五郎がなんの用があってか、やってきた。

「きた」

佐久間は父六左衛門と取り違え、倅貞五郎の首を一刀のもとに打ち落とした。そこへおなじく同僚の高木平次兵衛がやってきた。佐久間は錯乱状態になっている。高木にも斬りかかって疵を負わせ、そのあと、柱に寄りかかり、喉を突いて自害した。矢部が南町奉行になって二カ月後の六月二十九日のことである。

奉行所内での思いがけない不祥事である。なんとか片をつけなければならない。背景は、よく知っている。そもそも自分がきっかけをつくっており、突き詰めていくと、仁杉の買上米不正の一件までいきつく。ただし不正といっても、仁杉も「市中御救米取扱掛」としてやったことで、目くじらを立てて暴くようなことではない。いまではそうと分かっているが、それでも不正は不正だ。処分しないですませるわけにはいかない。そこで、

「仁杉五郎左衛門は御暇押込ということでけりをつけたらどうか」

矢部はこう指示した。

御暇は旗本でいうなら改易だからきついことはきついが、賄賂の件まで暴かれたら死罪は間違いないから、処分としては穏当といえた。仁杉は「御暇押込」に処された。

もちろん、事件は老中水野忠邦の耳にも入った。矢部がおかしなふうに関わっていたというのも、水野は知った。

矢部は町奉行に取り立ててやった恩を忘れ、あろうことか真っ向から逆らった。許せぬ。矢部を罷免したあとも、水野の憤激はおさまらない。

「仁杉五郎左衛門の一件を再審せよ」

評定所一座に命じた。再審すれば、必ず矢部を罪に陥れることができると読んでのことだ。

重大事件は評定所が取り扱う。たとえば川路聖謨が裁いて名を挙げた仙石騒動などは、五手掛りといって、寺社、町、勘定の三奉行に大目付、目付が立ち会って審理した。重大事件といわれるほどの事件でなく、御目見以上の者の犯罪などという事件は、三手掛りといって町奉行一人、勘定奉行一人に、目付、もしくは掛り奉行一人に大目付、目付が立ち会って審理した。

南町奉行所内での不祥事だから、北町奉行の遠山が掛りの奉行として扱うことになっ

た。

「嫌な仕事がまわってきた」

と遠山は思ったろう。しかし逃げるわけにはいかない。大目付初鹿野美濃守信正、御目付榊原主計頭忠義の立ち会いのもとに、遠山が審理をはじめた。

仁杉五郎左衛門が仙波太郎兵衛に対してやったことは、仙波が江戸で一、二の金持ちだから、「市中御救米取扱掛」として、少々損を負担させても罰は当たるまいと思ってやったことで、どうということではない。だがついでに地廻り米問屋孫兵衛から賄賂を受け取っている。これは見逃せない。見逃すと自分の落ち度になる。

したがって判決文を書きあげると、こうならざるを得ない。

「御救米取扱掛は重立ち候身分。にもかかわらず公儀を欺く致し方。右始末不届きにつき死罪を申しつくる」

この時代の牢は不潔で牢死は珍しくなく、仁杉は牢死していた。あるいはほかに余罪があって、それが明らかになるとほかへ飛び火するのを関係者が恐れて、ひそかに息をふさいだということも考えられるが、いずれにしろ仁杉は死んでいたから、判決文はこうなった。

「存命ならば死罪」

仁杉五郎左衛門と佐久間伝蔵の刃傷一件は密接に関連している。当然、佐久間伝蔵の

刃傷一件を調べ直さなければならない。すると、矢部が微妙にからんでいるというのが分かった。

矢部は勘定奉行時代に、仙波から「御救米勘定書控」を内々取り寄せ、ひそかに一件を調べていた。仙波を呼んで糺すと、「おっしゃるとおり、御救米勘定書控を内々差しだしました」という。さらには西丸留守居時代に、仁杉の部下堀口六左衛門を抱き込んで、内々取り調べていたというのも分かった。これらは、

「町奉行を仰せ付けられる以前、支配違いの者どもと申し談じ、穿鑿に及び候段は、筋違いの取り計らいに之有り」

ということになる。

その後、矢部は町奉行になった。であれば、過去内偵していたことを暴かねばならない。しかし暴くといまや身内の、南町奉行所内の部下全員から顰蹙を買う。暴けない。それにもともと暴くつもりで内偵していたのではない。放っておいた。佐久間伝蔵の刃傷一件も、自身も絡んでいるから突っ込んで追及できない。穏便に取り計らうようにと指示した。これらのことはこうなる。

「町奉行所仰せ付けられ候以後は、却って取り繕い候取り計らい振りに之有り、不審」

しかも矢部は遠山の一度目の取り調べで一切を、

「覚えがござらぬ」

と否定した。遠山は、しからばとあらたに証拠を集めて再度審尋した。矢部は返答に窮して、

「相違ござらぬ」

と白状した。以上のことは、

「彼是御後闇しき致し方」

ということになる。矢部はまた審問中、懇意にしている者に、

「この度の儀は冤罪である」

と手紙を書き送った。また、おこなわれている水野の改革を非難する文書も方々へ書き送った。これもまた、

「人心を誑惑致させ候手段に相聞え。更に身分に似合わず、心底不届きの至りに候」

ということになる。

よって、主文はこうなった。

「松平和之進（伊勢桑名の大名）へ御預け仰せ付けられ候もの也」

「彼是御後闇しき致し方」からは水野が朱を入れたのではないか。遠山なら、こんな後生の悪い判決はくださない。

大目付の初鹿野が、遠山と御目付の榊原との立ち会いのもとに、評定所でそう申し渡したのが天保十三年三月二十一日。矢部が町奉行を罷免されたのが天保十二年十二月二十一日だから、ちょうど三カ月後のことで、矢部はいわば無期懲役の身となった。そして子の鶴松も評定所に呼びだされて、おなじく初鹿野から「改易」を申し渡された。

それで一体、矢部がやったことが無期懲役に値するのかどうかだが、値するといわれてもこれは文句がいえない。「彼是御後闇しき致し方」だけでなく、改革は将軍の名でおこなわれており、それをあからさまに誹謗するのは、将軍を誹謗することにほかならないからだ。ただし、こういうことは、ふつう見逃す。問題にしない。問題にすること自体がおかしい。水野は敢えて問題にして、矢部を無期懲役の刑に処した。

頃は改革の真っ最中。矢部が罷免される前一月くらいの間に、奢侈を禁止する触れがだされ、つづいて芝居三座に移転命令がだされ、株仲間が停止され、女髪結が停止になった。改革そのものが異常性を帯びはじめているのが、市民はいうまでもなく、担当役人にもひしと感じられるようになっていた。さらにその後も、あれをするなこれをするなで、改革を非難するチョボクレがでまわるようになり、水野はこう罵倒された。

〽あげくの果てには義太夫娘を手錠で預けて、面白そうなる顔付きするのは、どんな魔王の生まれ代わりか、人面獣心古今の悪玉――。

矢部に対する処罰も〝人面獣心古今の悪玉〟ならやって不思議はないと誰もが思い、矢部に同情した。矢部は悲劇の主人公になり、そのこともあって歴史に名を残した。

だが、矢部とて文句はいえない。

「それから、矢部がすっかり探偵好きになってしまって、探偵を盛んに用いて人を排斥したり、立身出世の道具にしたりしたので、えらい騒動を惹き起すことにもなった」

と三田村鳶魚先生のおっしゃっておられるとおり。いらざることをした結果で、ある意味では身からでた錆ともいえよう。

見栄は一日　恥は百日

一

両国橋を向う両国に渡って、隅田川の川沿いを吾妻橋の方に上っていく通称川端には、隅田川に向かって大名の上中下屋敷が軒を並べている。最初が伊勢津藤堂家の下屋敷、次が陸奥弘前津軽家の隠居屋敷。

津軽家の上屋敷は本所二ツ目にある。二年前、越中守と名乗っていた右京大夫寧親が家督を伜信順に譲るに当たり、上屋敷に近く、かつ眺めがいいところということで、さる大名から相対替で手に入れたのが川端の、この隠居屋敷である。

右京大夫は万事に派手好みだった。一年前、伜越中守信順に、将軍家斉の弟田安中納言斉匡の娘欽姫を迎えるに当たっては、新御殿を建てるなど惜しげもなく金を遣った。隠居屋敷もあちらこちらと手を入れた。自身が住む建物も建て替えた。これみよがしに、木の香も新しい、辺り威風を払う表門もあらたに建てた。

津軽家は右京大夫の派手好みの他、いらざる金遣いがたたって借金だらけだった。にもかかわらず右京大夫は、どこ吹く風と借金を増やし、借金は五十万両になんなんとしていた。

筑波颪が隅田川を下るように渡ってきて、両岸に寒風を吹きつけている。凍えるように寒いその朝、重臣笠原八郎兵衛は、一睡もしていない腫れぼったい目をこすりながら、隠居屋敷にそそくさと入っていった。

「八郎兵衛にござりまする」

笠原八郎兵衛は廊下にひざまずく。

「入れ」

小姓に髪を結わせて、髭を当たらせていた右京大夫が声を返す。

笠原八郎兵衛は中に入り、障子を閉め、居住まいを正していった。

「払暁に亡くなられました」

「そうか」

この二月十七日の朝まだき、一橋儀同殿こと一橋治済、当十一代将軍家斉の実父が亡くなった。

一橋儀同治済は宝暦元年（一七五一）の生まれだから、この文政十年（一八二七）で七十七歳。

「寄る年波には勝てぬということで、いわば大往生だ」

「屋敷の方々の中にもさよう囁かれる方がおられました」

津軽家にとって一橋治済は、嫁欽姫の実父である田安中納言斉匡のそのまた実父。家格は違うがそれでも親戚になる。儀同殿危篤との知らせに、笠原八郎兵衛は上屋敷の者

数人と、前夜から一橋御門内の屋敷に詰めかけていた。

「弔問その他、抜かりなきよう、上屋敷の者どもに申し伝えてあるか？」

「もちろんです」

「それで、御大礼の日程はどういうことになりそうだ？」

「そのことですが」

と笠原八郎兵衛がいったとき、

「待て、厠だ」

右京大夫は、渋るのか腹を抱えながら座を立った。

人は、子供がおもちゃを欲しがるように位階官職を欲しがる。

将軍家斉は五年前の文政五年に、従一位左大臣に昇進した。同時に、伜の家慶を正二位内大臣に昇進させた。

太政官の官職は最高位の太政大臣以下、左大臣、右大臣、内大臣となっている。その下に大納言、中納言とつづくのだが、家斉が左大臣、家慶が内大臣となって、左大臣以下の三官職のうち二官職を、京にはいない江戸の、将軍父子で占めることになった。

二年前の文政八年には、一橋治済が准大臣になった。

准大臣というのは、大臣に闕官がないため大臣になれないでいる人を慰めるため、詔を下して任じる官職で、唐名を儀同三司という。折り目正しい官職で、以後治済の

ことを、一橋儀同殿と称するようにと触れもだされた。

この一橋儀同治済をも加えると、左大臣以下の四官職のうち三官職を、将軍家の親子孫の三人で占めていた。

人の欲望にきりはない。家斉はさらに上の、太政大臣をと願った。

源頼朝が鎌倉に幕府を開いて以来、将軍が、生前太政大臣に任ぜられた例はない。賄賂をたっぷり遣われた京は毒気をなくしている。毒食わば皿の、自棄糞のような気分もあった。認めた。家斉は左大臣から太政大臣に昇進することになった。ついでに家慶も正二位から従一位に昇ることになった。

そしてその昇進昇階の儀式、御大礼は、およそ一カ月後の三月十八日に、勅使、院使、大宮使等が下向しておこなわれることになっていた。

「待たせた」

さっぱりした顔で右京大夫が戻ってきた。

「日程ですが、いま儀同様の死を公にされると、上様も内府（家慶）様も喪に服さねばなりません」

「上様にとってはご実父、内府様にとってはご実祖父の死だ。そうならざるを得まい」

「すると、御大礼も先に延ばさざるを得なくなってしまいます」

「そういうことになるが」

といって右京大夫は肉の厚い顔をしかめる。

「その後、出羽殿はなんと？」

「相変わらず首を縦に振られません。どころか、最近は煙たがられてろくろくお会いいただけません」

「とにかくだ。お墨付をいただいておくにこしたことはない。だから、なんとしてでも出羽殿のお墨付をいただくよう。いま一働き励んでくれ」

「はい」

「たのんだぞ」

「ははあ」

と返事をして屋敷を出たものの、笠原八郎兵衛の心は重く、足取りも重かった。

二

陸奥弘前津軽家はかつて高四万七千石。千石を公収されて四万六千石。歴代の殿様は従五位下で柳之間席。外様の並び大名にすぎなかった。

田沼時代といわれている江戸の中期から、北の辺境が騒がしくなり、ロシアの南下が顕著になった。摩擦衝突も起こり、津軽家はそのつど兵を送らされた。兵の派遣は、ロシアが摩擦衝突を避けるようになった文化の末年、十数年前までつづいた。

津軽家側からいえば、しかしこのことは大いに国家に貢献したことになる。幕府は賞して、派兵がつづいていたころの文化二年（一八〇五）五月に、津軽家を七万石に高直しした。

高直しは、文字どおり高を直すだけだ。別に土地が増えたわけでなく、なんの実利もなかったのだが、格は若干高くなった。

三年後の文化五年十二月には、さらに十万石に高直しした。ついでに右京大夫（当時は越中守）を四品に上げた。

四品は従四位下の無官である。同時に、御城での控え席も、国持大名が詰める大広間とした。

十万石で、四品で、大広間席――。

〈その他大勢組の並び大名ではない。国持大名同然である〉

だからと右京大夫は思った。当時九歳だった伜の越中守信順に、

〈家格にふさわしい嫁を迎えなければならない〉

京の近衛家は、津軽家にとっては故あって、主筋、ということになっている。家格も違う。なのに、近衛家くらいでなければと気張った。大枚を遣って近衛家に取り入り、姫君と婚約までこぎつけた。文化八年のことだが、あいにく姫は二年後に早逝した。

代わりは、当たり前だが近衛家に匹敵するような家から迎えなければならない。「一働きせよ」と、右京大夫は側近笠原八郎兵衛の尻を叩いた。

笠原八郎兵衛は、将軍家斉のお気に入りと評判の側用人（これは大名の役である）、水野出羽守の家老土方縫殿助に取り入った。

土方縫殿助は、家斉に何度も目通りしており、家斉に絶大の信頼があった。水野出羽守がなんであれ家斉に言上すると、「縫殿助は承知しているのであろうなあ？」とか「縫殿助はどう申しておるのだ？」とか、そのつど家斉が聞き返したほどの、天下に知られた利け者だった。

その土方縫殿助に金に糸目をつけずに接近して、文化十一年に、御三卿の一、田安中納言（当時右衛門督）斉匡の娘鋭姫を迎える話がととのった。

官位の欲望にきりがないのは右京大夫も同様である。

「侍従に挙げてもらいたい。いま一度働け」

とまたまた笠原八郎兵衛の尻を叩いた。

笠原八郎兵衛はふたたび金に糸目をつけずに縫殿助をたよった。

そのころ水野出羽守は側用人から老中に転じ、単に家斉のお気に入りというだけでなく、老中としても力を持ちはじめていたが用件が用件だ。権門勢家にも抜かりなく付届けするようにと縫殿助は指示する。笠原八郎兵衛は指示どおりに、あちらこちらと金品

を配ってまわった。

その甲斐あって右京大夫は、文政三年（文化十五年に文政元年と改元）、侍従に挙げられた。

従四位下侍従で大広間席――。

〈いまや押しも押されぬ大大名〉

意気天を衝く気分だった。

侍従に挙げられたちょうどその日、式を挙げていない婚約者の鋭姫が、不幸にも病死した。越中守信順にとっては二度目の婚約者の死であるが、後釜に不足はなかった。

将軍家斉はオットセイ将軍とあだ名されたほどで、生涯で五十五人もの子を産ませている。弟の田安中納言斉匡も、兄家斉に負けずに頑張り、次から次へと子をつくっていた。鋭姫の下には、いっぱい妹がいた。妹の一人欽姫を迎えることになり、欽姫とあらためて婚約がととのった。

大名の子も、年頭五節句や月次出仕など、諸大名が総登城して将軍に拝礼する日はおなじく登城し、父とおなじ部屋に詰め、父とおなじように将軍に拝礼した。大名の子は参勤交代しない。ずっと江戸にいる。父が御暇で帰国しているときには、父の名代をも兼ねて登城拝礼した。もちろん官位も授かった。越中守信順も早くに従五位下に叙されて大隈守と名乗っていた。

そこでまたまた右京大夫は、伜越中守（当時は大隈守）を四品に挙げてもらおうと欲を掻き、笠原八郎兵衛の尻を叩いた。

笠原八郎兵衛もまたまた、いつもとおなじように土方縫殿助をたより、縫殿助の指示で金品をばらまいた。効験はたちまちあらわれ、田安中納言殿の娘婿になられることでもあるしと、越中守信順は四品に挙げられた。

文政七年のことで、右京大夫は、欲しいものはすべて手に入れたと思った。十分に満足して、翌文政八年、心おきなく隠居し、伜越中守信順に家督を譲った。

その翌年の文政九年、越中守信順は、三度目の婚約相手欽姫と結婚した。ときに越中守信順は、いささかとうの立った二十七歳。欽姫は十八歳だった。

将軍家斉が太政大臣に昇進するという噂は、その年文政九年の年頭から流れていた。二月になると、古参の老中青山下野守が御昇進の打ち合わせに京に上っていき、周知の事実となったのだが、右京大夫にとってそのことは、別の意味で重大な関心事であった。太政大臣に昇進ということになると、これまでの昇進と違って、特別の儀式がおこなわれる。洩れ聞こえてくるところによると、将軍の即位と同格の、御大礼に匹敵する儀式ということだった。

御大礼では、諸大夫（従五位下）以上は束帯。さらに従四位下侍従以上は轅（長柄とも書く）に乗る。勅使などは輿。御三家も輿だ。

輿というのは、前後一人ずつの力者（輿舁きともいう）が、左右二本の轅に結びつけた、帯のような白布を肩にかけ、轅に手を添えて担ぐ乗物である。

轅は輿の一種だが、従四位下侍従以上の国持大名が乗る轅は、板輿といって、帯のような白布がなく、力者が、長い柄（轅）を両手で担いで運ぶ。いわゆる〝上げ輿〟である。

右京大夫が現役なら、従四位下侍従だったから乗ることが許された。伜越中守は四品である。許されない。

在府の、大広間席の同席（同僚）は十人くらいいる。同席は全員轅だ。伜だけが通常の駕籠。これはいかにも残念無念な、右京大夫にとって耐え難いことである。

右京大夫は、十六年前の文化八年、近衛家の姫を嫁に迎える婚約がととのったとき、近衛家にたのんで、ひそかに轅を譲り受けていた。右京大夫自身はとうとうその轅に乗る機会がなかったのだが、なんとしてでも伜を轅に乗せたい。いや乗せずにおくものかと、このときまたまたいつもの欲望を掻き立てた。

そして笠原八郎兵衛を呼びつけ、いつものように、

「越中を轅に乗せたい。働け」

と命じた。笠原八郎兵衛もまたまたいつものように、そのころ隠居して祐因と名乗っていた土方縫殿助をたよった。

「難しいのう」

土方縫殿助は眉間に皺を寄せる。田安家の娘婿という威をきかせても、四品は轅に乗れない。いつものように金品をばらまいたからといって決まりを曲げられるものではない。

それにだんだん事情を糺すと、文化八年、近衛家から轅を譲ってもらったとき、そのころ四品の右京大夫自身が、幕閣を取り仕切っていた〝小難しや〟の老中松平伊豆守に、轅の使用許可を伺ってこんな挨拶（回答）を受け取っていたのだという。

「轅相用い候儀、相成り難き事」

幕府の政治は何事も先例を重んじる。駄目だという回答を、にわかにここで覆したりできない。

「他ならぬ右京大夫殿のこと。たいがいのことなら聞いて差し上げたいが、こればかりは無理だ」

縫殿助はそうはっきり首を振る。

「難しいのは百も承知です。そこを押して」

笠原八郎兵衛は平身低頭する。

縫殿助はしばし思案していった。

「じゃあまあ、考えてみよう。知恵を使えばなんとかなるやもしれぬ」

知恵とはなにか。御大礼までに、殿（越中守）を侍従に挙げること。大殿（右京大夫）は侍従に昇っている。前例のないことではない。さして難しいことではない。侍従に昇れば、殿はなんの支障もなく轅に乗ることができる。

そうではなかろうかと、笠原八郎兵衛は推測した。大船に乗った気持ちで、縫殿助の段取りを待った。

やがて縫殿助は呼び出していう。侍従に挙げる。任せておけ。その代わりムニャムニャ。

謝礼込みの運動費が必要だというわけだ。そこでまたいわれたとおり、笠原八郎兵衛は巨額の金品を縫殿助に贈り届けた。

ところがその、当の縫殿助が死んでしまった。十月十八日のことで、一橋儀同治済と同様老齢だったが、寸前まで矍鑠としていたから思いもよらぬことで、慌てて主人水野出羽守の公用人をたよった。

ふだんがふだんだった。縫殿助ばかりを相手にして公用人への付届けをおろそかにしていた。いい顔をしない。また、侍従の話など聞いていないという。

そうこうするうち十二月になった。

大名の昇進昇階は十二月中旬、だいたい十五日におこなわれる。十二月十五日に越中守信順は侍従に挙げられ、従四位下侍従となるはずだったのだが、かなわずに十二月十

五日が過ぎてしまった。

こうなれば、直接水野出羽守からお墨付をいただくしかない。出羽守はこのころ飛ぶ鳥も落とす勢いの、威勢並ぶ者ない老中だった。出羽守のお墨付さえいただけば、許しを得たも同然。

笠原八郎兵衛は辰ノ口の出羽守屋敷に日参した。

水野出羽守は幕府の立場に立っていうなら勝手方取り直し（財政再建）の大功労者だった。勝手掛（財政専管）老中として文政元年（一八一八）から貨幣の改革にとりかかり、幕府の財政をみるみる豊かにした。家斉はこの、出羽守の〝業績〟を高く評価した。

「おまえのおかげだ」と出羽守自身を相手に、何度も口にした。

出羽守もまた、そのような家斉の評価や信頼によく応えた。従一位ではあったが無官の一橋治済を准大臣にと京へ根回ししたのも出羽守である。家斉の太政大臣への昇進、家慶の従一位への昇階をおなじく京へ根回ししたのも出羽守だ。

そんなわけで出羽守の屋敷は門前市をなしており、しかも年末年始の行事が重なって出羽守はいたって御用繁多。日参するものの、容易に会ってもらえず、松がとれてからなんとか面会を許されたが、返事は、

「お墨付などそのようなものは出せぬ」

とニベもない。

「祐因（縫殿助）殿のご指示をいろいろ仰いでいたことでもござりますれば」

と暗に巨額の賄賂を遣っていたのだとほのめかすと、賄賂は出羽守自身には届いていなかったのか、

「ならぬものはならぬ。駕籠でなんの不足がある」

と挨拶はけんもほろろだった。

その後二月に入ってからは、一橋治済の不例（病気）がつづいたものだから、なおのこと会ってもらえず、いまにいたっていた。右京大夫に尻を叩かれても動きようがなかった。

三

「三月に入ると、勅使、院使ら、京からの御使の方々は、順に江戸に入られる。上（将軍）や内府様が定式の忌に服されていると、方々を一月以上も江戸にお留めすることになる。とりあえず儀同殿の死を伏せ、御大礼のあとに公にするというのはいかがでござろう？」

古参も古参、最古参の老中青山下野守が提案する。ここは営中（城内）の、老中の執務室、御用部屋である。

「なに、方々には忌明けまで江戸に逗留していただけばよろしい。忌を伏せて御大礼をおこなうなど不自然です」

古参ということでは青山下野守に次ぐ、実力者の水野出羽守が応じる。

老中は打ち揃って、

「いかがいたしましょうか？」

と将軍家斉に伺った。

「出羽が申す通りに」

と家斉はいう。たしかに忌を伏せるなど不自然で、口さがない雀がどんな落首落書をひねるか知れたものではない。忌は公表されることになった。

死後三日目の、二月二十日に触れられた。同時に普請は七日、鳴物は十四日の停止とされた。家斉は定式、家慶は半減の喪に服すことになった。その旨京にも報じられた。

毒食わば皿の京は、物分かりがいい。

「服忌の期間を短くすればいいではありませんか」

といってきた。

期間は短縮された。喪は三月四日に明け、三月五日に出棺、七日から十三日まで法事となった。

その間に、勅使、院使らもおいおい到着。予定通り、三月の十八日に御大礼、〝御昇進　御昇階〟の儀式がとりおこなわれることになった。

笠原八郎兵衛はその後も、出羽守の屋敷に日参したのだが、とうとうお墨付はいただけなかった。そして前日の十七日を迎えた。

「こうなれば致し方ない」

と右京大夫はいう。あきらめた、駕籠にしようと、口にされるのだと思ったらさにあらず、

「強行しよう」

びっくりしていった。

「それはなりません」

「とぼけて乗るのだ」

「そんなことをしたら、必ずやお咎めが」

「いや、越中（信順）は田安中納言殿の婿殿だ。上様にとっては姪御の婿殿である。咎める者などいはしない。かりにいたとしても、中納言殿から上様に手をまわしてもらって、揉み消してもらう」

肚を括ったのか、右京大夫の目はすわっていた。思い止まらせるなど、できそうもなかった。

「それから、明日、登城からの帰りだ。両国橋を渡ったら、藤堂家の屋敷脇から我が屋

敷の前にでるよう。そのあと川端を上り、久須美佐渡守の下屋敷の脇から埋堀を右折し、ぐるっとまわって屋敷に戻れ」

「お練りをやるのでございますか？」

「そうだ、陸奥弘前津軽越中守は轅に乗れる身分であることを、世間に知らしめるのだ。供廻りも綺羅をつくさせよ。六尺手廻りにいたるまでだ。よいな」

「畏まりましてござりまする」

江戸っ子は落首落書の類いを捻るのが好きだし、上手い。

上洛もせずに太政大臣は
　これぞ武将（不精）のはじめなりけり
不精（武将）とも横着だともいわばいえ
　食らい（位）過ぎでは動かれもせず

いくらなんでも太政大臣は欲張りすぎだ、という落首落書の類いが舞っている中、翌日、三月十八日、御大礼の日を迎えた。

津軽越中守信順は轅に乗ってしゃなりしゃなりと本所二ツ目の上屋敷を出た。

欽姫の住む新御殿だけでなく、門墻などを飾り立てている上屋敷にふさわしい、綺羅をつくした行列で、とりわけ磨き上げた見慣れぬ轅が人目を引いた。

この日、おなじ本所の、肥前平戸六万石松浦家の下屋敷に住む隠居の松浦静山は、越

中守が轅に乗ったという話を伝え聞き、首をひねりながらこう書き留めた。

「津軽侯の登営には……轅に乗りたりと聞く。四品の人もこれに乗るか。隠倫（隠居）の身は、かかる雲上のことは露ほども弁えず」

四品は轅に乗らないはずが、隠居して日が経つ。決まりが変わったのかもしれないと。

京からは、勅使、院使の他、鷹司右大将が代表として下向し、西窪天徳寺に宿泊していた。その他の者も、あちらの寺、こちらの寺と分宿していた。その九人のうち、鷹司も入れて下向組は六人が輿である。

御三家は尾張が御暇で不在。江戸にいるのは紀伊と常府の水戸で、紀伊と水戸も輿。

在府の大広間詰の国持、準国持大名は、薩摩、黒田、土佐、佐竹、上杉、有馬、津山、丹羽、富山父子。いずれも轅で、富山父松平（前田）淡路守は本家加賀守の名代として、嫡子出雲守は父淡路守の名代として、それぞれ轅を許されていた。

いつもとは違う、天明七年に家斉が即位して以来四十年ぶりの、駕籠に輿や轅が混じる珍しい登城風景に、物見高い江戸っ子が大手御門や内桜田御門の下馬先に所狭しと詰めかけて見物する中、越中守信順も轅に乗ってやってきた。

輿の乗り下りは、奥から順に、鷹司が御玄関。勅使二人に院使一人が中雀門升形外の御持御門ノ坂。紀伊と水戸がおなじく御持御門外正面。残る二人、大宮使と衣紋が下乗橋内百人番御門升形外。こう厳密に取り決められている。

国持大名らは下乗橋の外。いつもと変わりない。

越中守信順も轅を下り、笏を右手に束帯姿で下乗橋を渡っていった。

幕府には、役人の公務を監察し、非違を弾劾する、目付という奇異な役職があった。すこぶる威権のある役職で、およそ十人くらいの御目付の下に、御徒目付、さらにその下に御小人目付がいた。彼らはこの日も出役して目を光らせていたが、誰一人として、越中守信順が許しを得ずに轅に乗っていることに気がつかなかった。越中守があまりにも堂々と振る舞っていたせいである。なかには松浦静山と同様、決まりが変わったのだろうと思った者もいた。

将軍家斉にしろ、内府家慶にしろ、拝謁は控えの席ごとにおこなう。

御三家の詰める大廊下上の御部屋席、次にこれは特別に加賀中納言、将軍の親戚筋が詰める大廊下下の御部屋席、そして国持大名らの大広間席……という順になる。

越中守信順も、大広間席の大名とともに将軍家斉に、つづいて西丸に出向いて内府家慶にと拝礼、祝辞を言上して下がった。

帰りもおなじだ。下乗橋外で、堂々と轅に乗り、両国橋を渡り、藤堂家の下屋敷の脇をぐるりとまわって川端の、右京大夫の隠居屋敷の前に出た。

笠原八郎兵衛は重役である。供廻りにはくわわっていない。右京大夫とともに、門前で行列を迎えた。

侍を先頭に、金紋の挟み箱。毛槍。傘。何人もの侍とつづき、ふだんとは違って素襖を着たこれまた何人もの小姓。そして轅。

轅は布衣に身を固めた刀持が両側を固めている。また轅は素通しで、中の、束帯姿の越中守信順の姿が見える。

越中守がこちらを見る。

「うむ」

満足そうに頷いて、右京大夫は傍らの笠原八郎兵衛につぶやいた。

「どうだ。なにごともなかったろう。気づいた者はいないし、気づいても、田安の婿殿だ。とくに許しを得てのことと思って、気にも止めぬのだ。そんなものなのだ、世の中というものは」

そんな会話を尻目に、行列は川端をしゃなりしゃなりと練るように行進し、本所をぐるりと一回りして二ツ目の屋敷に帰り着いた。

四

そのころ、院使の冷泉前大納言為訓は、御馳走役の、日向高鍋二万七千石秋月筑前守にこう尋ねた。

「津軽越中守は四品やないんですか？」
「そうですが……」
冷泉前大納言は首を傾げてつづける。
「そやのに、なんで轅に乗っとったんでっしゃろ？」
「何方（いずかた）へ伺ってのことと思いますが」
秋月筑前守はそう思っていた。
「そやけど、四品は轅に乗られんものと決まっとります。どなたに伺おうと、乗られんものは乗られんのどすけどなあ」
いわれてみればそうだ。
「どういうことなのか、伺ってみましょうか？」
「そうされたほうがええと思いますよ」
そんな遣り取りがあって、秋月筑前守は式次第の万端を取り仕切っていた、老中青山下野守にいった。
「冷泉前大納言殿が、〝津軽越中守はなにゆえ轅に乗るや〟と、おっしゃられてました。乗れないものは乗れないのだから、確かめたほうがいいのではないかとも」
青山はキッと眉を吊り上げた。
「越中守が轅に？　真でござるか？」

青山は知らなかった。
「真もなにも、それがしもたしかにこの目で見ております」
「どのようなことなのか確かめてみましょう」
といったものの、青山にはすぐにピンときた。
田安中納言か、水野出羽守がお墨付を与えてのことに違いないと。でなければ、轅を乗りまわすなどという大胆不敵な振舞いにおよぶはずがない。
田安中納言の家老を呼び寄せて確かめた。家老はいったん屋敷に戻り、調べてきて答える。
「そのようなお墨付、与えておりません。相談もされておりません」
だったら出羽守だ。
青山は出羽守の先任である。老中の首座でもある。にもかかわらず、ふつうは老中首座が兼ねる勝手掛老中の座を出羽守に譲らされたり、出羽守が勝手掛老中としておこなった貨幣の改鋳を家斉が高く評価し、その分、割りを食ったりで、出羽守にいい感情を持っていなかった。出羽守をとっちめる、これはいい機会だと思った。
御用部屋でおもむろに切りだした。
「御大礼の折り、津軽越中守が轅を乗りまわしたということですが、どなたかがお墨付をお与えになってのことですか？」

「いいえ」

老中は、出羽守の他に三人いて、三人ともに首を振る。出羽守もだ。

青山は出羽守のことを、やたら賄賂を取り込む締まりのない男とも見ている。否定はしたが、臭いと睨んでいる。

「ならば、越中守の家来を呼んで確かめますが、どなたも異存はございませんな？」

「異存などあるわけがございませぬ。どうぞご存分に」

出羽守もその他の三人も口を揃える。

「ではそうさせていただきます」

出羽守は、津軽越中守が轅に乗ったことをすでに知っていた。

出羽守は、何事も事勿れがいい、重箱の隅をほじくるようなことはしないほうがいいと思っている。そんな性質で、事件が上がってきても握り潰すことが多かった。今度の件も知らぬ顔をしていたかったし、少なくとも自分の口からあれこれいい立てるつもりはなかった。

さりとて青山下野守が事件にするというのを、するなともいえない。反対はしなかった。

青山は、越中守の御城使（留守居）河合作左衛門を呼んでいった。

「越中殿は轅を用いたということだが、何方へ伺ってのことか。至急、取り調べて申し

述べるよう」

河合作左衛門はてっきり伺ったうえでのことと思っていた。越中守信順もだ。だから当日、越中守も家来も堂々と振る舞ったのだ。ではなかったというのが分かって、津軽家の上屋敷は上を下への大騒ぎになった。

調べてまわると、大殿右京大夫が独断で指示を下したというのが分かった。

どうすればいいのか？

右京大夫は笠原八郎兵衛を九段坂上の田安邸に走らせた。八郎兵衛は家老に、揉み消していただきたいとたのんだ。

追って返事をしますとのことで、返事はこうだった。

「老職（老中）青山下野守が力んで事は運ばれおります。轅に乗る前ならともかく、乗ってしまったあとではどうにもなりません」

仕方がない。笠原八郎兵衛は河合作左衛門に同行して青山の屋敷に赴き、こう弁解した。

「隠居右京大夫は追々昇進つかまつり、近衛家より轅を譲っていただきました。ですが、束帯での登城ということがなく、一度も用いませんでした。当越中は二年前跡目を継ぎ、四品と結構仰せつけられ、控えの間も大広間とされ、このたびはじめて束帯での登城ということになったのですが、四品で大広間席であれば轅を用いていいのだと思っていた

のでございます。それゆえ何方様へも伺っておりません」

当然乗れると思っていた、錯誤があったのだといって、切り抜けようとした。

「何方かへ、問い合わせぐらいはしてもよかったのではないか？」

青山がいう。

「先席（柳之間）より当席（大広間）に昇進し、初めての狩衣を着用した節も、御届御伺等はいたしておりません。轅を用いるについても同様だと思ったのです」

「このことで、過去、何方かへ伺ったことは？」

青山は、内閣秘書官団とでもいうべき役職の奥祐筆に調べさせている。

「はあ、それが……」

と笠原八郎兵衛は口ごもる。

「どうなのだ？」

青山はお裁き好きの大名で、口調はきびしい。

「文化八年。右京大夫が当代だったころ、松平伊豆守様へ御内意をお伺いしたことがございます」

「挨拶（回答）は？」

笠原八郎兵衛は冷や汗を流しながら、

「相成り難き事、でした」

「越中殿は轅に乗れないと分かっていてのことではないか。どういうことだ！」

青山はかさにかかる。

「恐れ入り奉りましてございます」

笠原八郎兵衛は額を畳にこすりつける。

「不届きにも程がある。追って何分の御沙汰があろう。謹慎して御沙汰を待つようにと、越中殿に申し伝えよ」

笠原八郎兵衛はその足でまた、田安邸に走り、家老にたのんだ。

「さような次第でございます。なにぶん、お科のなきよう、お口添えを」

追っての、中納言自身からの返事はこうだった。

「恥ずかしくって口なぎけぬ。全体、なにを血迷って、轅に乗るなどという馬鹿な真似をした。なんだったら離縁して娘を引き取ってもいいのだ」

とりつく島もなく、やがて処分が下った。

「先達て越中守（が轅を使用していいかどうかの）内意相尋ね候節、轅用い候儀、相成り難き旨相達し置き候ところ、その心づきもこれなく、このたび相用い候段、（将軍家斉が）不束の儀に思し召され、これによって逼塞仰せつけられる」

逼塞は武家に対しておこなわれる閨刑で、家中一同も門戸を閉じて謹慎しなければならない。謹慎はまた別途百日とされた。

平日、供連れに目を光らせなければならない御徒目付に御小人目付も不束とされ、当日出役の者は押込。出役しなかった者も御目見差扣（さしひかえ）。掛りの大目付御目付も御目見差扣という、とばっちりをこうむった。

五

御目付らの処分はともかく、津軽越中守信順の処分には江戸の町中が沸き返った。百二十数年前、赤穂の浪士が本所松坂町の吉良上野介の屋敷に討ち入りしたときも、江戸の人たちは沸き返ったが、それに負けず劣らずだった。

落書、落首の類いももちろん乱れ飛んだ。

悪い名を世にあげごしの津軽どの
　見栄は一日恥は百日
ふんどしに縁あればこそ越中の
　おしりに門を閉めた評判
無分別乗せてしくじる玉の輿
　いまはお慈悲にすがる越中

こんなのもある。

婿殿という人は
一ニ　田安を鼻にかけ
二ニ　にこにこ乗りだし
三ニ　さんざん叱られて
四ツ　四屋敷門閉めて
五ツ　いつもの権門へ
六ツ　むしょうに遣いかけ
七ツ　何事ないように
八ツ　屋敷の騒動と
九ツ　輿にも乗り仕舞う
十ヲ　でどうやらお国がえ

弘前舞を見さいナア、、ー

いま一つ紹介しておこう。

「大津軽業（おおつがるわざ）

大夫　弘前右京
馬鹿大夫　同越中

口上

先年父右京、羽州ニおいて大作のため二大評判二預かりました侭馬鹿大夫越中、去年中御当地へ罷り登り、此度当所ニおいてご覧に入れまする芸等、四ほん竹のちょう〳〵へのぼりつめまして、装束をあらためまする。これを名付けて侍従の姿。末に至りますれバ、長柄のこしに乗り移り、橋の上より割下水通り屋敷廻り、乗りまわります。此の義は離れ業に御座り升スれバ、首尾能くまいれバおなぐさミ、万一仕損ジまして閉門の節は幾重ニも御用捨の程を願い上げ奉り升ス、また末に至りますれバ、大道具大仕懸ケにて十万石をひっくり返し、四万八千石（実は四万六千石）と替わりまする、夫より八方外ケ浜（津軽半島周囲の海浜）のけしき、三方替えに至し御覧に入れ奉り升ス、其のため口上、はじ書きさよう。

南部よろしく御ひょうばん、希い上げたてまつります。」

このころは御家御取潰しという処分がなくなり、重い処分としては、代わりにお国替えがなされるようになっていた。さかんにお国替えも噂された。

この落書には締めくくりに〝南部〟とある。出だしに〝大作〟とある。江戸っ子が沸き返ってやんやと拍手喝采し、落首落書を雨霰と見舞ったのには、その、〝南部〟と〝大作〟の二つが大いに関係している。

六

陸奥盛岡南部家の祖三郎光行は新羅三郎義光の裔。甲斐の国巨摩郡南部郷にいたので、南部を名乗る。源頼朝の陸奥伊達泰衡征伐発向に随行して戦功あり。九戸、閉伊、鹿角、津軽、糠部の五郡を領す。

『寛政重修諸家譜』にそうある。名門である。

三郎光行から数えて二十六代目の大膳大夫信直のとき、弟政信を津軽の城代とし、家来の大浦右京為信をこれにつけた。

この大浦為信、のちに津軽右京大夫と名乗りをあらためる津軽家を興した初代が、城代政信の死に乗じて津軽に割拠した。南部信直は叛臣大浦為信を討とうとした。そこへ、おなじく家臣の九戸左近将監政実が大浦為信に党して背く。そこでまず九戸政実を討とうとし、てこずっている間に、大浦為信は津軽一円を切り取ってしまった。

とこうするうち、天正十八年（一五九〇）の小田原の役となり、豊臣秀吉は北条氏政父子征伐のため沼津に陣を布いた。そこへ大浦為信は抜かりなく長駆して本領を安堵してもらい、朱印状ももらった。なおこの大浦為信は時の関白近衛前久の猶子になったと伝えられており、『諸家譜』でも津軽家を藤原氏頼通流に納めている。

南部信直も遅れて小田原に馳せつけ、叛臣大浦為信と九戸政実の誅伐を秀吉に訴えた。これに秀吉は、前田利家をしてこういわせた。

「津軽右京はみずから旧家であるといい立てて幕下に罷り越し、すでに本領安堵の朱印を授けている。いまさらどうにもならぬ。ただし九戸政実は、小田原を平均したあと、これを討とう。貴下はすみやかに帰国して叛徒を押さゆべし」

そんなわけで、津軽為信はまんまと津軽一円奪取に成功した。南部にとっては屈辱的な出来事で、この痛恨怨恨忿怨が江戸の下期になるこの時期にも、まだぶすぶすくすぶっていた。

文化五年、右京大夫は高を十万石に直され、四品に上げられた。

その日同時に、南部大膳大夫利敬も十万石から二十万石に高直しされ、四品から侍従に上げられた。

名目はともに、東西蝦夷地一円警固に勤労を尽くしたからというもので、もともと南部大膳大夫が、二十万石に高直ししていただきたい、侍従に上げていただきたいと願ったから、幕府はこれを聞き届け、同時に右京大夫をも十万石に高を直し、四品に上げた。

だがそれが、南部大膳大夫や家中の者にとっては面白くない。我が土地を奪い取り、戦国の世のどさくさ紛れに大名に成り上がった盗っ人同然の仇敵の裔なのに、こともあろうに、同時に十万石にまで高が直り、なおかつ四品に叙された。

いまいましい！　と思うと、憤怒がほとばしり、落ち着かぬことおびただしい。

かてて加えて右京大夫は俗臭ぷんぷん野心たっぷりで、金品をばらまいて権門に取り入り、なにかと家格を上げにかかる。

まず倅信順に、京の近衛家から姫を迎えようとする。話はまとまったものの姫は幼くして亡くなる。ほっとしたのも束の間、今度は田安中納言の娘を迎えようと奔走する。そしてまんまと縁談成立にこぎつけ、相手は死んだというのに、妹を迎えてしまう。

津軽では文化六年、十万石に再高直しされた翌年、四千石の黒石津軽家（旗本）に六千石を足し、黒石津軽家を一万石の大名にした。

南部の分家は二万石の八戸南部家だけである。分家の数でも並ばれてしまった。そこで対抗して、対抗するというのも南部にとってはしゃくのタネだったが、文政二年に、五千石の南部主税（旗本）に六千石を分地して一万一千石とし、大名とした。分家の数では差をつけることができた。

ところが翌年文政三年の春、「十二月に、右京大夫は侍従に昇進する」という噂が流れた。

実現すると、謀反人同然の家来筋に、官位でも控え席でも並ばれてしまう。南部大膳大夫にとっても、家中の者にとっても、これほど腹立たしい、腸の煮え繰り返る話はない。

運の悪いことに、大膳大夫はその年六月に病を得て卒し、十二月に、噂どおり、右京大夫は侍従になった。

大膳大夫の跡は、嫡子吉次郎がめでたく継いだが、十五と幼く、かねて大膳大夫が「請い置きしにより」という理由で、封地には、分家の八戸二万石南部播磨守信隣が赴くことになった。

それはいいのだが、吉次郎は無位無官である。右京大夫はというと従四位下侍従で大広間席。格段の差に南部の家中は上下ともに憤懣やるかたない状況におかれた。嘘か真か、大膳大夫は死ぬ間際、津軽（右京大夫）に仇なす忠臣は一人もいないのかといって息を引き取った、という話も領内に流れた。

そこで登場するのが相馬大作こと下斗米秀之進である。

下斗米家の遠祖は平将門で、将門の流れを汲む相馬小四郎胤成が南部氏に仕え、二戸郡下斗米村に百石の禄を食み、以来、下斗米を姓としたといわれている。

この文政三年のころ、父の下斗米総兵衛は隠居していて、家督は兄の下斗米平九郎が継いでいた。秀之進（以下相馬大作とする）は次男で、学問も相応に学び、武芸も身につけ、江戸へ出て武者修業に励み、戻って兵聖閣という、学塾を兼ねた道場を開いていた。

この、熱血漢でもあった相馬大作が、右京大夫の御暇の帰りを待ち受けて退隠をすす

め、聞き入れなければ山間に隠しおいた竹鉄砲で、同志に、自身もろとも砲撃させ、右京大夫を木っ端微塵に粉砕しようという計画を立てた。

計画は綿密に練られ、いよいよ実行の運びとなったのだが、事情があって下斗米家の屋敷内に住んでいた仙台領の刀鍛冶二人――これを相馬大作は計画の使い走りに使っていた――の中間が、ひそかに津軽に走って注進におよび、密計は洩れた。

津軽家は南部家とそんな関係になっているから、参勤交代には南部領を通らず、山形、久保田（秋田）とぐるりと迂回し、大館から矢立峠を越えて弘前に入る。

待ち伏せするのは、その矢立峠に至るまでの山また山の狭隘地である。密計は旅中の右京大夫に伝えられ、右京大夫は急遽道順を替え、海岸沿いを鰺ヶ沢、高杉とまわる、通称大間越えをとって弘前に帰り、事なきを得た。

相馬大作は矢立峠の手前、橋桁で陣を張った。文政四年四月二十三日のことだが、待てどくらせど、右京大夫の行列はやってこない。密計は洩れたと思わざるをえない。撤収した。失敗した相馬大作は、南部家に嫌疑がかかるのを避けるため江戸に出た。

右京大夫は、重臣笠原八郎兵衛に報復せよと命じた。注進してきた刀鍛冶の中間二人は領外にいる。二人を根気よく捜し当て、領内に連れてきて調書をとり、動かぬ証拠として幕閣に提出した。

幕閣は町奉行に相馬大作の召捕りを命じた。相馬大作は町奉行所の手にかかって獄に

繋がれた。同年十月二十一日のことである。

さらにその翌年、文政五年の八月二十九日に、相馬大作は獄門に処された。右京大夫は見事報復した、はずなのだが、そうではなかった。事は裏目に出た。

判決文（「浪人相馬大作御仕置申渡し」）にそれは明らかである。

「其方儀」

と形どおりいって判決文はまずこういう。

「津軽越中守家筋の儀は、古来南部家家臣の筋目ニてこれ有るところ」

津軽にとってはこれをいわれるのが一番辛い。南部にとっては胸がすく。いい伝えではこのとき相馬大作は、「そこのところを、いま一度お読み願う」といったそうである。

「当越中守（右京大夫）代ニ至り、家格は勿論官位とも結構ニ相成り、なお此の上累進もこれ有るべきの趣、故南部大膳大夫承り及び」

右京大夫がこのうえ、侍従になるかもしれないと、故人の南部大膳大夫が聞きおよんだ。

判決文はこう前置きして、大作の動機に移る。

「（南部大膳大夫は）越中守儀南部家同格に相成るべくと、右の儀を残念ニ存じ居り候や、気鬱の上発病死去致し候由（相馬大作が）承り及び、殊ニ当大膳大夫無官ニこれ有り候ニ付き、越中守より遥かに末座ニ相成り候間、旁もって心外ニ存じ」

次は行動だ。

「其方仕官の身分ニはこれ無く候へども、父祖の為ニは累代の主人ニ付き、鬱憤晴らすべしと、関良助（同志）他二人へも申し勧め、越中守帰城の道筋待受け、右遺恨を申述べ、同人屈服の上、隠居致し候ハゞ格別、左もこれ無きにおいては鉄砲を伏せ置き打留め候積もり、其方一己の存念より右企致し、羽州秋田領白沢宿まで罷り越し候ところ、越中守其道を替え帰城致し候ゆえ、本意を遂げず候」

判決文は、いいとも、悪いとも、解釈をくわえていない。むしろ文意では、本意を遂げることができなかったのを残念がっているようで、「本意を遂げず候へども」と突然反意の接続詞を入れてこう結ぶ。

「右企の趣露顕致すべしと、妻子その他召連れ出奔致し候始末、公儀を恐れざる仕方、不届き至極ニ付き、獄門申し付けル」

調べは北町奉行榊原主計頭の直吟味で、指揮は、お裁き好きの、またなにかと水野出羽守に対抗した青山下野守がとった。判決文にも「青山下野守殿御差図」とある。

青山は、津軽右京大夫を出羽守の腰巾着と思っている。そんな反感が、青山を大作贔屓にさせたということもあった。

だがなにより、右京大夫のかねての派手好みと成り上がりぶりが、江戸の朝野の反発を招いていた。

そこへ、南部の相馬大作なる一介の浪人が、主家のために悪（右京大夫）を懲らしに立ち上がった。失敗はしたが胸のすく話で、よくぞやったという思いが、榊原主計頭や、配下の吟味方の役人を、大作贔屓にさせたということもあった。

それで、獄門という重々しい判決なのに、論旨は一方的に大作の肩を持つように出来上がった。

右京大夫の狙いは、大作を罪に陥れることによって、背後の南部家に累を及ぼすことにあった。結果は、大作と同志を獄門に送っただけに終った。

江戸の町民に、右京大夫の狙いなど詳しいことは分からない。だがなんとなく忠義の臣相馬大作が立役で、敵役の憎っくき右京大夫が手をまわし、立役大作を獄門に送ったらしいということは分かる。右京大夫に反感を持っていた。そこへ、伜馬鹿大夫が大失態を演じてくれたものだから、沸き返って、やんやの拍手喝采を送った。

七

「恐れながら」

寝所でまどろんでいる明け方というのに、小姓が声をかける。

「何事だ？」

右京大夫は身体を起こした。

「新造の門の扉に落書が」

「なぜそのようなことでいちいち起こす」

「それが、扉一杯に墨黒々と一物が描かれているのです」

「真か？」

「はい。それに素木造りの出格子にも墨がべたべた塗りたくってあります」

「屋敷中の者を叩き起こしてすぐに消せ」

「承知いたしました」

その朝右京大夫の隠居屋敷では、屋敷中の者が総動員で落書の墨を落としにかかった。しかし消したはいいが、乾くと墨の跡がくっきり浮かび上がって、消せども消せども、乾くと一物は姿をあらわした。

質の悪い悪戯はこれに止まらなかった。

二ツ目の上屋敷の表門は扉も柱も黒漆塗りである。その片方の扉に漆喰かなにかを使って、またまた巨大な一物が勢いよく放尿している様を描き、片方の扉には女文字できわどいことが書かれていた。

いずれも越中守信順が田安から嫁を迎えたのをあてつけた、品の悪い中傷だ。

またしばらくしてのある朝、大きな紙が張られていてこうあった。

「領分付き売居」

これらの悪戯は逼塞により、屋敷中の者は、出入りの自由がきかなかったところから、次から次へと起こされたのだが、おなじ本所の、柳島の下屋敷ではこんなこともあった。

昼間は出入りが不自由なので、下屋敷の者は夜こっそり潜を抜け、上屋敷へ出かけてあれこれ用を足していた。

ある夜、いつものように潜を抜けて上屋敷に向かうと、途中に巨大な落とし穴が仕掛けてあって、ドッスン！

「落ちたぞ、落ちたぞ、いい気味だ」

近くの竹藪で何人かが囃し立てた。

こんな話を拾い集めて松浦静山はこうも書き留めている。

「本所辺りの町人は殊の外其藩を憎むと。何の故なるにや」

処分は、さすがに田安中納言の娘婿であることが考慮されたのだろう。御国替に遭うことなく、柳原八名川通中屋敷を、「御用に付き、家作とも差上げらるべく候」という屋敷の召し上げだけですんだ。

替地は品川戸越中村に六千坪が与えられた。それはいいが、刑場で名高い鈴ヶ森の近くなものだから、屋敷の周囲には牛馬の死骸が捨てられ、腐臭が風に乗ってくる。また刑場の屍を食らい慣れた犬が、垣根を越えて屋敷に入ってくる。子供など、うかと建物

の外にだせない。とんでもない悪地だった。

「大きな声ではいえませんが、今度の屋敷替えは、江戸払いに遭ったようなものです」

津軽の士はそう嘆いた。

逼塞は百日が七十日に短縮され、越中守信順は人より遅れて七月一日に御暇をいい渡されることになった。

御暇は、大広間席（の者）は、前日上使があって申し渡される。今度の越中守に限っては、奉書召、一辺の紙切れでの御召だった。登城しても、御前に出る前に老中が御暇拝領物の申し渡しをし、御前へ出ても上意、言葉がなかった。すべて無城の大名とおなじ扱いだった。

越中守信順はすごすごと江戸をあとにしたのだが、この越中守信順がまた、父右京大夫に劣らぬ不出来な大名だった。

越中守の入部（お国入り）は今度が二度目である。二年前に初入部して、そのあとはじめて出府するとき、こんなことがあった。

越中守信順は夜更かしする悪癖があった。〝夜鷹殿様〟と異名を奉られてもいた。

江戸や国にいるときはそれでもいい。参勤交代の旅中だとそうはいかない。一日短くても七、八里、長ければ十里を越す旅をしなければならず、朝は夜が明けないうちに本陣を出立することもしばしばあった。

しかも、宿場宿場では、人馬の継ぎ立てをしなければならない。人足何人、馬何匹と前もって手配している。宿場から宿場へと、せかせかと急がなければならない。

なのに意に介せず、越中守信順は毎晩、本陣で夜更かしして、また夜遊びに興じた。何月何日に着きますと、幕府には日程も報じてある。川止めとかよんどころのない理由がなければ、日程をずらせない。予定どおり江戸に入らなければならない。ここら辺り幕府はとても口喧しかった。にもかかわらず夜更かしをやめない。

「夜更かしを止めていただきたい。朝早く起きて出立してください」

供家老の高倉相模は口を酸っぱくしてたのんだ。それでも聞き入れず、逆に叱りつけて目通りを禁じる始末。

思いあまって高倉相模は、福島の手前、桑折宿で、深更、自決した。

消ゆる灯の名残りや明けのほととぎす

が辞世の句である。

越中守信順はそこそこ学問はできたが、父のいいなりになって轅に乗り、馬鹿大夫と江戸の朝野の罵声と嘲笑を浴びるだけの素地はあった。

殿が殿なら家来も家来だった。その後、家中では派閥抗争が起こり、いざこざばかり起こしていた。一方、右京大夫の代に増やした借金は増えつづける。そこへ飢饉があって、餓死者は出る。逃散も出る。苦し紛れに銀札のような預かり手形を発行したのはいいが、財源の裏付けがないため、領内をいっそう混迷状態に陥れる。

津軽は北門の守りを固める要地である。放置しておけなくなって、幕府は天保十年（一八三九）、津軽家を減石のうえ、転封させようとした。

津軽家は舅の田安中納言斉匡に泣きついた。斉匡は話を取り持った。幕府は聞き入れたが、越中守信順の隠居を条件とした。越中守はやむなく隠居した。

あとには分家黒石津軽家の津軽左近将監順徳が入った。

左近将監順徳は養子、その昔「轅相用い候儀、相成り難き事」と回答した松平伊豆守の三男で、ここに右京大夫為信以来の津軽の血は絶えた。

色でしくじりゃ井上様よ

一

「一度、我が下屋敷に宴遊に参られよ」

奏者番内藤大和守頼以は同僚の井上河内守正甫に声をかけた。たまたま二人きりになっての、控えの席でのことである。

この年文化十三年（一八一六）、井上河内守は四十二歳。内藤大和守は四十一歳。歳も近く、ともに奏者番という役に就いている二人は、なんとなくうまの合う間柄だった。

「なにか面白い趣向でもござるのか？」

井上河内守は尋ねた。とくに深い意味があってのことではない。

「さよう。ご存じだと思うが、我が下屋敷はとても広い」

内藤姓の大名は越後村上、日向延岡などと六家あったが、内藤大和守の内藤家は信州高遠三万三千石の大名である。

名門ではない。槍一筋の家でもない。運よく大名に成り上がった徳川の譜代だ。

この百年ほど前に、絵島生島事件といわれている事件があった。七代将軍家継の実母月光院に仕えた老女絵島が、度を外した遊興を咎められて内藤家に預けられ、信州高遠に配流されたという、政治疑獄がらみの事件だ。生島というのは絵島の遊興の相手をつ

とめた役者だったが、当時の人には、〝絵島生島事件の絵島が配流された高遠の内藤家〟として知られている程度にすぎなかった。

浜松六万石の井上家も似たり寄ったり。おなじく徳川の譜代で、おなじく運よく大名に成り上がったという家だ。だから互いに、肩肘を張らなくてすんだということも、二人のうまがあった理由の一つでもあった。

そんな程度の家なのに、内藤大和守の内藤家は、下屋敷がとてつもなく広かった。

こんな話がある。

徳川家康は天正十八年（一五九〇）に関東に入国した。家康は、扈従してきた内藤清成（内藤家の二代目）にいった。

「お前の馬が一息に駆けまわっただけの土地を与えよう」

清成は愛馬の白馬に跨がり、大きな榎の木を中心に、愛馬の息の続くかぎり駆けまわった。家康は約束どおり白馬が駆けまわった土地を与えた……。

後代の作り話らしいが、こんな話が作られてもおかしくないほど下屋敷は敷地が広かった。裏返していうと、たかが三万三千石の大名なのに、なぜあんな大きな下屋敷を持っているのだと不審がられるほど広かった。

江戸の四宿というと、千住、板橋、新宿、品川だ。新宿はその名のとおり新しくできた宿場である。元禄時代に、内藤家の下屋敷の一部を六万九千六百坪、九千六百六十坪

と二度にわたって上地してもうけられた。それで、内藤の名を冠して内藤新宿ともいわれていた。

四谷新宿馬糞の中で
　あやめ咲くとはしおらしい

という俗謡の類いがある。

あやめとは遊女ならぬ〝飯盛女〟のこと。

幕府の決まりで遊女こそおけなかったものの、馬糞臭い宿場町、新宿の旅籠屋が、吉原の遊女に劣らぬ美女（飯盛女）を大勢揃えて、江戸時代も中期以降はたいそう賑わったのだが、新しい宿場（新宿）用におよそ八万坪を上地してもなお、内藤家の下屋敷には八万坪の敷地が残っていた（新宿御苑の一部を含む内藤町がその跡地である）。

「それゆえ我が下屋敷にはさまざまの小鳥が群れ飛んでいる」

内藤大和守は続ける。

江戸時代は、いま以上に小鳥や金魚などの愛玩動物を飼育して楽しむ趣味が行き渡っていた。たとえばこのころの十一代将軍家斉も、長じて女に興味を持つ前、幼年期から少年期にかけては、ことのほか小鳥や金魚を愛玩し、みずから飼育していた。

「宴遊のあとに、小鳥狩という趣向もよろしかろう」

「小鳥狩？」

井上河内守は首をひねってすぐに、

「なるほど」

と節をつけて唄った。

「時雨を急ぐ小鳥狩、時雨を急ぐ小鳥狩、深アき山路を尋ウねん、でござるな」

山野に紅葉を探ねて観賞するのを紅葉狩という。能にも『紅葉狩』と題する曲があり、井上河内守は、『紅葉狩』のでだしを替えて唄った。

「さよう」

「そういう趣向ならお招きに与ることにいたそう」

「馳走を用意して、お待ちしており申す」

二

秋も半ばの某日、井上河内守は、新宿大木戸の近くに入口がある内藤大和守の下屋敷を訪ねた。

内藤大和守は数奇を凝らした茶屋のような一室に宴席を用意していた。二人は一刻（二時間）ばかりも食べかつ飲んで談笑した。

「されば腹ごなしに」

内藤大和守は、榎や欅の大木が生い繁っている広大な庭に、井上河内守を誘った。

鵙、鵯、鶫、鶸、鵲、鶉、鴫、鴇、懸巣……。

似ているようでよく見ると微妙な違いのある秋の小鳥を、二人の主人とそれぞれの家来は、あちらこちらと追いかつ眺めてまわった。

気がつくと、井上河内守は一人になっていた。内藤大和守とも、家来とも離れ離れになった。

さわさわと枯れ葉を踏み締めて歩いているうち、一休みして煙草が吸いたくなった。火口箱など用意していない。見るとさほど遠くないところに一軒家がある。

大名の下屋敷には、広ければたいてい百姓が住み着いて田畑を耕していた。殿様に農事の骨折りを教えるためで、農家といって、それが内藤大和守の下屋敷には十四、五軒もあった。

一軒家が農家だというのは、井上河内守にも分かる。近づいて声をかけた。

「誰かおらぬか？」

「へえ」

女が出てきた。

「煙草の火を貸してもらいたい」

人品卑しからぬ男の頼みである。

「どうぞ、入ってお掛けくだせえ」

女は奥に消え、火桶に火を入れた煙草盆を持ってきた。

井上河内守は煙草を吹かしながらいった。

「できたら茶も所望したい」

殿様（内藤大和守）と関わりのあるお人だろう、くらいは女にも見当がつく。

「いますぐ」

茶を淹れて持ってくる。

「亭主は？」

女はその家の女房らしく、なにとはなしに聞いた。

「野良にでておりますだ」

「子供は？」

「まだでごぜえます」

そういって女は気恥ずかしそうに笑う。

あらためて見ると、若くてまあまあの器量である。野良にでているからだろう色は黒いが、胸は豊満だし、腰にもたっぷり肉がついている。はちきれんばかりである。

江戸の奥にも、国元の奥にも、この手の女はいない。ふだん相手にするのは、色白で柳腰の、触れなば折れんという風情の女だ。

目の前にいる女は、野趣に溢れている。閨の様子もふだん相手にする女と違って、激しく猛々しいのだろうか、などと連想を巡らせていて、なにげなく口が動いた。

「亭主は精を出してくれておるのか？」

「なににでござえます？」

女は怪訝に首を傾げる。

「決まっておるではないか。あれにだ」

「まあ」

と女は顔を赤らめてうつむく。拍子に胸元が覗いた。こんもり盛り上がった乳房の、ごく一部が垣間見えた。井上河内守はごくりと生唾を飲み、

「のう」

と草鞋を履いたまま、這いずるように女に近づき、手を握った。

「なにをなさいます」

女は目を剝き、手を払う。ほろ酔いの勢いも手伝って、河内守は押さえつけるようにのしかかり、息遣いも荒くいった。

「亭主の代わりに、それがしが精を出してやろう」

この時代、女は下着を着けていない。男は下帯（褌）を着けているが、一物も取り出すのはいたって簡便。野袴もはいてはいるが、たくしあげればこともない。

「お止めくださいませ」

抗う女の耳元に、「たっぷり褒美をつかわす」と甘言を囁き、なにより力ずくで押さえつけ、堅くなった一物を女の秘所に押し込んだ。

それで、出すものを出してすっきりし、なにごともなく立ち去ることができれば、小鳥狩ならぬ女房狩も乙なものだなどと嘯いて帰ることができたのだが、そうは問屋が卸さなかった。

事を終えようと励んでいるまさにそのとき、野良仕事を終えた亭主が肥えたごを担いで帰ってきて、土間に足を踏み入れた。

見ると、男が女房にのしかかって、せっせと腰を使っている。なにやら女房もそれに調子を合わせているかのようである。

亭主の驚くまいことか。

「おめえたち、なにをしてるだ！」

と叫ぶやいなや、肥えたごの天秤棒を手に打ちかかった。

河内守はびっくりして振り返ったが、体勢が悪い。逃げられずに背中にゴツン。

「この野郎、この野郎」

亭主は頭に血が上っている。むやみに打ちかかる。

ゴツンゴツンと打たれながら家の中を逃げまわっていたが、さすがに身の危険を感じ、

河内守は大刀の鞘を払った。
大名の腰の物だ。鈍刀ではない。防いだつもりがスパッと亭主の腕を切り落としてしまった。
「ぎゃあー」
亭主はもんどり打って、獣が悶え死ぬかのような叫び声を上げる。
河内守の姿を見失い、〝殿はいずこに？〟と四方八方に分かれて探しまわっていた何人かの家来が叫び声を聞き、〝なにごとならん？〟と駆けつけた。
河内守は血刀をぶら下げて呆然と突っ立っている。その足元に、腕を落とされた男がのたうちまわっている。部屋の隅には女が肩をすぼめてうつむいている。
事態はおよそ想像がつく。
一人が亭主の血止めにかかる。いま一人が刀の血を拭き取り、鞘におさめる。
心利いたる家来がいう。
「このこと、外聞を憚る」
大名が百姓の女房に〝押して不義（強姦）〟におよび、目撃した亭主と争って腕を切り落としたなど、醜聞も醜聞、大醜聞である。世間に知れ渡ると、嘲笑を浴びるだけでない。痩せ地への国替え、もしくは減封などの重い処分が下される。
「断じて洩らさぬよう」

朋輩はうなずく。
「口がうるさくて軽い、六尺（駕籠舁き）、手廻り（草履取り、挟み箱持ち）などにも悟られることのないように。よろしいな」
朋輩はふたたびうなずく。
「亭主と女房のことは、それがしが後に残って始末をいたす。おのおの方は一刻も早く殿を屋敷へ」
朋輩は河内守の手を引き、内藤大和守への挨拶もそこそこに駕籠に乗せ、屋敷に戻った。
心利いたる家来は亭主と内済の折衝をはじめた。
女房は、河内守に不義に及ばれたとき、腰使いが微妙だった。亭主はそれを咎める。女房は、腕ずくのことでどうしようもなかったのだと開き直る。夫婦はそっぽを向き合った。
心利いたる家来はそこにつけいった。夫婦と別々に交渉をはじめた。
女房には、過分の金を摑ませて里に帰した。
亭主には、言葉巧みに持ちかけた。
「浜松へ移られるといい。食禄は存分に与え申す。女も器量よしを世話いたそう。お望みとあらば二人くらいも」

毎日肥えたごを担ぎ、朝から晩まで野良仕事をしている身には、考えられない境遇だ。

「嘘じゃねえべな？」

「本当だ。誓書を渡してもいい」

「じゃあ、世話になるべか」

心利いたる家来は夫婦とこんな風に話をつけた。

現場を目撃した家来には箝口令を布いた。それでも洩れる虞がある。用心するにこしたことはない。心利いたる家来は、ほとぼりを冷ますように、病と称させて河内守に出仕を控えさせた。

三

井上河内守は奏者番である。

奏者、もしくは奏者番という役は、譜代大名にとっては登竜門とでもいうべき役だ。員数は二十から三十人。年頭、五節句、月次など、大名や旗本が登城して将軍に謁見するとき、名を告げて進物を披露し、将軍よりの下賜の品を伝達する。

なんでもない役のようだが、度忘れということもある。

あるとき、忘れるはずのない名が口に出てこず、往生した奏者番は、苦し紛れに、声高々と自分の名を呼んでごまかしたなどという話も伝えられている。

厄介なのは一月六日の、町役人や出家社人など拝謁する者が多人数にわたるときだ。

江戸城最大の謁見の間、大広間は、奇妙なことに凹字型になっていた。上段にいる将軍は、立ち上がっても謁見の間全体を見渡せない。同時に挨拶を受けることも、応えることもできない。

そこで将軍は、二之間、三之間、四之間、その外側の板縁と、ぐるりと一まわりして挨拶を受け、奏者番は、将軍の背後を中腰でついてまわりながら披露していく。

「上京中京下京大坂堺奈良伏見過書五カ所割符の者ども」

これをスラスラ口にするのはなかなかに難しい。そこで、細字でしたためた紙を掌に隠し持って盗み見したりしたのだが、

「播州書写山社僧総代」

などと早口言葉顔負けの名もあり、とちる者も少なくなかった。

他ならぬ井上河内守正甫の曾祖父にあたる井上河内守正之（のち正定）もその一人だ。

徳川家康から十代将軍家治にいたる間の編年体実録『徳川実紀』にこうある。

「さて河内守（正之）其次のとし正月六日、出家社人拝賀の時、播州書写山の社僧総代の名だいめん（代弁か）するとて、いひあやまちけるを、いささかおそるるけしきなく（八代将軍吉宗の）かほを仰ぎ、尊顔を見ながらあざ笑ひたり。その心ざし不敬なりと

て（正之が）御咎蒙りぬ」

しまったと、ニヤッと笑ったのだろうが、吉宗にはあざ笑ったように見えたのだろう。

この井上河内守正之という人は面白い人で、前段にはこんなことも書き連ねてある。

「しかるに忠相（大岡越前守）寺社の奉行命ぜられし時、はじめてその曹司（部屋）に入らんとせしに、同僚（寺社奉行）井上河内守正定（正之）、ここは奏番者の伺公する所なり、おことは寺社奉行をこそ命ぜられたれ、奏者のことはいまだ奉らざれば、いるべからずといなみしかば、忠相その日は、休息することを得ざりしが、後にこのことを（吉宗が）聞召され、奏者の曹司の隣に、別の寺社奉行の居所をくだし賜はりしとなり」

大岡越前守はこのとき六十歳の老人。井上河内守は四十一歳の壮年で、なかなかにくそ意地も悪かったようである。

それはともかく、三奉行の一つ、寺社奉行は奏者番が兼帯する役だった。大岡越前守のように奏者番でない者が寺社奉行に任ぜられる例は珍しく、それで大岡越前守は井上河内守にいじめられたのだが、譜代大名はまず奏者番になり、続いて寺社奉行を兼帯し、その後、大坂城代、京都所司代などを経て、老中に上るというのが出世のコースだった。

河内守正之は大岡越前守との一件があった翌年、播州書写山社僧総代をいいとちった年に病死する。寺社奉行から上へは上がれずじまいだったが、それでも井上家は河内守正甫までに三人も老中を出していた。

一人目は三代目の主計頭正就で、二代将軍秀忠のときに老中にすすんでいる。ちなみに正就は寛永五年（一六二八）五十二歳のとき城中で刺殺された。江戸城内での、これが最初の殿中刃傷事件である。

次が六代目の河内守正岑。

吉宗は、紀州徳川家から入って八代将軍になると、老中の能力を試すため、老中五人全員を呼んであれこれ質問した。土屋相模守政直だけは三問中二問を答えることができたが、他の老中はなにも答えられず、井上家六代目の河内守正岑は、年貢の収納高を聞かれて答えられなかった。

河内守正岑が死んだのは享保十二年（一七二七）、七十五歳のときで、こんな〝物揃え〟が残されている。

死んでも人の惜しまぬもの

鼠捕らぬ猫と井上河内守

三人目は、正甫の祖父の河内守正経。とくに逸話はないが、この人の代に常陸笠間（六万石）から磐城平（六万石）に、続いて遠州浜松（六万石）にと移封されている。

東海道筋は徳川家にとって守りの要である。また物成りもいい。東海道筋に移封されるということは、一種の〝栄転〟だった。

そして、十代目の河内守正甫も引き続き浜松にあり、最古参の奏者番として寺社奉行

兼帯を目前にしていた。そんな大事なときにしでかした不祥事だった。

この年は八月に閏月があって調節されていたのだが、それでも暦は大幅にずれていて、梅が花を咲かせようかというのに、暦はまだ十二月。出仕を控えて四カ月になろうとしていた。

十二月は、一、十五、二十八日が三日といって諸大名の総登城の日だった。明けて一月は、年頭の儀式が目白押しにある。少なくとも十二月の十五日には登城しておかなければ、一月年頭の儀式に登城しにくくなる。登城しなければその分、寺社奉行の座が遠ざかる。

「十五日にはなんとしてでも出仕したい」

河内守は心利いたる家来にいった。

臭いものに蓋ではないが始末はつけている。噂が立っている風でもない。

「では、さよう取り計らいましょう」

心利いたる家来はそういい、久方振りの登城準備にとりかかった。

十五日になった。

虎ノ御門内の河内守の上屋敷では、早朝から登城の支度にとりかかった。供揃えがととのった。河内守は駕籠に乗った。大勢の供廻りを従えて、河内守を乗せた駕籠はしずしずと屋敷をでた。

江戸城の本丸には、東の大手御門の橋と、南の内桜田御門の橋を渡って入る。

虎ノ御門の方角からは、外桜田御門から廓内に入り、西丸（現在の皇居）下を通って内桜田御門の橋を渡る。

内桜田御門の橋と大手御門の橋から先へは、並みの大名で、侍が四、五人、草履取りが一人、挟み箱持ちが一人、六尺が四人、雨天の日にかぎって長柄の傘持ちが一人、合計十二、三人しか入れない。

河内守を乗せた駕籠は内桜田御門の門前で一時休止し、侍五人、草履取り一人、挟み箱持ち一人と、供廻りを減らして橋に向かった。

そのとき、突然声がかかった。

「いよオ、密夫大名！」

携帯用の炬燵を抱えていた河内守は、びっくりして炬燵から手を離し、小窓をそっと開いた。

「待ってました、強淫（強姦）大名！」

開けた小窓に、水をぶっかけるようにまた声がかかった。続けて、堰を切ったように、

「間男大名のお通りだイ。頭が高い！」

「百姓女のお味はいかがでござる？」

「いや、結構なお味でござった」

「満腹、満腹」

などと罵声と嘲笑が浴びせかけられた。

そのものズバリ、

「お×××大名！」

などという下卑た罵声もあった。

河内守に罵詈雑言を浴びせかけたのは六尺手廻りである。

六尺手廻りのほとんどは江戸抱えといって、江戸の屋敷に短期で抱えられた者たちだ。なかには入込といって何カ所もの大名屋敷をかけもちしている者もいた。大名とは主従の関係にない。いわば自由の身で、誰憚ることなく罵詈雑言を浴びせかけ、河内守はほうほうの態で橋を渡った。

渡ったところは、鳥瞰すると矩形の島のようになっていて、大名や、駕籠に乗るのを許されている旗本は、そこ、下乗橋の前で駕籠を下りなければならない。

一口に三百諸侯という。正確には二百数十人だが、二百数十人が、隔年もしくは半年交代で江戸と国元を往復している。江戸にいる大名はしたがって百数十人。病気の者や、なかにはずる休みをする者もいるから、ふだんはおよそ百人が登城拝礼する。それゆえ、下乗橋の前一帯にも、六尺が総勢で四百人近く、挟み箱持ちも総勢で百近くが詰める。一難去ってまた一難。彼らがまた、

「密夫大名！」

「強淫大名！」

と罵声を浴びせかける。

駕籠が止まった。草履取りがやや離れた位置から、草履を投げる。駕籠脇で草履はばらりと開く。

供の侍が引戸を開ける。

河内守はでるのをためらった。

「殿！」

供の侍がうながす。

駕籠は次から次へと引きも切らずにやってくる。六尺は河内守を下ろして、次の駕籠に場所を譲らなければならない。

「殿！」

再度うながされて、河内守は駕籠を下り、身を白日の下にさらした。そこへまたまた、

「間男大名！」

「お×××大名！」

と憚ることのない罵声を浴びせかけられ、罵声を背に、河内守は身体を縮こまらせて下乗橋を渡った。

大名が百姓の女房に〝押して不義〟におよんだという、河内守の〝所業〟は、心利いたる家来が夫婦二人の口を封じ、目撃した家来に箝口令を布いていたにも拘わらず、どこからともなく六尺手廻りに洩れた。

六尺手廻りにとってこれほど興味を引く、前代未聞の、からかい甲斐のある話はない。彼らは河内守が登城してくるのを、いまや遅しと、手ぐすねを引いて待ち構えていた。そこへ、知らぬは河内守と側近ばかり、蝶が蜘蛛の巣にひっかかるようにやってきて、河内守はまんまと彼らの好餌にされてしまった。

六尺手廻りの罵詈雑言は、当然、諸家の供侍の耳に入る。

「なにごとか？」

と六尺手廻りに糺す。

「実はですねえ……」

待ってましたとばかりに六尺手廻りは教える。河内守の不首尾は、波紋が広がるようにまたたく間に広がった。

下馬先には、取り締まりのため町方から派遣されている同心のほか、御徒目付に御小人目付が目を光らせている。

河内守が六尺手廻りから罵詈雑言を浴びせかけられたという騒ぎは、すぐに御目付に報告され、御目付から老中に上げられた。

もとより一件は、とうに、大目付の耳にも、御目付の耳にも、老中の耳にも入っていた。

だが、金で話がついているのなら殊更詮索して、事を荒立てることもないというのがこの時代の為政者の一般常識で、老中は聞いて聞かない振りをしていた。しかし、河内守が六尺手廻りから公然と罵詈雑言を浴びせられ、嘲弄されたとあっては見て見ぬ振りもならない。

御目付からの報告が上がってきて、老中首座松平伊豆守は止むなく河内守を処分した。『徳川実紀』には、その年十二月二十三日のこととしてこうある。

「奏者井上河内守、尊慮にあらずとて、職とかれて雁間詰を命ぜられ、御前をとどめられる」

奏者番を辞めさせられるということは、老中への望みを断たれるということである。河内守は、世間の嘲笑を背に、ただの並び大名になってしまった。

四

奏者番の同僚に水野和泉守忠邦という男がいた。ともに四十代の井上河内守や内藤大和守と違って、このとき弱冠二十三歳。目から鼻に抜ける秀才だった。いや、だから前

年二十二歳の若さで、奏者番に任ぜられていた。

内藤大和守の内藤家は過去一人も老中を出していなかったが、水野和泉守の水野家は、井上河内守の井上家と同様老中二人をだしている。

〝青雲の志〟と水野和泉守忠邦は自らいっていた。老中になることをだ。十九歳で家督を継ぐと、すぐに老中になろうと志し、前年二十二歳で奏者番に任ぜられると一層その意を強くした。

水野家は、徳川家康の母、離縁されて実家に戻された於大の実家で、三万五千石の紀州の付家老水野家を含めると、この時期、いずれも同族の水野家の大名は五家あった。

五家の一、沼津水野家の当主水野出羽守忠成は、この時期側用人の任にあった。側用人は万石以上の大名が就く奥の役人の筆頭、将軍の側近中の側近という要職である。

水野和泉守は、親戚の側用人、水野出羽守忠成をたよった。

一時代前の実力者田沼主殿頭意次には、水野出羽守忠友という忠実な弟分がいた。

天明六年（一七八六）、田沼を寵愛した十代将軍家治の病が重くなったとき、田沼は名医と評判の町医を呼んで薬をすすめた。薬は苦いものだが、そのとき家治はあまりの苦さに、「毒薬ではないのか」と口走り、田沼への不信をあらわにした。

この時代、威勢を張る者はみな、将軍の威権を背景にしていた。将軍が不信をあらわにするということは、権力の座から滑り落ちるということでもある。弟分の出羽守忠友は、形勢が変わったと見てとり、突如田沼に叛旗をひるがえす。そして世間に向け、田沼と手が切れたこれが証拠とばかりに、婿養子に迎えていた田沼の四男坊（忠徳）を叩きだす。

水野出羽守忠成は旗本の岡野家から、旗本水野大和守家に養子に入っていて、西丸御小姓の任にあった。十代将軍家治に子はなく、家斉が御三卿一橋家から将軍家に養子に入って、西丸にいた。大和守（出羽守忠成）はその家斉の御小姓を務めていた。御小姓といっても従五位下で大和守を名乗っている。二十五歳のりっぱな大人である。

十代将軍家治はその後すぐ死に、十六歳の家斉が十一代将軍になった。

田沼を裏切った水野出羽守忠友は、婿養子（田沼の伜忠徳）を追い出すと、新将軍家斉に取り入るため、親戚でもある西丸御小姓水野大和守に「婿養子になってもらえないか」ともちかけた。水野大和守は首を縦に振った。出羽守忠友は、もはや古女房といっていい、田沼の四男坊の女房だった娘の婿に、大和守を迎えた。大和守は古女房の婿におさまった。

出羽守忠友にしろ、婿養子の大和守（のちに出羽守）忠成にしろ、それぞれ処世はすさまじいのだが、側用人水野出羽守忠成は、田沼主殿頭意次や養父水野出羽守忠友の気分、とりわけ賄賂をいただくことに鷹揚な気分を継承していた。

徳川幕府の政治機構は構造的に賄賂をはびこらせやすい仕組になっていた。

たとえば、老中若年寄は朝の登城前に、公式に客を迎えていいとされている日が定められていた。開門して客をおおっぴらに迎えていいとされている「御対客日」が月に二日、開門しないで簡略に迎えていいとされている「御逢日」が月に五日。その月に七日は、朝まだきから門前に客が殺到し、なにやかやと陳情した。

当然手ぶらでは行けない。国産などの珍しい手土産はもとより、そのものずばり黄白（金銀）も携えて行った。これが老中若年寄の半ば公然たる副収入になった。「金銀財宝回り取り」といって、老中になるには賄賂をたっぷり使わされたが、いったん老中になると、お釣りがくるほど賄賂を取り込んだ。

側用人とて例外ではない。公式被訪問日などという日こそないが、頼まれ事が多く、出羽守忠成はそのつど賄賂を受け取った。

その出羽守を頼るということは、とりもなおさず賄賂に金をかけさせられるということである。

〝青雲の志〟に燃えている水野和泉守は、財布の底をはたくように、珍しい国産品や黄白を持参して、

「なにとぞ寺社奉行に」

と懇願した。だが、

「決まりが決まりだからのう」

難しいと出羽守はいう。

水野和泉守は肥前唐津の領主で、唐津の領主は、肥前佐賀鍋島家や筑前福岡黒田家などとともに、長崎奉行を補佐して西国を警護するという任務を負わされていた。したがって参勤交代して隔年には帰邑しなければならず、奏者番以上の幕府の役職には就けないことになっていた。

「それは承知しております。ですから、その前に国替えを」

とも和泉守は出羽守に願った。

「国替えとなると誰かを動かさねばならない。動かすには動かすなりの理由、不始末をしでかしたなどの理由がなければならない」

江戸時代もこのころは大名の御家断絶改易ということはまったくといっていいほどなくなり、不始末をしでかせば、罰として国替えとか減封が命ぜられた。

「また領民どもなにかとうるさい」

国替えされてでて行く大名は、領民から借りた金を踏み倒す。入ってくる大名はあらたな収奪をはじめる。それやこれやで国替えは領民にとっては碌なことにはならず、国替えというと、真っ先に反対した。昔のように幕府の鶴の一声でというのは難しく、それなりに幕府も気を遣わされていた。

「されど、御役に就いて幾重にも働いてみたいという初志の念はもだしがたく、唐津にいたままではそれが叶いませぬ」

水野和泉守がずっとそんな嘆願を繰り返していたところへ、有力な競争相手である井上河内守が、自ら蹴つまずくように不祥事を起こし、有り難いことに、六尺手廻りが下馬先で騒ぎ立て、不祥事は誰知らぬ者ない事実となった。老中首座兼勝手掛老中、いわば総理の松平伊豆守も看過できず、奏者番罷免、御前差扣という処分を下した。

不祥事は国替えの立派な理由になる。和泉守は小躍りして、

「なにとぞ河内守を国替えされて、それがしを浜松に」

とまたまた出羽守に働きかけた。だが、

「たしかに河内守の不祥事は国替えに値する不祥事である。だが、なにぶん伊豆守殿が……」

と出羽守はしぶった。

五

家斉は将軍になるとすぐ、実父である一橋治済を大御所として迎えたいと、田沼後の政権を担当した、老中首座兼勝手掛老中で将軍補佐の松平越中守定信に懇願した。念願の打倒田沼を果たし、賄賂政治の撲滅を標榜した定信は、観念的教条的な政治家である。前例がないといって手厳しく撥ねつけた。

その後定信は失脚同然に退隠し、定信の政治上の仲間である松平伊豆守信明らが政治を担った。そして十年余を経た享和三年（一八〇三）、家斉は伊豆守信明に、例の一件を蒸し返した。

伊豆守信明は越中守定信のように観念的教条的なところはなかった。独断専行することもなく、人ともよく和した。だが鼻柱は強い。たとえば、家斉の実父一橋治済に関してもこんなことがあった。

式日や三日の登城のとき、小石川に屋敷を持つ水戸の中納言治休は一橋御門を抜けて廓内に入る。抜けるとそこは一橋家の門前。治済もほぼおなじころ屋敷をでる。行列は互いに鉢合わせして角突き合わせる。

勢いは水戸の方にある。一橋側はいつも押されがちになる。それが治済には我慢ならない。殿中で伊豆守に面会を求めていった。

「水戸殿は中納言である」

尾張と紀伊は大納言が極官で水戸は中納言が極官と、水戸は官位が一格低くしてあった。

「それがしは大納言」

治済はこのとき、伜（将軍家斉）の力で大納言にまで上っていた。御三卿の隠居としては異例の官位といっていい。

「官位はそれがしのほうが高い。にも関わらず、水戸殿は登城の節、門前で我らを踏みつけるように押して行かれる。お諭しいただきたい」

伊豆守は歯に衣を着せず、即座にこう返答した。

「官位の高低を申すは京のこと。関東にては官位などより御役目を重んじます。水戸様は天下の副将軍。御自分様は御部屋住み。ご遠慮あって然るべし」

このとき西丸には将軍世子の家慶（家斉の嫡男）が入っていた。一橋治済を大御所として御城に迎えるとすれば二之丸しかない。家斉は伊豆守を呼んで、大御所として迎えたいとはいわず、婉曲にいった。

「大納言（一橋治済）様を二之丸にお迎えしたい」

伊豆守も越中守定信と同様、にべもなく答えた。

「なりません」

とりつく島がない。御用御側の平岡美濃守が助け船を出した。

「そこをなんとか」

伊豆守は平岡を睨みつけて、

「一橋様は恐れ多くも大納言にまで昇進されておられます。それで十分でございます」

家斉はさっと顔色を変え、無言で座を立とうとした。

同席していた、いま一人の御側高井飛騨守が袴を押さえた。

「なにをいたす」

家斉は気色ばんだ。

「伊豆守にご挨拶を」

老職へ挨拶を欠かして座を立つのは穏やかでない。

家斉も気を取り直していった。

「そんならもうよいわ」

それが直接のきっかけだった。

上（家斉）のご機嫌、いたって穏やかならずと耳にして、伊豆守は辞職を願い出た。

家斉は聞き届け、「七日のうちに居屋敷を引き払え」と達した。

老中は御城の近辺に屋敷を与えられるのが慣例で、伊豆守は西丸下に屋敷を与えられていた。伊豆守は石を以て追われるように幕閣を追われた。

だがその後、南下して通商をもとめてくるロシアとの外交問題が緊張した。それに関連して松前家から東蝦夷地を取り上げての東蝦夷地経営、西蝦夷地も同様に取り上げての蝦夷地全体の経営などの難問が横たわっていた。

老中も世代交代がはじまって人材不足という事態にも直面した。

家斉にも当然、六十余州を知ろしめしているという責任感のようなものがある。叩き出した者を呼び戻すのは気がひけたが、伊豆守くらいしか人材が見当たらなかった。仕方なく、御暇で三州吉良に帰邑していた伊豆守を呼び戻して老中に再命した。伊豆守は老中首座兼勝手掛老中に返り咲いた。

それが十年前の文化三年のことで、そんな経緯もあり、家斉は政治に嘴を入れるのを控えた。伊豆守は我が道を行くで、誰に遠慮もなく、松平越中守定信の政治――、倹約、倹約で遣り繰りする政治をおこなっていた。

側用人水野出羽守忠成は、そのような老中首座松平伊豆守信明とは、政治姿勢も、人脈も、正反対の立場に身をおいていた。松平伊豆守が行く手に大きく立ちはだかっているかぎり、同姓同族の水野和泉守から「寺社奉行に」「国替えを」と懇願されても、手のほどこしようがなかった。

六

寛政の遺老などといわれていたが、伊豆守は宝暦十年（一七六〇）の生まれ。文化十四年（一八一七）のこの年で五十八歳。老齢ではなかった。

江戸時代は寿命が短かったということになっているが、ある程度の年齢に達した者の寿命はすこぶる長い。六十代はおろか、七、八十代でも現役という役人はごろごろいた。

伊豆守もまだまだ長生きすると思われていたのだが、文化十四年に入ると、病に伏すようになった。

将軍家斉は、伊豆守の倹約に明け暮れる政治に辟易していた。伊豆守が病に伏すようになると、待ってましたとばかりに動きはじめた。

伊豆守の死がほぼ確実になった八月二十三日、子飼いともいうべき水野出羽守忠成を側用人のまま老中格に上げた。続いて寺社奉行の阿部備中守正精を、大坂城代、京都所司代を飛び越させて老中に抜擢した。

寺社奉行に一人欠員ができた。

水野和泉守は、かねて「寺社奉行に」「国替えを」と願っている。水野出羽守忠成は毎日のように将軍家斉に接している。すぐさま家斉に進言した。

「水野和泉守は家格にも不足はございませぬし、いたって才ある人物と見受けられます。阿部備中守の跡の寺社奉行に挙げられてはいかがでございましょう」

「それはいいが、和泉守の城は唐津にある。寺社奉行に挙げることはできぬ」

家斉は首を振る。

「国替えなさればいいと思われます」

「どこへ？」

「浜松へ」
「浜松？　ああ、不始末を仕出かした、井上河内守を動かしてその後釜に入れるのか」
「さようでございます」
「して、河内守はいずこに？」
「奥州の棚倉に」
「棚倉か。すると棚倉の小笠原主殿頭はいずれに？」
「水野和泉守の跡の唐津へ」
「なるほど三方領地替えというわけだな」
「さようでございます」
「しかし、それではいささか河内守が気の毒でなくもない」
「なんの。河内守は御前差扣も免され、いまや涼しい顔をして雁間に詰めておりまするが、しでかしたことは、大名にあるまじき、前代未聞の不祥事。このまま捨ておかれましては、それこそ公儀不調法、御政道不行届きと申すものでございます」
「さようか。ではまあ、よきに計らえ」
「ははあ」
松平伊豆守信明は八月二十九日に卒した。
翌九月十日、奏者番の水野和泉守は寺社奉行兼帯を命ぜられた。

四日後の九月十四日、井上河内守の御城使（留守居）は月番老中の屋敷に呼びつけられた。何事かといそいそ出かけると、月番老中はおごそかにいう。
「棚倉へ国替えを申し渡す。小笠原主殿頭と念入りに打ち合わせて、早々棚倉に引き移るよう」
寝耳に水の出来事だ。河内守は、御城使から報告を受けて仰天した。人事の動きからして、水野出羽守と水野和泉守に一服盛られたというのは容易に想像がつく。
「むむ」
地団駄を踏んで悔しがったがどうにもならない。
そのあとすぐに落首が飛んだ。
色でしくじりゃ井上様よ
　やるぞ奥州棚倉へ

七

棚倉は奥州といっても白河の東方、やや南にある。江戸への往来も奥州街道ではなく、水戸街道を、水戸から二つ先の宿場田彦から分かれて、田彦と棚倉を結ぶ、棚倉街道を利用する。

江戸から五十里。足の達者で四日。遠方という距離ではない。

だが棚倉は、山形などと並ぶ極めつきの痩せ地だった。

浜松は草高（内高ともいう、実際の生産高）が表高をはるかに凌駕していたのみならず、綿花をはじめとする特産物があった。したがってそれにともなう年貢収納もかなりのものだった。浜松とおなじ六万石の棚倉は、延び（表高を凌駕する生産高）がまるでなく、草高は表高どおりでほぼ六万石。年貢の収納には限りがあった。

棚倉へ移っての窮乏は十分に予想された。ならばここで、上杉鷹山のように、殖産振興に力を入れ、勝手向き（財政）を豊かにせざるべからずと、河内守が発奮したかというと、さにあらず。ほろ酔いも手伝っていたかもしれないが、百姓女に挑むだけの男ではあった。

「むむ」と地団駄を踏んで悔しがったあと、こう続けた。

「余は行かぬぞ。断じて行くものか。棚倉などに」

嘘か真か棚倉には、河内守がこんな上申書を幕閣に提出したという話が残っている。

「棚倉は蛇蝎が群れをなして住む地と聞き及んでおります。御城米も蛇蝎に食い荒らされているとか。それが証拠に棚倉では、嫁入りする娘は必ずこん棒を四本持参するということです。布団の下において、忍び込んでくる蛇蝎を追い払うためです。わたしのように身体の弱い者はそんな恐ろしい地に住むことができません。国替えを撤回してください」

ついこの前まで棚倉は「蛇の棚倉」といわれたそうで、そういわれるようになったきっかけは、河内守のこの上申書のせいだと地元の人はいい伝えているのだが、河内守ならそんな上申書を提出したかもしれないと思わせる内容である。

浜松は豊かなところだから家臣も増えていた。国替えとなると、見知らぬ土地へ行くのを嫌って、出奔する家来が少なくなかったのだが、出奔してしのげる才覚のない者はついて行くしかない。大勢の家来が、鍋釜など所帯道具を担いで棚倉に向かった。そして、やっとの思いで棚倉街道の終着地、棚倉に辿り着いた。

なるほど街道沿いに家はあった。商家もあった。あるにはあったが、どの家も軒が低く、庇も低かった。みるからにみすぼらしかった。

むろん城もあった。

街道沿いを左に折れると、すぐに城に突き当たった。だが、

「なんと、これが城か」

と誰もが溜め息をついた。

棚倉城は、信長の臣丹羽長秀の嫡男、丹羽五郎左衛門長重が幕府に命ぜられ、江戸時代の初期、寛永時代に築いた城で、城とは名ばかり。神社を立ち退かせ、土を穿って掻き上げ、そこに水を溜めて濠にし、掻き上げた土を土手にしただけの、家康縁の浜松城

とは比べものにならないお粗末な平城だった。

それでも内堀と外堀とがあり、外堀の周囲に侍屋敷があって、家来はそこに落ち着いた。

棚倉は、家来にいわせれば穴倉のような地形で、夏は蒸し暑く、冬は寒風が吹きつのった。また噂どおりの痩せ地で、禄などろくろく宛われない。男も女も、野に、山に、畑にと、朝から晩まで野良仕事に追われた。なかには商家や農家に雇われて賃稼ぎする者もいた。

移封十二年後の天保三年（一八三二）には、傘張り内職の、「町人との直接取引を許す」などという触れも出されている。厳しさは並大抵ではなかった。

ともあれ「断じて棚倉などに行かない」と明言したとおり、河内守は棚倉へ行くのを拒んだ。

大名は参勤交代する。江戸の近くの大名は江戸と国元に半年ずつ、遠くの大名は江戸と国元に一年ずつ住む。

参勤交代の季節は四月である。二百数十人いる大名の半数が参勤に出府してきて、残りの半数が御暇をいただいて帰国（もしくは帰邑）する。

翌る文政元年（一八一八）の四月を迎えた。河内守は病を口実に在府を願いでて認めてもらった。

翌年文政二年も在府を願いでた。認められたことは認められたが、御用番の老中から釘を刺された。

「今年で最後だ。来年は認めない。河内殿にさよう申しておくように」

次の年、文政三年の四月が近づいた。

「昨年釘を刺されております。これ以上は引き延ばせません。今年はなんとしてでもお国入りを」

家来は毎日、口を酸っぱくしていう。

「棚倉になど、行かぬといったら行かぬ。断じて行かぬ」

河内守は拒否する。

「ならば隠居していただくしかありません」

家来は脅した。

「よかろう。隠居してやろうではないか」

河内守はそういい、あっさり隠居致仕した。

跡は十五歳の嫡男河内守正春が継いだ。

八

井上河内守を棚倉に追った、和泉守改め水野越前守忠邦は、やがて〝青雲の志〟であった老中の座に上りつめた。

越前守は才があるだけでなく、運の強い男でもあった。井上河内守が前代未聞の不祥事をしでかして失脚し、浜松への移封と同時に寺社奉行の座を手に入れたのもそうだ。

越前守の一歩先一歩先と出世の階段を上っていた、松平周防守康任というキレ者の老中がいて、但馬出石仙石家の御家騒動に不用意に関わって失脚したのもそうだ。目の上のたん瘤のような存在は、自ら蹴つまずいて消えた。

老中首座兼勝手掛老中には、大久保加賀守が就いていたが、加賀守は掻き分けて物申すような男でなく、越前守は老中の頂点である老中首座兼勝手掛老中を目前にした。

失脚した松平周防守に関していえば、時をおなじくして、領内（石見浜田）の者の密貿易が発覚、それに松平周防守家も絡んでいたことが明らかになった。松平周防守は、重ね重ねの不始末を咎められて退隠させられ、跡を継いだ松平周防守康爵が国替えされることになった。

罰せられての御国替えとなると、場所は決まっている。棚倉か山形辺りだ。

河内守正甫の跡を継いだ河内守正春は、文政十二年（一八二九）二十四歳で奏者番、天保五年（一八三三）二十九歳で寺社奉行と、父とは打って変わって順調に出世の階段を上っていた。

そんなことも考慮され、松平周防守は棚倉に追いやられることになり、ところてん式に押し出されて河内守正春は上州館林に入った。

河内守正甫はこのとき六十二歳。まだ健在で、もちろん江戸にいてこの朗報を聞いた。

水野越前守が頼った同姓同族の水野出羽守忠成は、田沼主殿頭や義父水野出羽守忠友の系譜を引く男で、将軍家斉の威を背景に、田沼時代とおなじ、賄賂のはびこる、裏返していうと何事にも鷹揚で堅苦しくない時代を現出させた。

水野出羽守はまた、家斉の意向を受けて、貨幣の改鋳をおこない、大幅に財政収入を増やした。松平越中守からはじまって松平伊豆守にいたるおよそ四十年は、倹約倹約で、息の詰まるような時代だったが、水野出羽守が貨幣の改鋳をおこなってから財政も豊かになった。家斉は、おおらかに金が使えて贅沢ができるようになり、出羽守のことを高く評価するようになった。家斉は出羽守と同体質で、賄賂をはびこらせる出羽守の政治に異を挟むこともなかった。

そんな出羽守におもねり、さかんに賄賂を贈って、越前守は出世の階段を上りつめたのだが、越前守は、腹の中では賄賂がはびこる風潮を苦々しく思っていた。やがて大久

保加賀守が死去して老中首座兼勝手掛老中となり、家斉（将軍を退いてそのころ大御所）が死ぬと、すぐさま刷新政治――、いわゆる天保の改革をはじめた。

天保の改革は、寛政の改革以上に観念的教条的で、おもちゃ箱を引っ繰り返したようなさんざんな結果を残して、およそ二年後の天保十四年（一八四三）に越前守は失脚する。

その年、河内守正甫は六十九歳。まだ健在で、仇敵に等しい男の、失脚の報を心安らかに聞いた。

水野越前守は、外寇問題が突発していったん老中に返り咲く。しかしもはや昔日の威はなく、半年でまた失脚。今度は、幕閣を追われるだけでなく、加増一万石と本高のうちの一万石、計二万石と居屋敷・家作を没収されて、隠居謹慎を命ぜられた。

跡を継いだのは嫡男の水野大監物忠精で、大監物忠精は、これまた懲罰として山形へ移封を命ぜられた。

河内守正春はその後も順調に昇進し、天保九年（一八三八）に大坂城代、天保十一年に西丸老中（大御所になっていた家斉付き）となるが、病を得て天保十四年に老中を辞任。

この河内守正春が水野家が山形へ移封された跡の浜松に入ることになった。

因果はめぐる小車――。

実に二十八年ぶりの浜松への復帰だった。

御改革という、誰も望んでいない改革をやり、景気を沈滞させ、世の中を息苦しくさせてしまった越前守は、江戸の町民にだけでなく、浜松の領民にも人気がなかった。

越前守が浜松から追いだされると聞いて、領民は沸き立った。ついで、水野家が領民から借りた金を清算しないかぎり移封は認めないといきりたった。一万人もの領民が手に手に鍬鎌を持って集まり、打ち壊し寸前にまでいたった。

水野大監物に代わって浜松に入る井上河内守の家来が間に入り、借金の年賦返済を保証して、ようやく領民は怒りを鎮めた。

河内守正甫は七十一歳。このときもまだ健在で、江戸にいてこれらの動きをじっと見守っていた。

河内守正春は浜松に移封二年後の弘化四年（一八四七）に死去して、跡は十一歳の嫡男河内守正直が継いだ。

河内守正直の姉に愛姫という娘がいた。河内守正甫にとっては孫娘だ。水野家の山形移封に力を藉したことが縁になって、その愛姫と水野大監物忠精との間に縁談が持ち上がった。

かわいい孫娘を、仇敵といってもいい男、越前守の嫡男に嫁がせるのだ。ふつうなら反対する。だがもはや恩讐は彼方にある。七十八歳とこのときも健在だった河内守正甫

は、縁談に異を挟まなかった。

大監物忠精と愛姫の二人は嘉永五年（一八五二）十二月に式を挙げる。ペリーが浦賀にやってきたのは翌年六月だ。

それからも、河内守正甫は長生きする。息を引き取ったのは、安政五年（一八五八）。五カ国との条約で箱館、横浜、長崎の三港が開かれる前年である。

享年八十四。大往生といっていいが、さすがにそのころには、内藤大和守の下屋敷で百姓の女房に〝押して不義〟におよんだことや、下馬先で六尺手廻りに罵詈雑言を浴びせられたことなど、誰一人として知る者のない遠い過去の出来事になっていた。長生きはしてみるものである。

ちなみに、河内守から腕を落とされた男は、浜松に移り住んで過分の食禄を与えられ、美女二人にかしずかれたということまでは分かっているが、その後のことは分かっていない。

家中は挙げて棚倉に移り住むことになったのだ。移封のきっかけになった男のことになど、いつまでもかまっていられなかったろうから、男はすごすご江戸に帰り、別れた女房に頭を下げて詫びを入れた……、といったところではないか。

何故一言諫メクレザルヤ

一

前回、脇役で登場した水野越前守忠邦――、天保の改革を行った江戸末期の老中首座兼勝手掛老中（いわば首相にあたる）は、改革に着手する二年前、家中の老臣関泰継、侍講塩谷宕陰、藩儒小田切敏（藤軒）の三人を呼んでいった。

「このほど家譜を繙き一覧した。あまりにも内容がお粗末だった。各御先代の遺事功業の記述が十分に尽されていないのみならず、誤謬も少なくない。そこで、世家、系図、各御先代の年譜、ならびに遺事功業を網羅した録を編纂しようと思い立った。その方ら三人で事に当たってくれ」

老臣関泰継が総裁となり、塩谷宕陰が執筆、小田切敏が対校に当たることになり、題して「丕揚録」――「大いにあらわす」とした録の編纂がすすめられることになった。

関泰継らは「公府の旧志（幕府の記録）」「家臣の私記」「外人（岡崎水野家の関係者以外の者）の著書」などを渉猟した。

塩谷宕陰は十六歳で昌平黌に入学し、のち碩学松崎慊堂に学び、さらにこののち安井息軒、芳野金陵とともに「安政古学の三家」と称された大学者で、もとより朱子学派だが、考証学派に近く、できうるかぎり公正、正確を期そうと、編纂事業に意欲的に取り組んだ。

「公府の旧志」は散逸したり焚燬したりしたものが、また「家臣の私記」と「外人の著書」には、作り話と思われるものや誤謬が少なくなかった。そこであるいは史実に詳しい人を訪ねて質し、また口碑を探して照らし合わせた。

水野忠邦の三州岡崎水野家は徳川家康の生母於大の同母兄忠守を祖としていて、忠邦で十二代目になる。歴代当主が十二人となると、遺事逸事が多く、史料も多く残されていて、史料読みもついつい弾むという愛すべき特異な逸話を持つ当主もいた。忠守を初代とすると三代目に当たる、鉄性公こと水野忠善がそうだ。

遺事逸事が多いということでは、六代目になる、老中首座で勝手掛老中を兼務した忠之も負けていない。勝手掛老中という役職はそもそも財政を専管させるため、八代将軍吉宗が新たに設けたものだが、老中首座でかつ初代の勝手掛老中となった忠之は、吉宗の片腕となって享保の改革を助けた。

その忠之の後を継いだのは実子の忠輝。忠輝は父の在位が長かったため、家督を継いだのが四十歳（享保十五年）のときで、在位七年、四十七歳（元文二年）で卒した。

忠輝の後を継いだのはやはり実子の忠辰。

家譜には「十四歳で家督し、二十九歳のときに病を得て卒す」と記されているだけで、どのような事績を残したのか、また人となりはどうだったのかなど、なにも記されてい

ない。幼少にして家督し、三十を前に卒したのだから、まあ当然だろうが、それでもと、塩谷宕陰らは遺事逸事を集めはじめた。

「ある家にこんなものが残されてました」

総裁の関泰継が忠辰に関する書付を探してきた。

「心附候儀共相談之書付」と題してあった。

気がついたことを家臣に相談するという趣旨の書付で長文だが、識見が高邁といってもいい。なかなかしっかりしたことが書かれていた。忠辰はどうやらただ者ではないようだった。

なぜこのようなお方の遺事逸事が残されていないのだろうかと調べはじめて、塩谷宕陰は驚くべき事実に遭遇した。君臣の儀にもとるどころではない。ありうべからざる事実が隠されていたのだ。

塩谷宕陰は「丕揚録」の執筆にとりかかり、忠辰の遺事の項におよんで、怒りをぶつけるようにこう筆を走らせた。

「此の公、御初年は深く聖学（儒学）も好み給ひ、御聡明に渡らせ給ふ由伝へ聞へぬ……。惜い哉後年老臣の為に廃せられ給ひ、閑室の中に於て三十にも満せられずして世を去り給ふ」

閑室というのは座敷牢のことである。そしてさらにこう続けた。

「太照公（忠辰）は十四歳の御時、御家督なりければ御先代以来諸老大臣漸く驕横の兆ありける処、幼君と侮り奉り、愈跋扈して上を要する事数数なり。公天資英敏にあらせらるる故、生長し給ふに随ひ賞罰を厳にして其の権を抑へらるると雖も、輔佐其人乏しくして君臣不諧となり遂に廃せられ給ふに至れり」

二

忠辰は父の死により、十四歳で家督して従五位下に叙され、大監物に任ぜられて、常には監物と称するようになった。とはいえ、まだ子供である。参勤交代なども認められなかった。もとより領内の仕置、いわゆる政治も、家老、年寄など当番所勤の重役が代行した。

下総古河の本多中務大輔忠良の女お須奈を娶ったのが寛保二年（一七四二）、十九歳の二月。その年六月二十三日にようやく御暇が認められ、領地の三州岡崎に帰るのを許された。

忠辰の実母は江戸の鍛冶屋の娘だった。先代忠輝の許に、三味線を弾きに上がっていたのに手がついて生まれたのが忠辰で、江戸生まれの江戸育ち。もとより初入部（はじめてのお国入り）で、七月九日に江戸を立ち、十六日に岡崎に着いた。

塩谷宕陰が記しているとおり、忠辰は深く学問を学んだ成果として、大いに経綸を抱いていた。祖父は老中首座兼勝手掛老中として、将軍（吉宗）のもとで辣腕を振るった。その祖父の血を享け継いでいる。天下の政治とわずか岡崎六万石の政治という違いはあるが、ああもしたい、こうもしたいとの抱負を胸一杯に、勇んで岡崎城に入った。

江戸時代の大名は、誰も彼もが判で押したように貧乏を強いられていた。岡崎六万石の水野家も例外ではない。領地は矢作川を挟む比較的富裕な地域で、知られた木綿の産地だったが、専売制を布いて利潤を収奪するなどという策を弄することもなく、収納（収入）はただただ公租（年貢）にたよっていた。

一方、江戸との二重生活や参勤交代の往来で強いられる不必要な入用（出費）、また消費水準の向上による経費増で、入用はつねに収納を上回り、年々勝手方取続き（財政）に苦しんでいて、忠辰が初入部した年の翌春も、増御借米といって、またまた家中から米を借り上げなければならなくなった。

忠辰は深く聖学を学んでいる。聖学による政治は、究極のところ臣下や民のための政治を目指している。忠辰にとって、増御借米は耐えがたいことである。増御借米を実施すると同時に、忠辰は、増御借米返却を目的に、家中に厳しい倹約を強いた。自らも、衣服は木綿に限る、一日の食費は百文、食膳は一菜と定めて、率先垂範した。

その年二十歳の年は、参勤の年で、七月七日に岡崎を立ち、十二日に江戸に着いたのだが、十一月に江戸から指示を下し、家中に増御借米を返却するとともに、いよいよ厳しく倹約を守るようにと指示した。

翌年、二十一歳の年は御暇年で、六月二十三日に御暇を認められたが、直後の二十五日に持病を発し、出発を延期しなければならなくなった。

江戸の屋敷には、常府の者以外に国からの勤番者が詰めている。勤番者は屋敷内の長屋で自炊していて、だいたいがぶらぶらしているだけの毎日なのだが、江戸逗留が長引けばそれだけ余分に掛り（滞在費）が増えると苦情を並べはじめ、それが忠辰の耳に聞こえた。

自分のせいで家来に苦労を強いる。これまた忠辰には耐えられぬことである。忠辰は、勤番者の逗留超過による入用増の手当を支給するように指示した。痒いところに手が届くような心配りをした。

持病はおよそ二十日で治り、忠辰は七月の六日に江戸を立ち、十三日に岡崎に着いた。

忠辰は、名君でありたい、名君でなければならないと思っている。倹約を強いたのもそのせいだが、倹約ばかりでは息が詰まって、家来が誰もついてこないというのもまた知っている。

倹約は成果が上がっていた。五万両もの額を倹約で捻出していた。それほど厳しい倹約を強いたということでもあるが、倹約の成果は家中に還元しなければならない。

そう考え、しばらく様子を見ていて、十一月二十五日、家中に、もちろん江戸詰めも含めて、借金の有無およびその高を書付にて差しだすようにと申し渡した。

家中の者は、それがどういうことなのか意味が分からない。

ありのままを書き付けて差しだすとする。日頃始末が悪いからだとお叱りを受ける。あるいは俸禄から天引きされて借金払いをさせられる。ありえないことではない。できたら適当にごまかしたい。しかしそうと分かったら、そのことでまたお咎めを受けるかもしれない。

あれこれ考えて、おそるおそる、まあまあ正直に書付を差しだした。

忠辰は、書付を受け付けながら、十二月の七日に、「年来の領地相続の祝儀」を名目に、百姓の年貢を半減すると申し渡した。

年貢の半減――。

これ以上の善政はない。百姓はいうまでもなく、家中もびっくりした。

そのどよめきが消えやらぬ十二月十二日、忠辰は、借金のある者に、ことごとく拝借を許すと申し渡した。

本当ならそっくり肩代わりしてもよかったのだが、借金の額はそれぞれ違う。不公平が生じる。それで拝借ということにした。金額は合計で一万四千七百二十両にもおよんだ。さらに親族が病気の節は、看病願いを許すと申し渡した。それまでは、親や子が病気でも看病のための休暇は許されなかった。

忠辰は矢継ぎ早にそれらの善政を布いたのだが、家中の、家老、年寄（家老に次ぐ）などの門閥と当番所（政務の執務室）で政務を担当している重役の反応は冷ややかだった。彼らは苦々しい思いで忠辰の〝善政〟を眺めていた。

大名は、老中や若年寄などの任にあるとき、参勤交代をしない。祖父忠之は正徳元年（一七一一）に若年寄、同四年に京都所司代、享保二年（一七一七）に老中とすすんで、享保十五年（一七三〇）に老中を辞した。そのおよそ二十年の間は、京への往復の二度通過しただけで、岡崎に逗留しておらず、岡崎表の仕置は、門閥や当番所勤の重役に任せきりにした。ということは、門閥や重役には思いどおりの政治ができたということで、相応に役得を懐にし、相応に潤った。

家中に厳しい倹約を強いるということは、その彼らの役得、つまり既得権を収奪するということに外ならない。しかも忠辰は、とくに引き立てた歩頭赤星直右衛門、御小姓鈴木又八、同牧田右橘、同井上軍蔵、御小納戸堺才七、御旗奉行鈴木伝内ら中下士層の側近を引き立て、要所要所に配し、門閥重役には手がだせないようにして実施した。

門閥重役にとってこれほど腹立たしいことはない。彼らが、倹約による成果が家中や百姓に還元されるのを、つまり忠辰の〝善政〟を冷ややかに、かつ苦々しい思いで眺めていたのはそのせいで、既得権の侵害者である忠辰に、全員が腹に一物も二物も持って

いた。いい直すと、家老年寄ら門閥重役と忠辰は、忠辰が名君であろうとして倹約に取り組んだその瞬間から、一触即発の関係に入った。

三

忠辰が二十二歳になった年、延享二年（一七四五）に、吉宗は退隠して大御所となり、小便公方と陰口をきかれた家重が九代将軍になった。その年、岡崎水野家での忠辰と重役との対立は、危機を孕みながらも、表立つことはなかった。門閥や重役はじっと忠辰の出方を窺っていた。

二十三歳の延享三年は御暇年で、忠辰は六月二十六日に江戸を立ち、七月三日に岡崎に着いた。そして九月の下旬、その月十六日に夫人が卒したと江戸から悲しい知らせがあったころ、忠辰と門閥重役はとうとう激突した。

岡崎水野家には、水野、拝郷、中村、と世襲の三家老があった。なかでも水野、拝郷の両家はともに水野の一族で、またともに千四百石の禄を食んでいた。忠辰ははじめて入部した年の一月二十八日に水野家に、二月一日に拝郷家にと、それぞれ足を運んで敬意を表した。水野、拝郷の両家は、それほど家中で重きをなしていた。

事はその拝郷家の当主源左衛門に、忠辰が「江戸詰めを命ずる」と書状を送ったことにはじまる。

家老の水野家や拝郷家の当主が江戸詰めになった例はない。倹約の実施ならびにそれに関連する仕置、いい直すと改革に、源左衛門が陰に陽に反対してきたことを咎めるいわば懲罰人事だったが、源左衛門はこの江戸詰め辞令を無視した。「御請けします」とも、「しかじかの理由で御請けできかねます」ともいって寄越さなかった。

主君の命に対してあるまじき応対である。「不審である」と忠辰はふたたび書状を送った。

これに源左衛門は、忠辰にではなく、当番所勤の年寄に返書を送った。

「殿から書状を二通たしかに頂戴した。だがどうにも解せない。書き損じではないのか」

忠辰が書き違えているのではないかというのだ。これほど無礼な申しようはない。年寄から上げられてきた返書を開いて、忠辰は手をわなわな震わせた。

続けて源左衛門から「存じ寄り」があるとして、忠辰に直接書状を送ってきた。それには「家老の水野家と拝郷家は別格で、江戸詰めなど仰せつけられるいわれがない」とあった。

かりに源左衛門のいうことに正当性があったとして、ではなぜ最初、辞令を送ったとき、そう返書を寄越さなかったのか。辞令は無視しておいて、重ねての書状に「存じ寄

り」がある、はない。それに「文章」が甚だ不敬である。忠辰はそう咎め、扶持の召し上げこそ憚ったものの、源左衛門に「役儀御免隠居」を命じ、伜八太郎に家督させた。十一月二十八日のことで、重役との対決はこれに止まらなかった。

おなじころ忠辰は、年寄松本頼母に、当番所勤の年寄を通じてさる申し渡しをした。頼母も源左衛門と同様、「御請けします」といってこない。そこで同様に「不審である」と申し送った。頼母はなお返事を無視する。

ならばと、忠辰は頼母に「咎」を申し渡した。頼母は当番所勤の年寄に、こう返事を返した。

「御咎は間違ってのことと思われる。事情を詳しく承りたい」

これまた無礼なすっとぼけようだ。

拝郷源左衛門も松本頼母も申し合わせての、忠辰が弱年と侮っての反抗で、忠辰はいよいよ怒りをつのらせ、頼母にも「役儀御免隠居」を命じた。頼母の家禄は八百石。そのうち七百石を伜千次郎へ、百石を同姓松本銕吉に家督させた。

かねて危機を孕んでいた忠辰と門閥重役の戦いの火蓋は、こうして切って落とされた。

翌年、二十四歳の年は、七月四日に岡崎を立ち、十二日に江戸に着いた。

門閥重役のあからさまな反抗は続き、今度は年寄鈴木弥一右衛門が、「江戸勝手（財務経理担当）を命ずる」という辞令を、またまた理由も明らかにせずに無視するという

挙に出た。これまた罰せざるをえない。拝郷源左衛門や松本頼母より一段重い、「役儀御免隠居、急度慎」を命じ、家禄四百石のうち百石を召し上げ、三百石を伜半之助に家督させた。

忠辰と門閥重役の戦いは、このように公然と噴き上がり、両者の関係は抜き差しならないものとなった。

四

翌年二十五歳の年は御暇年で、忠辰は七月四日に江戸を立ち、十日に岡崎に帰り着いた。

門閥重役はなにかを命ずると、示し合わせていて無視する。そういう格好で公然と反抗する。ためにすでに二人を「役儀御免隠居」に、一人を「役儀御免隠居、急度慎」に処した。逆にいうと彼らは「役儀御免隠居」や「急度慎」を覚悟で反抗してくる。

こんなことが続くと、門閥重役はおっつけ全員当番所から消えてしまう。幕府への聞こえもよくない。「家政取締向きよろしからず」として厳しい咎を受けかねない。

岡崎に帰ってからというもの、忠辰は腫れ物に触るように門閥重役に接した。あれこれ命を下すのを差し控えた。

ところが、忠辰が二十六歳の、明けて寛延二年（一七四九）、拝郷家と並ぶ名門家老の水野三郎右衛門、年寄の水野文左衛門、おなじく年寄の二本松杢の三人が、「病」と称して、正月元旦の年賀の登城を拒否するという挙に出た。

拝郷源左衛門には「役儀御免隠居」を命じている。倅の拝郷八太郎は幼弱で当番所に勤務していない。当番所の最高責任者はいま一人の名門家老水野三郎右衛門で、その三郎右衛門に、当番所勤の年寄水野文左衛門、同二本松杢の、門閥重役三人が登城しなければ年頭の儀式がはじめられない。儀式がはじめられなければ、一年がはじまらない。容易ならぬ事態である。

どうしたものか。いい思案が浮かばず、あれこれ思い惑っているうちに、元旦の一日は暮れた。

翌日二日の朝が明けた。

三郎右衛門ら三人はこの日も姿を見せなかったが、この日はさらに、当番所勤の年寄全員が登城を拒否するという挙に出た。門閥重役は全員が呼吸をそろえ、〝反主君〟の旗幟を鮮明にした。

二進も三進もいかない。悔しいが折れるしかない。忠辰は側用人中村紋左衛門を家老水野三郎右衛門、年寄水野文左衛門、同二本松杢の屋敷に送っていわせた。

「年始である。不満があるのならあらためて聞こう。とりあえず矛をおさめて登城してくれ」

三人は口裏を合わせていていう。

「あいにくの病。申し訳ござらぬが登城の儀はご免くだされ」

中村紋左衛門は帰って忠辰にそう報告する。

「いま一度」

忠辰は紋左衛門の尻を叩いた。紋左衛門はふたたび三人を屋敷に訪ねる。

返事は変わらない。紋左衛門はすごすご帰ってきて、またその旨を伝える。

「病ということなら、駕籠にてもいいから、なにとぞ登城してくれるようにと、いま一度、三郎右衛門にたのんでくれ」

忠辰は哀願するようにいう。

紋左衛門はまたまた家老水野三郎右衛門を屋敷に訪ねる。返事は変わらない。

「どうして、そう強情を張られるのですか」

紋左衛門は三郎右衛門をなじった。

「ならば申そう」

三郎右衛門はあらたまった。

「殿は国入りされてこの方、歩頭赤星直右衛門、小姓鈴木又八など成り上がり者を登用なされ、当番所の頭越しに、万事その者どもに仕切らせておられる。我らは用なしとい

わんばかりにである。ならばと出仕を控えたまでのこと。たって出仕をといわれるのなら、赤星直右衛門や鈴木又八ら君側の奸を排除されてからのことにされたい。こう申されよ」

「といわれても、いますぐには……」

紋左衛門が戸惑いながら言葉を返すと、三郎右衛門は顔を真っ赤にして畳みかける。

「おぬしは御幼年のころから殿の御側近くにお仕えしておる。にもかかわらず、御所業をお諫めするでなく、なにごとも殿のなさるがままにしておる。全体、おぬしが不行き届きだからこのようなことになるのだ。まったくもって不埒千万。おぬしの顔など見たくない。二度とくるな」

三郎右衛門はこういい、紋左衛門を叩きだすように追い返した。

紋左衛門は忠辰にその旨を報告してつけくわえた。

「ご家老がおっしゃるとおりです。老職方は誰一人として、殿が赤星直右衛門や鈴木又八らを重用なされているのを快く思っておられません。ですから従来どおり、仕置はすべて当番所年寄にお任せあって、そこから指示が下るようになされませ。さすれば、ご家老をはじめ年寄方も、機嫌をあらためて出仕なされるはずです」

門閥重役はそれぞれ分に応じて、御家に入らなければならない財を齧っていた。それゆえ、家中に増御借米などを課して、齧った分を負担させねばならなかった。倹約をはじめとするいわば改革は、要は、門閥重役に御家の財を齧らせないがためで、門閥重役に任せるわけにいかない。我が意を体する側近に任せてこそ実効あらしめられる。

ここで三郎右衛門が要望するに任せて、赤星直右衛門や鈴木又八ら側近を退けると、門閥重役の思う壺。もとの、奴らだけが甘い汁を吸う状態に戻ってしまう。

「それは聞けぬ」

忠辰は突っぱね、重ねていった。

「なんとしてでも登城するよう、三郎右衛門をいま一度、説得せよ」

紋左衛門は進退きわまった。三郎右衛門の屋敷に出かけると見せかけ、自室に籠もり、遺書を認め、人気のない二之丸に行き、正座して襟元をくつろげた。そしてやおら脇差の鞘を払った。その時、

「待たれよ」

御小納戸の志賀儀右衛門が声をかけた。

儀右衛門は紋左衛門の挙動が不審なのに気づき、様子を窺っていて、声をかけるやいなや脇差をもぎ取った。

御小納戸も忠辰の側近である。事情はうすうす知っている。儀右衛門は紋左衛門に事情を直接たしかめ、忠辰に面会をもとめて進言した。

「ご家老が申されるとおりです。赤星直右衛門、鈴木又八らを罷免なされませ」

「それはできぬ」
忠辰は踏ん張った。
「この場を収めるには、御家老の顔を立て、彼らを罷免する以外ございますまい。それとも、他に手立てがあるのですか」
儀右衛門も負けずにいう。
忠辰は弱々しく首を振っていった。
「すると余は家来の軍門に下ることになる」
「それは殿の思し召し違い。軍門に下るとか下らないとか、そういうことではございますまい」
「軍門に下るくらいなら、生害（自殺）したほうがましだ」
「生害？」
と繰り返して儀右衛門は居丈高にいう。
「そうなされませ。御家のためならやむを得ません。ご仕損じがないよう、拙者お側にいて介錯申し上げ、直ちに追腹切ってお供仕ります。さ、さ」
側近の儀右衛門にそこまでいわれて、忠辰はがっくり首を垂れた。
その日忠辰は、赤星直右衛門、鈴木又八ら股肱の臣と頼んでいた側近を呼んで命じた。
「追って処分を下す。それまで差し控えているよう」

門閥重役が全員結束した忠辰への抵抗は、見事功を奏した――、はずなのだが、そこへ思いがけないことがおこった。
忠辰から「役儀御免隠居」を申し付けられていた家老拝郷源左衛門が、復権を目指し、家督していた伜の八太郎に「お力になりたい」旨書状を書かせ、忠辰の許へ送ったのだ。
翌日三日のことで、どういうことなのか、忠辰はしばらく源左衛門の意図を図りかねた。
だがもし、源左衛門に意図や陰謀がないのなら、源左衛門を立てて三郎右衛門に抗することができる。源左衛門がこちらに靡いたと知れば、三郎右衛門に同調している門閥重役も、風向きが変わったと見て手の平を返すかもしれない。話に乗ってみる価値はあると、まる四日思案して、一方で源左衛門の意図を注意深くさぐって、七日の夜、忠辰は密かに源左衛門を屋敷に訪ねた。
源左衛門と八太郎の親子は居住まいを正して迎えた。
忠辰は床を背にしていった。
「八太郎に当番を務めてもらおうと思ってまいった」
家老でも役職に就いているのといないのとでは、いまや役得はなくなっているが、権限だけでもずいぶん違う。
「ははあ、謹んで御請けいたします」

八太郎は手をついて答えた。ただ八太郎は幼弱で当番所勤は務まらない。忠辰は続けた。

「ついては源左衛門、そのほう、八太郎を助けて当番を務めてくれ」

源左衛門もその心積もりでいる。即座に答えた。

「承知つかまつりました。謹んで御請けいたします」

翌日、源左衛門と八太郎は登城し、あらためて言上した。

「御請けいたします」

忠辰は二日の夜、側近の赤星直右衛門や鈴木又八に差扣を命じた。水野三郎右衛門を頭分とする門閥重役に膝を屈するのは時間の問題だった。そこへ、拝郷源左衛門父子がおかしな動きをしたため、忠辰は息を吹き返した。赤星直右衛門や鈴木又八らに下されるはずの処分もうやむやになった。

当番所勤の年寄は、そんな動きを見てぐらつきはじめた。

駄目を押すように、忠辰は三郎右衛門と二本松杢に書状を送り、十九日には三郎右衛門の屋敷に出向いて、

「出仕してくれるよう頼み入る」

と頭を下げた。

これ以上拒絶していると、我が身にだけ災いがおよびそうな気配である。さてはこの戦い、敗れたかと、三郎右衛門自身も動揺して答えた。

「承知つかまつりました」

正月元旦の登城拒否という意表を衝く挙に、当初はたじろがされたものの、拝郷源左衛門父子の動きに助けられて、忠辰はなんとか失地を回復した。

五

そのおなじ一月十九日に、江戸の年寄牛尾四郎右衛門とおなじく年寄山田左兵衛が岡崎に到着した。水野三郎右衛門らが元旦に登城拒否し、続けて二日に当番所年寄が登城拒否するという、岡崎表の不穏な動きを飛脚便で知らされてのことだ。

牛尾四郎右衛門と山田左兵衛は、草鞋を脱ぐとすぐ、公平な仲裁人よろしく、ぎくしゃくしている忠辰と三郎右衛門らの間に割って入った。

「赤星直右衛門や鈴木又八ら成り上がり者を登用され、譜代の門閥重役を軽視された殿もおよろしくない」

牛尾四郎右衛門と山田左兵衛はまずこう忠辰を咎めた。返す刀で、

「いかなる理由がござろうと、元旦に登城を拒否するなどご家老らもおよろしくない」

と水野三郎右衛門らの非も咎めた。

喧嘩両成敗、痛み分けで、牛尾四郎右衛門と山田左兵衛は、双方に犠牲を求めるという仲裁案を提出した。

流れは勝ちに転じていた。なのにと忠辰は不満である。しぶった。

「ならば我らもご家老の側につくまで」

牛尾四郎右衛門に山田左兵衛は脅しつけるようにいう。忠辰はしぶしぶ仲裁案を飲まされた。

一月二十一日、「御側勤御為ならざるによって」という理由で、側近をこう処分した。

歩頭赤星直右衛門、小姓鈴木又八、永の暇。

小納戸堺才七、小姓牧田右橘、同井上軍蔵、御側勤差し除き。

御旗奉行鈴木伝内、御役御免御加増召し上げ。

門閥重役の側は、元旦に登城拒否した三人のうちの一人、当たり障りのない水野文左衛門を「兼々権高に相勤め、思し召しに相叶わず」として、こう処した。

役儀御免隠居、急度慎。家督は伜主蔵に下す。

双方が仲裁案を受け入れて、翌日二十四日に、三人のうちの二人、水野三郎右衛門と二本松杢は登城出仕した。もちろん当番所年寄も登城した。

その翌日、あらためて拝郷源左衛門を、召し出し、こう申し渡した。

「そのほうに再勤を申しつけ、勤務中、合力として百人扶持を与える」

一人扶持は五俵換算。百人扶持は五百俵である。岡崎水野家家中ももとより地方知行から蔵米制に直していて、俸禄は土地ではなく、収穫した米で与えられることになっていた。たとえば百石取りには百俵が与えられた。

拝郷家は千四百石取りだから、千四百俵を受け取っている。そのうえの五百俵だ。さすがに源左衛門も、同格の水野三郎右衛門や当番所年寄の手前、「はい、そうですか。有り難うございます」と二つ返事で受けかねた。

忠辰としてはむろん源左衛門を優遇して、門閥重役の分断を図ろうとしてのことだったのだが、源左衛門としてはこう答えざるをえない。

「御懇ろの御意、有り難き仕合わせに存じ奉りまするが、御請の儀は、次の間に下がって年寄どもと相談じたうえで申し上げます」

源左衛門は次の間に下がり、当番所年寄に、受けていいものかどうかを尋ねた。当番所年寄としては、源左衛門の利害に関することで、「受けるな」とはいえない。

「ではお受け申すが、伜八太郎に家督を仰せつけられていることでもあり、家老としてではなく、年寄の席順でお受けいたす」

いわば臨時で受けるのだといって、拝郷源左衛門は忠辰に面会を求め、その旨繰り返した。

「さようか。余としては不本意だが仕方あるまい。ならばそうしてくれ」

といって忠辰は、「だが」とつけくわえた。

「おっつけ、屋敷もあらたにつかわす。そのつもりで励んでくれ」

門閥重役の分断を図るため、ことさら源左衛門を引き立てようとした。忠辰も門閥重役に押されっぱなしでなく、それなりに布石は打った。

その日二十五日には、無理強いをした中村紋左衛門を年寄に任命し、また江戸からやってきた牛尾四郎右衛門と山田左兵衛に、不本意な解決ではあったが、事はまあまあおさまったことでもあり、白銀と羽織を下げ渡して労を賞し、江戸に帰らせた。

一件はこう落着した。

だが……、十四の歳に家督して十二年余。十九の歳に初入部して六年半。その間、門閥重役の、所業の裏の裏まで見た。彼らに対する不満は山ほどある。そこへ、赤星直右衛門、鈴木又八ら股肱の臣とも頼む側近を、手足をもぐように退けさせられた。

門閥重役に、すすんで所業を改める気はない。されど側近を退けたいまは、門閥重役を頼むしかない。であれば、彼らに一言も二言もいって、改めるところは改めてもらわなければならない。

そう思い、このように直してもらいたいと忠辰は筆を執った。書き上げたのが、塩谷宕陰が目にし、その高邁な識見に打たれて、忠辰という人物に注目した「心附候儀共相談之書付」である。

書付は六カ条からなっていて、忠辰はまずこういう。

重役は諸役人に権限を委譲せず、諸役人が一存で取り計らうとそのことを強く咎める。だから、諸役人はただ口上を申し違わず伝える取次のようになってしまい、能力があってもそれを発揮できないでいる。今後は、できるかぎり諸役人に権限を委譲して能力が発揮できるようにしてもらいたい。

二条はこう。

賞を重んじ、刑を軽くするのが仕置の基本であるべきなのに、刑のみ強くて賞が軽んじられている。今後は、刑を軽くし、仕事に励む者には、褒美加増等恩賞で報いてもらいたい。

諸役人を、大いに昇進、登用、抜擢してもらいたいというのが三条。

家の子（部屋住み）にも登用の機会を与えてもらいたいというのが四条。

小役人も俸禄を頭打ちすることなく、能力に応じて増やしてもらいたいというのが五条。

六条はこう。

去年の夏、朝鮮通信使が領内を通行するに当たって、中間などの老衰の者に暇をだし、ために餓死者を出したと聞いている。このような致し方は仁政に背く。考え直してもらいたい。

門閥重役は、権限を握って離さず、ことごとに諸役人の能力を押さえつける。些細な事を咎めて、賞するということを知らない。昇進、登用、抜擢ということもしない。家の子ももちろん登用しないし、小役人の俸禄も低く押さえつけて、意欲をもたせようとしない。そして中間などで老衰の者に暇を出すという、仁政にもとることを平気でする。

忠辰は「聖学」を学んだから人一倍だったろうが、聖学を学んでいなくとも、このような現実を直視すれば、まして主君、支配者であれば、それを改めたいと思うのは当然だ。

だがこの「心附候儀共相談之書付」に、門閥重役はなんの関心も示さなかった。

六

先に忠辰が「役儀御免隠居」を申しつけた年寄、松本頼母は、出府して再勤を願い、そのまま江戸に逗留していた。

仲裁人の牛尾四郎右衛門と山田左兵衛は、喧嘩両成敗のけりをつけると、松本頼母の再勤を取り持った。

忠辰は聞き届け、頼母を江戸の当番所年寄に任じ、家禄七百石はあらためて頼母に預け、家督していた倅の千次郎に、別途二十人扶持を与えると書付にして渡した。

江戸へ戻った牛尾四郎右衛門と山田左兵衛は、忠辰のお墨付を見せ、かくかくしかじかと松本頼母に次第を語った。

「有り難き仕合わせに存じ奉ります。御請けいたします」

といって頼母は続けた。

「それについて、いささか話がござれば、席を書院に移していただくわけにはまいり申さぬか」

書院に席を移すと、人気のないのを見定めて、頼母が切りだした。

「おのおの方は、これまでの殿のなされようをいかが思われる」

「と申されると？」

牛尾四郎右衛門と山田左兵衛は膝を乗り出す。

「とかく口だしがすぎる。そうは思われませぬか」

門閥重役なら誰もが思っていることである。

「いかにも」

両人は相槌を打つ。

「そして意に添わないと、役儀御免に隠居仰せつけ、でござる。ご家老拝郷源左衛門殿、それがし、年寄鈴木弥一右衛門殿、こたびの年寄水野文左衛門殿と、これまでに四人が申しつけられ、弥一右衛門殿と文左衛門殿にいたっては、急度慎まで申しつけられた」

忠辰はとかく権力を濫用しすぎると、彼らの目には映っている。

「おそらく今度の一件は忘れておられず、おっつけ張本人のご家老水野三郎右衛門殿にも懲罰が下されるのは間違いござらぬ」

ありえないことではないとばかりに、牛尾四郎右衛門も山田左兵衛もうなずく。

「どこの御家中でも、御家の仕置は老職に任せられております。殿様なるお人は老職の上にあって、さようか、よきにはからえといっていればいいということになっている。なのに我が殿は、なまじ学問を齧られたせいか、やたらに差し出口をなさる。当番所勤はご家老にしろ、我ら年寄にしろやりにくいことおびただしい」

それで？　とばかりに牛尾四郎右衛門と山田左兵衛は額を突きだす。

「殿の口出しを封じるよう、ここらで我らも、覚悟を決めなければならない時期にきていると思うのですがいかが思し召さるる？」

「覚悟を決めるのはよろしいが、なにをしようといわれるのです」

と牛尾四郎右衛門。

「殿に女狂いをさせるのです」

「女狂い？」

「さよう」

「あの堅物が女狂いなど、それはありえない」

山田左兵衛が笑って首を振る。松本頼母も打ち消すように首を振って、

「こればかりは試してみなければ分かりませぬ。殿は女子といえば、亡き奥方と少数の側女しかご存じない。奥方は承知のように蒲柳の質で、ご関係はないにひとしかった。側女は、子作りのために仕方なく近づけておられる。したがって殿は、本当の女の味というものを知っておられない。だから、吉原や深川の、床上手の手練手管にかかると、案外容易くのめり込まれると思うのです」

「そんなものですかなあ」

牛尾四郎右衛門が半信半疑で相槌を打つ。

「ですがいきなり吉原になどというと殿も警戒される。幸い深川に下屋敷がございます。深川は官許の遊里ではなく岡場所ですが、下屋敷に近い門前仲町には、吉原の廓に劣らない茶屋が三軒あって、磨き上げた粒揃いを抱えているとのこと。深川の茶屋なら、もののついでという格好でお誘いしやすい」

「誰が誘うのです？」

「家中に人は少なくありません。遊び好きの幇間のような男も、探せばいるはず。それらにいい含めて殿の御側近くに送り込むのです」

「しかし、うまくいったとして、あのようなご気性です。仕置に嘴を挟まれなくなるという保証はない」

「それがあるのです」
松本頼母は自信たっぷりにいう。
「と申されると？」
「ここまで打ち明けたからには我らは同志です。けっして他言しないと誓われますか」
「もちろん」
「とかく密事は漏れやすい。水野三郎右衛門、拝郷源左衛門の両御家老はもとより、同席である国元の当番所年寄にも他言は無用ですぞ」
「念を押されるまでもない。なんなら金打をいたそう」
松本頼母も山田左兵衛もうなずき、三人はそれぞれ脇差に手をかけて金打した。
「では申し上げます」
松本頼母はそういって声を落とした。
「見て見ぬ振りをしていて、機を見て放蕩がすぎるとお咎めし、隠居を強いてなおかつ座敷牢にお入りいただく」
「なんと？」
牛尾四郎右衛門と山田左兵衛は目を丸くする。
「なに、さして難しいことではありません。若くてうぶな男が、誰の掣肘も受けずに女遊びにうつつを抜かせば、必ず度が過ぎるようになります。そこをすかさず御用とやるのです。問題は公儀にどう取り繕うかということと、後釜にどなたをお迎えするかで、幕閣のしかるべきご老中にあらかじめ手をまわし、かつどなたをお迎えするかを前もって決めておかなければなりません。ご貴殿らは江戸詰めが長い。そこら辺りはご貴殿らに十分に働いていただかなければなりませぬ」
「すると？」
とそこではじめて牛尾四郎右衛門と山田左兵衛は気づいた。
「貴殿はそういう策略があって、再勤を願うというのを名目に江戸に出てまいられ、いまにいたるも長居をしておられた？」
「いかにも」
といって松本頼母は口元を引き締めた。

七

忠辰は、「心附候儀共相談之書付」と題した書付を門閥重役に渡したあと、くどくど念を押したりすることなく、門閥重役とそのうえ矛を交えることもなく、参勤の日を迎え、六月二十八日に岡崎を立ち、七月十四日に江戸に着いた。
とはいえ、門閥重役に対する憤懣が消えたわけではない。とりわけ張本人の水野三郎

右衛門への怒りは腹の中でふつふつと煮えたぎっている。

そこへ三郎右衛門から嘆願書が送られてきて、こうあった。

「病気につき隠居いたし、伜治部右衛門へ家督仰せつけられ候様相願い候」

忠辰はこれを待っていた。

前年正月、いろいろあって忠辰は三郎右衛門の屋敷まで足を運び、引き続き当番所勤を務めてくれるようにと頭を下げ、三郎右衛門は「承知つかまつりました」と応じた。ならばいましばらくは務めるのが筋であるが、それはさておき、同時に伜治部右衛門に見習いを命じた。それから間もなく、治部右衛門は「病身」だからと「見習い御免」を願い出て、聞き届けた。

その後治部右衛門は、病身のはずなのにごくふつうに出歩いていた。それについて三郎右衛門からなんの釈明もなかった。そして、治部右衛門に家督させたいといってきた。

これは、上を憚らぬ不埒千万の致し方、申し様である。

忠辰もそこらがいま一つ大人になりきれていなかった。こう感情を剝きだしにした。

三郎右衛門の水野家は筋目柄、格別容赦をするが、それでもと、三郎右衛門に「御役儀御免隠居慎」、治部右衛門に「御合力米召上、急度慎」を申し渡し、家督は次男澄之丞に相続させると岡崎に申し送った。

「どうです。申したとおりでしたろう」

予測は的中した。松本頼母は、牛尾四郎右衛門と山田左兵衛とに勝ち誇るようにいった。

「それで首尾のほどは？」

牛尾四郎右衛門が聞く。

「なかなか誘いに乗られぬのですが、ご家老水野三郎右衛門殿に去年の意趣を晴らされたいまが、あるいは心に隙が生じるときかもしれません。殿の御側に送り込んでいる、嶋祖右衛門や嶋田周益に、事を急げと命じておきます」

三人がそう密談していて間もなくだった。忠辰は、

「それほど申すのなら」

と嶋祖右衛門や嶋田周益の誘いに乗って深川に向かい、いったん下屋敷に落ち着き、火点しごろ門前仲町の茶屋に上がった。

忠辰は、これも世間を知るための方便くらいに軽く考えていた。己に限ってのめり込むなどありうるはずがないと、自分に自信を持っていた。

だが若い。金もある。若殿様でもある。そこいらの若旦那など及びもつかぬ、下へもおかぬもてなしに、たちまち虜になった。はじめて知る歓楽の世界に嵌まり、溺れた。

松本頼母の謀は見事に決まった。今日は深川、明日は吉原と家中の目を盗んでは、遊里通いにうつつをぬかすようになった。

二十七歳の春のことで、やがて御暇で岡崎に帰る時期を迎えた。忠辰は七月五日に江戸を立ち、十七日に岡崎に着いた。

十九の歳から数えると、五度目のお国入りで、これまでは門閥重役との戦いの連続だった。だがもうそのことは、どうでもよくなっていた。

頭に浮かぶのは、吉原や深川での歓楽の日々だ。それにつけても、と毎日のように、吉原や深川での楽しい、身も心もとろけるような日々が思い出された。馴染みの女も一人や二人ではなかった。あの女にも会いたい、この女にも会いたい、羽根があれば飛んで帰りたいと、思いを江戸の空に焦がした。

思い余って忠辰は、江戸の年寄、松本頼母らにこう書状を送った。

「病により参府して保養したいと、御公儀に願いでてもらえないものか」

大名にしろ旗本にしろ、病のための保養を申し立てるときは、たいがい熱海や伊香保など温泉地での保養遊楽を目的にしていた。

忠辰の場合は逆だ。病だから保養に江戸へというのである。滑稽きわまりない理由で、

「いよいよ、毒が回ったようでござる」

松本頼母と、牛尾四郎右衛門、山田左兵衛は額を寄せ集めてほくそ笑んだ。

すでに彼らは、養子願いを即座に聞き届けていただけるよう、せっせと幕府の老中本多伯耆守（ほうきのかみ）に取り入っていた。一方で養子を物色し、一族ではあるが初代忠守の次男の流

れという、血の遠い旗本、水野平十郎の倅長十郎に白羽の矢を立て、それとなく話も通じていた。

そうとは知らず、願いを聞き届けられた忠辰は、いつもの参勤とは違って十二月の十七日という日に岡崎を立ち、二十七日に江戸に入った。

年末年始はさすがに遠慮していた。だが、松が取れると心ここにあらずで、家中の目を盗むように、ふたたび、今日は深川、明日は吉原と、足繁く遊里に通うようになった。そして、ときには気に入った女を身請けした。

三味線弾き上がりの実母は健在で、突然、狂うように遊びはじめた忠辰の身を案じ、部屋へ呼んで意見した。

しかとは分からぬが、忠辰の変身に、なにやらおかしげな陰謀が張り巡らされていると肌で感じ、

「ご用心なされませ」

と注意もうながした。

しかし、いまや遊冶郎（ゆうやろう）となり果てた忠辰は、馬耳東風と聞き流す。

主君といえども、使える金は決まっている。湯水のごとくには使えない。なのに忠辰はいつしか、公金にまで手をつけるようになった。

かくなるうえは死んでお諫めしなければと、実母は自害した。忠辰が二十八歳になっ

た宝暦元年（一七五一）九月十四日のことである。

忠辰は急を聞いてかけつけたが、それほど悲しむでもなく、型どおり法要をすませて五、六日も経つと、身請けした女や女奉公人と、誰憚ることなく遊び戯れはじめた。実母の自害は犬死に終わった。

順性院と諡された実母の三七日には、浅草にあった菩提寺妙高寺に参ったものの、お気に入りの嶋祖右衛門、嶋田周益、また付き従ってきた老女らもひきつれて吉原に繰り込んだ。

その後も吉原には足繁く通い、実母順性院の中陰（四十九日）にも仏参帰りに吉原で遊んだ。

松本頼母らは、とうに国許の門閥重役の許可をとりつけ、老中の懐柔、養子の手配など支度は万端整えていた。

忠辰はそれらにまるで気づかず、十月十二日には、またまた吉原角町中万字屋の山茶花という遊女を七百両で身請けすることにして、嶋祖右衛門や嶋田周益に請印を押させた。

松本頼母らには、いまや忠辰廃立の十分な名目が立った。

忠辰は、このところ浅草妙高寺にある実母順性院の墓参を理由に吉原へ足を運んでいた。

十一月十一日の明け六つだった。この日も朝から吉原に繰りだすつもりで、奥から表

に向かった。用人が、

「御居間へ」

と呼びかける。

「何用だ？」

忠辰は足を止めて聞いた。

「御年寄方がお話がござりますればと控えておられます」

「さようか」

忠辰は居間に入った。

松本頼母、牛尾四郎右衛門、山田左兵衛の三人が控えていた。

「何か用か？」

忠辰は声をかけた。

「ここへおすわりくださいませ」

松本頼母が声をかけた。

「これから墓参にまいる。またにしよう」

「なりませぬ」

三人は声をそろえる。

「年寄の分際で何を申す」

忠辰は無視して表へでようとした。頼母はむんずと袴の裾を摑んでいった。

「御身持ち甚だよろしからず。順性院様の御遺言もござりますことゆえ、しばらく御謹慎遊ばさるべし」

「馬鹿げたことを」

忠辰は裾を払った。

「それ！」

頼母が声をかけた。

唐紙ががらりと開き、待機していた屈強の者、目付松村半六、小姓井上丹次、入江十蔵がどかどかと入ってきて忠辰を取り囲み、頼母が大小を取り上げた。

「なにをいたす！」

顳顬に青筋を立てる忠辰を、松本半六らが両脇から腕を挟みつけるようにして、薄暗い一角に引きずる。そこには忠辰が知らぬ間に座敷牢が作られていて、忠辰を押し込め、外からガチャリと鍵をかけてしまった。

松本頼母らはかねて取り入っていた老中本多伯耆守の用人に、「いよいよ決行しました」と打ち明けた。ややあって用人から、「各様（各老中）にもご挨拶するように」と指示があった。老中全員に賄賂を配って回るようにと。松本頼母らは指示どおり賄賂を配って回った。

そのうえで十二月十八日に、同姓水野平十郎の倅長十郎を養子にと願いでて許され、翌年宝暦二年三月二十二日に、（忠辰が）病により、家督を養子の忠任（長十郎）にと願い出ておなじく許された。

忠辰はおなじ三月二十二日、赤坂の別邸の座敷牢に移され、四カ月後の八月十六日、まるで自害するように憤死した。

この三十年後、家老水野三郎右衛門の次の代の三郎右衛門が、忠任に、歴代の遺事逸事を記した上書を提出した。その上書に忠辰の乱行を認めているのだが、こんな狂歌が謡われたと付記している。

監物（忠辰）は手をばださずに親ころし
　家老年寄主を殺すなり

家中や国許で、そうひそひそ囁く者がいたとすれば、門閥重役にとって忠辰に長生きされては迷惑なことだから、あるいは一服盛ったのかもしれない。

塩谷宕陰は、さすがにそれに関する記述は控えて、「丕揚録」の忠辰の項をこう締め括っている。

「公幽室ニ入玉ヒテ後左程ニアシキ事ニ候ハバ、何故一言諫メクレザルヤト仰セラレ、憾ミヲ含テ其翌年クレサセ玉フ、百年ノ下慨嘆スルモ余リアル御事也」

解　説——人間的な、あまりに人間的な破滅者列伝

島内景二

あおぎ見る偉業を達成した英雄たちの列伝は、歴史小説作家の得意とするテーマである。また、想像を絶する怪物や悪漢たちの列伝も少なくはない。彼らは、凡人の体験できぬ前人未到の人生を疾走する。

ところが、とてつもない偉業には縁がない一方で、大それた悪事に手を染めることもできないのが、わたしたち凡人である。すなわち、それが「人間」という存在の本質なのだ。そういう人々を暖かく包み込む「市井物（しせいもの）」というジャンルも、時代小説の市民権を獲得している。ただし、市井物の場合には、ごく普通の人間が転落する悪の罠よりも、ほのぼのとした人生の哀歓を描く方に力点がある。

佐藤雅美という文学者は、英雄でもなく、化け物でもなく、ひたすら「人間」そのものを凝視しつづける。そして、どこにでもいる普通の人間が、心の中で膨張してゆく欲望に振り回されて、みずから破滅してゆくプロセスを冷徹に観察するのだ。これまでの文学史で試みられてこなかった、新しいタイプの「ザ・デストラクティブ・マン」の物

語の誕生である。それが積み重なって、あざやかな破滅者たちの列伝となる。

歴史時代小説の愛読者の多くは、江戸時代の末期に「なつかしい郷愁」を感じていることだろう。そしてここが、佐藤雅美が最も得意としている時代でもある。「文化文政」と呼ばれる時代に、人々の暮らしは最高潮に爛熟した。よかれあしかれ、ここで煮詰まったのである。後に「大御所」と呼ばれた十一代将軍の徳川家斉の時代。天下の経済活動から庶民の衣食住まで、すべての分野にわたって「江戸情緒」が浸透し、一つの文明が飽和状態に達した。浦賀に黒船が出現するわずか数十年前のことである。

この魅力的な時代を背景として、これまでにも時代小説の名作群がいくつも書かれてきた。遠山金四郎も、『鬼平犯科帳』の長谷川平蔵も、そして『御宿かわせみ』の神林東吾も、この時代の前後を代表するヒーローたちである。特色あるキャラクターが揃っていて、壮観である。佐藤は、この時代小説の沃野にいくつもの新機軸を打ち出し、新しい領域を開拓してのけた。それが経済活動や司法制度への注目であり、「人間、この愚かなるもの」の徹底した解剖である。

佐藤雅美の『槍持ち佐五平の首』は、八つの短編から成る。同じ登場人物がしばしば複数の短編にまたがって登場するので、この時代の人間関係のネットワークが巨大な「人間喜劇」あるいは「人間悲劇」として読者には理解できる。

この短編集は、ある者にとっては愚者の楽園であり、ある者にとっては愚者の地獄で

もあった「武家社会」の実態を、興味深くあぶりだす。荒唐無稽なフィクションではなく、裁判記録や記録類などに基づき、「史料」を深く読み込んだうえでの創作である。綿密な時代考証に支えられながら、あっと驚く小説家の想像力で史料の隙間が埋められたりする。そこが、堅いばかりの時代考証随筆との違いである。

佐藤雅美の小説では、描かれる人間たちが生きている。怒り、憎悪、嫉妬、軽蔑、羨望、名誉欲、金銭欲。人間的な、あまりに人間的な感情に翻弄されて破滅した愚者たち。彼らの列伝が、『槍持ち佐五平の首』である。

この列伝を読んだ読者は、「懐かしい江戸情緒」の裏面に潜むすさまじい地獄絵を知ることだろう。そして、いつの世にも、人と人との交わりが修羅場だった事実に愕然とするだろう。けれども、ある者はふてぶてしく、ある者は潔く、この生きにくい時代を生き抜いた。人間とは何と逞しく、しぶとい存在であることか。

話がやや逸れるかもしれないが、昔話に、「愚か村」話と呼ばれる一ジャンルがある。かつて、どこそこの村に、こんなに途方もない愚か者（痴れ者、烏滸の者）がいたのだ、という馬鹿馬鹿しさをテーマとする昔話である。愚かなのは村人だけでなく、リーダーの名主もだったりする。この「愚か村」の構成者を農民から武士へと転換すると、「愚か城」話とでも称すべき武家社会の風刺となる。「若殿」ならぬ「馬鹿殿」を笑いのめすコメディなどが、その典型である。これは、国家の最高権力者を戯画化する風刺漫画の伝統としても、今に続いている。

義理と人情に縛られた武家社会の掟を表向きは賛美しているような井原西鶴の『武家義理物語』も、つまらない「面目」にこだわって大切な命を軽んじる「愚か武家」たちの集団を冷笑するものだろう。それが、元禄期のことだった。この愚かな武家社会の構造は改善されるどころか、救いがたいほどに煮詰まって、幕末期を迎えた。下は旗本・御家人から、上は大名まで、よくぞ揃いも揃ったり。ここまで、小人や愚者たちが居並ぶと、読者は最初に大いなる怒りを感じるかもしれない。そのうちに、「こんな奴らには、かなわないな」という、あきらめにも似た失笑が口から漏れることだろう。

「こんな時代に生まれなくてよかった」と、しみじみ思わされる。福沢諭吉は、身分制度でがんじがらめとなった封建社会を、「親の仇」だと罵ったという。その気持ちが、よくわかる。けれども、二十一世紀の学校も職場も、それほど「愚か村」システムから自由になったわけでもないのだ。愚か者の支配は今でも続いているし、同僚にも部下にも愚か者の具体例には不足しない。ことによったら、この自分自身ですら、別の人の眼には「究極の愚か者」として映っているかもしれないのだ！

恐るべし、「愚か者」の連鎖。そして、権威を笠に着る愚か者のトップを「裸の王様」として暴き立てる小説家の筆もまた、恐るべし。ただしこれが成功するためには、自分

を「聖人君子」の立場に置きたいという誘惑から作者が自由にならねばならない。「神の視点」を良心的な作者が代弁する明治・大正の小説スタイルでは、愚か者たちは退治できない。そうではなくて、作者自らが「愚か者」を装うことで、最初に自らを斬り、返す刀で「真の愚者」を斬って捨てるしかない。この捨て身の覚悟がなければ、失敗する。これを実行できるのが、佐藤雅美という作家の魅力であり、剛さである。

毒をもって毒を制す。悪をもって悪を斬る。

これから、収録作品を順に見てゆこう。

「小南市郎兵衛の不覚」。愚かな武士同士が、くだらない密通事件をきっかけとして、家族や一族を巻き込んで争い、つまらない意地を張り合う。何とか収束しかけた時点で、戸塚備前守という、小才のきく男（すなわち、最大の愚か者）が乱入する。彼もまた、けちな意地を張る。当事者たちから見ると余計なお世話の介入をして、双方に不満の残る裁きをつけて、自分だけの手柄とする。ところが、その戸塚も失脚する。読者はほっとするが、彼は自分の馬鹿さ加減に気づいたかどうか。

作者は、当事者たちに申し渡された裁きの原文を平易な現代語訳に置き換えて、当時の裁判史料を読むコツと愉しさを読者に教えてくれる。なお、この作品に名前の出る成嶋（島）邦之丞司直は、『徳川実紀』の編纂に従事した幕府奥儒者。幕末・明治にかけ

ての大奇人にして大粋人・成嶋（島）柳北の祖父である。

「槍持ち佐五平の首」。殿様の参勤交代のスケジュールをめぐって、二十三万石の会津藩の宿割役人が、六万石の相馬藩の宿割役人に横槍を入れる。双方の「面目」が正面衝突する。不当にいじめられた相馬藩の宿割役人の心境は、次のように説明されている。

ふつうならこんな場合、堪えがたきを堪えて無事これ太平、平穏におさめるのが御家のため、また自身のためである。だがものには限度があり、人には意地がある。限度を踏み外すとどんな目に遭うか。思いあがった会津の宿割役人に思い知らせてやらなければならない。

一人の愚か者のために、多くの人の血が無駄に流された。

「ヨフトホヘル」。蝦夷地・樺太の探検家でもあり、書誌学者としても著名な近藤重蔵の酔うと泣る「愚か者」ぶりと「小人」ぶりを余すところなく活写する力作である。抑えきれない自己顕示欲と金銭欲。彼がここまで堕落した一因として、自分の有能さが評価されずに冷や飯を食い続けているという被害者意識（現代のサラリーマンの愚痴とも通じる）があったとされるが、作者の近藤重蔵父子を突き放す視点は実に冷静で冷徹である。

近藤の強欲の被害者となった農民・半之助もまた、悪徳代官への賄賂をけちってすべてをなくした愚か者。概して、愚か者の特徴は、しつこいという点である。だから、愚

か者同士の戦いは、執拗なまでの意地と面目の張り合いとなる。これが、非常識な暴力と流血の発火点となる。「無礼討ち」を主張すれば殺人が正当化されると考えた近藤は、「小知」の持ち主でしかない。殺人を実行したこれまた馬鹿息子の富蔵は、八丈島に配流された。

小才があるばかりに思い上がった愚か者は、しばしば「計算違い」という落とし穴に転落する。このあたり、どことなく「刑事コロンボ」の犯人像を思わせる。

「重怨思の祐定」。松平外記という人物が陰湿ないじめに耐えきれなくなって怒りを爆発させた顚末を描く。将軍世子（世継ぎ）の住まう江戸城西丸で、西丸御書院御番士・松平外記が、同僚三人を殺害し、二人に手傷を負わせた大事件である。この事件は、佐藤雅美の桑山十兵衛シリーズの第三作『劇盗二代目日本左衛門』（文春文庫）でも、大切な伏線となって使われている。加害者の松平外記を「愚か者」と断定するには情状酌量の余地があり、作者は外記に対していささか同情的である。「槍持ち佐五平の首」と同様、いじめを行った側の愚かさを告発することに、力点があるのだろう。

「身から出た錆」は、エッセイ風の好短編。こういうスタイルを、「小品」と呼ぶのだろうか。今度は、刑事コロンボの加害者ではなく、探偵好きのあまりに「コロンボ」になりそこねた矢部駿河守定謙という愚か者の話である。「幕末の三秀」と称えられることもある矢部が実際には「愚か者」だったことがあぶり出される。

なおかつ、時代考証の第一人者だった三田村鳶魚と、作者佐藤雅美の知恵比べの様相すら呈していて、読者の知的好奇心を満足させてくれる。天下に恐いものなしの鳶魚先生の考証の不備を衝く箇所など、思わず膝を打ってしまう痛快さだ。考証の杜撰さを鳶魚に一つ一つ列挙されて罵倒された時代小説の大家たちも、草葉の陰で「佐藤雅美よ、よくぞ言ってくれた」と涙を流して喜んでいるかもしれない。

ここまでの五編で、作者の「愚か話」の手法は、完成したと言ってよい。それを受けて、いよいよ残りの三編「見栄は一日恥は百日」「色でしくじりゃ井上様よ」「何故一言諫メクレザルヤ」では、「愚か大名」をテーマとする。いわゆる「馬鹿殿」のカテゴリーである。

「見栄は一日恥は百日」でやり玉に挙がる愚か大名は、出世欲と名誉欲に取り憑かれて、乗る資格のない轅（板輿のこと）に息子を乗せてしまった津軽寧親。やっちまえ、という彼の無謀な決断が暗転の原因となったのは、「ヨフトホヘル」で試した破滅導入の手法である。また、この僭越の沙汰を聞きつけた老中の一人・青山下野守が、第三者ながら勝手な思惑で介入してきて話をこんがらかせるというのは、「小南市郎兵衛の不覚」でその有効性を確認していた方法だった。作者は南部藩と津軽藩の争いの歴史までも綿密に書き込み、津軽藩の声望を失墜させた一人の大名の「欲のかきすぎ」を痛烈にあてこする。

「色でしくじりゃ井上様よ」は、農民の女房と色事に及んで、北方の痩せ地に国替えさせられた浜松六万石の井上河内守正甫の色欲を描く快作。ここでも、権力欲に取り憑かれた水野忠邦が、突如として場内乱入して来るという構図。だが、この井上河内守という男、ただの愚か者ではなく、とてつもない強運の愚か者だった。水野忠邦の天保の改革の失敗も、失脚も、見届けた。八十四歳まで長生きした井上河内守に対して、作者も「長生きはしてみるものである」と、いささか感心したような素振りを見せる。因果は巡り巡って、権力は二転三転した。井上河内守が情欲によって失った浜松藩に、子孫がめでたく戻ってこれたのだ。「悪運の強い愚か者列伝」の筆頭には、この井上河内守がふさわしかろう。

最後に据えられた「何故一言諫メクレザルヤ」も、佳編。史料の紙背を読み込むことで、作者は岡崎水野家の八代目・水野忠辰の「青年大名の理想と夢」を発掘する。忠辰はわずか二十九歳で、グルになった愚かな家臣団に陥れられ憤死したのである。だが、作者は、忠辰の側にも「いま一つ大人になりきれていなかった」と書くことを忘れない。聖人とか真の名君になりきれなかった聖人候補者もまた、歴史の目から眺めれば「愚か者」のそしりを免れることはできない。それが、歴史というものの公平さと残酷さだ。

骨董品に本物と贋物があるように、人間にも本物と贋物がある。短編集『槍持ち佐五平の首』は、人間くさい愚か者の列伝をひたすら書き綴る。その遠景に、大御所・徳川家斉、老中・水野出羽守忠成、その家老・土方縫殿助などの「大人の風格」を帯びた存在がいる。また、藤田東湖・川路聖謨・大田南畝・大塩平八郎など、この時代を彩った「名物男」たちも点描され、時代の全体像が浮かび上がってくる。

佐藤雅美の作品は、単純な勧善懲悪ではない。人間性の悪や愚かしさを客観的に観察する手法と文体を確立している。それが、彼の歴史時代小説を「本物」としているのではないか。

（国文学者・文芸評論家）

文春文庫

©Masayoshi Sato 2004

槍持ち佐五平の首

定価はカバーに表示してあります

2004年4月10日　第1刷

著者　佐藤雅美

発行者　白川浩司

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23　〒102-8008
TEL 03・3265・1211
文藝春秋ホームページ　http://www.bunshun.co.jp
文春ウェブ文庫　http://www.bunshunplaza.com

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN4-16-762708-6

単行本　二〇〇一年五月　実業之日本社刊

泡坂妻夫
自来也小町 宝引の辰 捕者帳

蛙一匹百両の絵が消えた……。あれよあれよと値の上がる吉祥画を専門に狙う怪盗・自来也小町。珍事件に蠢く影は？ 辰親分の胸のすく名推理！ 妙趣あふれる名品七篇。（細谷正充）

あ-13-9

泡坂妻夫
凧をみる武士 宝引の辰 捕者帳

小判を背負った凧の謎……表題作ほか、「とんぼ玉異聞」「雛の宵宮」「幽霊大夫」の全四篇を収録。江戸情緒溢れる事件に、お馴染み神田千両町の辰親分が挑む。（長谷部史親）

あ-13-10

泡坂妻夫
朱房の鷹 宝引の辰 捕者帳

将軍様の鷹が殺された。ご公儀の威光を笠にきた鷹匠に対する庶民の恨みと思いきや……。表題作ほか「笠秋草」「面影蛍」など全八篇。江戸情緒満載の人気シリーズ第四弾！（寺田博）

あ-13-11

浅田次郎
壬生義士伝（上下）

「死にたぐはねえから、人を斬るのす」――生活苦から南部藩を脱藩し、壬生浪と呼ばれた新選組の中にあって人の道を見失わなかった吉村貫一郎。その生涯と妻子の数奇な運命。（久世光彦）

あ-39-2

井上ひさし
手鎖心中

他人を笑わせ、他人に笑われ、そのために死ぬほど絵草紙作者になりたいと願っている若旦那のありようを洒落のめした直木賞受賞作に加え、「江戸の夕立ち」を収録。（百目鬼恭三郎）

い-3-3

井上ひさし
おれたちと大砲

おれたち五人は黒手組。といっても、みんなぼうふらのような存在だが、時は幕末、将軍さまのピンチだとばかり、恐るべき大計画をひっさげて立ち上がったのだ。（百目鬼恭三郎）

い-3-5

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

井上ひさし
江戸紫絵巻源氏（上下）

神田の質屋の跡取り息子・源次はさるお大名と遊女桐壺の一粒ダネ。ひょんなことから奥州六十万石館家の殿様に成り上がった源次の波瀾万丈、酒池肉林、抱腹絶倒の半生記。（駒田信二）

い-3-12

井上ひさし
イヌの仇討

本所吉良屋敷内の炭部屋、赤穂浪士の討手をのがれ、身をひそめた上野介の隠し砦。かつて書かれざる最後の一刻余をえがくこれぞ井上戯曲の真骨頂というべき奇想あふれる忠臣蔵秘話！

い-3-17

池宮彰一郎
受城異聞記

幕命により厳寒の北アルプスを越えて高山陣屋と城の接収に向かった加賀大聖寺藩士たちの運命は？ 表題作ほか、「絶塵の将」「けだもの」など絶品の時代小説五篇収録。（菊池仁）

い-42-1

伊藤三男
小説・徳川三代
家康・秀忠・家光をめぐる人々

本多正信・正純親子、大久保忠隣、春日局といった将軍の重臣や乳母たちの権力をめぐる闘いに注目し、現代の企業小説にも通じる感覚で、人間の有為転変の儚さを描く書き下ろし長篇。

い-43-1

宇江佐真理
幻の声
髪結い伊三次捕物余話

町方同心の下で働く伊三次は、事件を追って今日も東奔西走。江戸庶民のきめ細かな人間関係を描き、現代を感じさせる珠玉の五話。選考委員絶賛のオール讀物新人賞受賞作。（常盤新平）

う-11-1

宇江佐真理
紫紺のつばめ
髪結い伊三次捕物余話

伊勢屋忠兵衛からの申し出に揺れるお文。伊三次との心の隙間は広がるばかり。そんな時、伊三次に殺しの嫌疑が。法では裁けぬ人の心を描く人気捕物帖、波瀾の第二弾。（中村橋之助）

う-11-2

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

宇江佐真理
さらば深川
髪結い伊三次捕物余話

伊三次と縒りを戻したお文に執着する伊勢屋忠兵衛。袖にされた意趣返しが事件を招き、お文の家は炎上した——。断ち切れぬしがらみ、名のりあえない母娘の切なさ……急展開の第三弾。
う-11-3

宇江佐真理
余寒の雪

女剣士として身を立てることを夢見る知佐は、江戸で何かを見つけることができるのか。武士から町人まで人情を細やかに描く七篇。中山義秀文学賞受賞の傑作時代小説集。（中村彰彦）
う-11-4

乙川優三郎
椿山

城下の子弟が集う私塾で知った身分の不条理、恋と友情の軋み。下級武士の子・才次郎は、ある決意を固める。生きることの切なさを清例に描く表題作など、珠玉の四篇を収録。（縄田一男）
お-27-1

北原亞以子
恋忘れ草

女浄瑠璃、手習いの師匠、料理屋の女将など江戸の町を彩るキャリアウーマンたちの心模様を描く直木賞受賞作。「恋風」「男の八分」「後姿」「恋知らず」「萌えいずる時」他一篇。（藤田昌司）
き-16-1

北原亞以子
昨日の恋
爽太捕物帖

鰻屋「十三川」の若旦那爽太には、同心朝田主馬から十手を預かるという別の顔があった。表題作のほか「おろくの恋」「雲間の出来事」「残り火」「終りのない階段」など全七篇。（細谷正充）
き-16-2

北原亞以子
埋もれ火

去っていった男、残された女。維新後も龍馬の妻として生きたお龍。三味線を抱いて高杉晋作の墓守を続けるうの。幕末の世を駆け抜けて行った志士を愛した女たちの胸に燻る恋心の行く末。
き-16-4

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

文春文庫
時代小説

黒岩重吾
剣は湖都に燃ゆ
壬申の乱秘話

古代史最大の戦乱、壬申の乱に巻き込まれながらも、おのれの信じる道に従い、必死に生き、愛し、死んでいった男と女を、古代史小説の第一人者がいきいきと描く連作短篇集。（倉本四郎）
く-1-29

黒岩重吾
影刀
壬申の乱ロマン

大海人皇子に一命を救われた百済人・鋭飛は敵対する近江朝の間者を殺戮、勇名をはせるが……。歴史に翻弄されつつも信じる道を歩む武人、女人、無告の民。慟哭のドラマ。（郷原宏）
く-1-32

黒岩重吾
斑鳩宮始末記

調首子麻呂は百済からの渡来系調氏の子孫。廐戸皇太子（聖徳太子）の命を受け、秦造河勝らと奈良の都の犯罪捜査にのり出す。古代ロマン・エンターテインメントの決定版！（重里徹也）
く-1-35

久世光彦
逃げ水半次無用帖

幻の母よ、何処？　過去を引きずり、色気と憂いに満ちた絵馬師・逃げ水半次が、岡っ引きの娘のお小夜と挑む難事件はどれも哀しく、美しい。江戸情緒あふれる傑作捕物帖！（皆川博子）
く-17-3

五味康祐
真田残党奔る

大坂夏の陣で敗れた豊臣の家臣たちは地にもぐり、徳川の世は安泰かと見えたが、突如現れたのが真田家の遺臣十勇士。猿飛佐助、くノ一霧隠才蔵らは何を企むのか。（真鍋呉夫）
こ-9-4

五味康祐
陽気な殿様

姫路十五万石の城主榊原忠次の御曹司隼之介が、民情視察を兼ねて国元へ赴くことになった。大工八五郎と韋駄天の三次らを供につれ、各地で遭遇する剣難女難をいかに乗切るか。
こ-9-5

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

五味康祐
一刀斎忠臣蔵異聞

史実としての討入りを探る表題作ほか「お手前が不憫じゃ」「雪の刺客」「剣術陽炎」「兵法流浪」「曙に野鴉は鳴いた」「上意討ち」「高松城陥つ」の、武芸に生きる人々を描いた全八篇。

こ-9-9

五味康祐
二人の武蔵（上下）

剣豪・武蔵がなんと二人存在していた!? 岡本武蔵と平田武蔵。共に剣の道を進み、京で、江戸で複雑に交錯する。果して巌流島で佐々木小次郎を倒すのはどちらの武蔵か。（縄田一男）

こ-9-10

笹沢左保
宮本武蔵（全八冊）

巌流島の決闘以後、武蔵はどう自己変革をとげていったのか。兵法者たちとの壮絶な立ち合いの数々を辿り、二天一流の開祖たる剣聖の生涯を全く新しい視点から綴る大河時代小説の雄篇。

さ-6-14

佐藤雅美
八州廻り桑山十兵衛

関八州の悪党者を取り締まる八州廻りの桑山十兵衛は男やもめ。事件を追って奔走するなか、十兵衛が行きついた、亡き妻の意外な密通相手、娘の真の父親とは——。（寺田博）

さ-28-1

佐藤雅美
殺された道案内
八州廻り桑山十兵衛

お役目とはいえ、今日も桑山十兵衛は関八州を駆け巡る。尽きることのない悪党、難事件……。大好評第二弾は、剣豪・千葉周作、初恋の女性が、捕り物の背後で十兵衛の心を掻きみだす。

さ-28-3

佐藤雅美
縮尻鏡三郎（しくじり）（上下）

有能であるが故に勘定方から仮牢兼調所でもある大番屋の元締に左遷された鏡三郎が、侍から町人、果ては将軍から持ち込まれる難問を次々と解決。江戸の暮らしぶりを情感豊かに描く。

さ-28-5

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

佐藤雅美
劇盗二代目日本左衛門
八州廻り桑山十兵衛

関東取締出役、通称八州廻りの桑山十兵衛は悪党どもを追いかける日々。そんなある日、昔の盗賊日本左衛門の二代目が関東各地を荒しまわる。十兵衛は捕えられるのか？（島内景二）

さ-28-8

柴田錬三郎
柴錬立川文庫（一）
猿飛佐助
真田十勇士1

猿飛佐助は武田勝頼の落し子だった。戸沢白雲斎に育てられ、忍者として真田幸村の家来となり、日本中を股にかけての大活躍。美女あり豪傑あり、決闘あり淫行ありの大伝奇小説。

し-3-1

柴田錬三郎
柴錬立川文庫（二）
真田幸村
真田十勇士2

家康にとって最も恐い敵は幸村だ。佐助をはじめ霧隠才蔵、三好清海入道たちが奇想天外な働きで徳川方を苦しめる。後藤又兵衛、木村重成も登場して、大坂夏の陣へと波乱は高まる。

し-3-2

柴田錬三郎
徳川三国志

駿河大納言忠長、由比正雪、根来衆をあやつり、三代将軍家光を倒そうとする紀伊大納言頼宣と、伊賀忍者を使って必死に阻止する松平知恵伊豆守。壮麗なる寛永時代活劇。（磯貝勝太郎）

し-3-12

杉本章子
残映

築地の旅籠で元士族、板前、飲み屋女将という奇妙な三人組の死体が発見された。元旗本と新聞社の探訪員が犯人探しに乗り出す。時代の波に翻弄される人々の哀歓を描く長篇。（由里幸子）

す-6-6

杉本章子
おすず
信太郎人情始末帖

おすずという許嫁がありながら、子持ちの後家と深みにはまり呉服太物店を勘当された信太郎。その後賭に辱められ自害したおすずの無念を晴らすため、信太郎は賊を追う。（細谷正充）

す-6-7

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

田辺聖子
王朝懶夢譚（おうちょうらんむたん）

内大臣の姫君・月冴に恋と冒険の季節が訪れた。小天狗の外道丸の助けを借り、医師の麻刈と語らい、東国男の晴季を誘惑し、美貌の弾正宮にときめき……ついに姫が手にした恋の結末は？

た-3-39

高橋克彦
だまし絵歌麿

江戸を大波が襲った夜、当代きっての絵師・歌麿の女房が殺された。事件の真相を追う同心・仙波の前に明らかとなる黒幕の正体と、あまりに意外な歌麿のもう一つの顔とは？（寺田博）

た-26-7

高橋三千綱
剣聖一心斎

千葉周作が、二宮尊徳が、遠山金四郎までが、ことごとく心服したという驚くべき剣客、中村一心斎。しかし、本人は剣の道など何処吹く風と、今日も武田信玄の埋蔵金探しに、東奔西走!?

た-34-2

高橋義夫
狼奉行

出羽の雪深き山里に赴任した青年は深い失意の日々を送るが、策略をかわし苦難に耐え、逞しい武士に変貌を遂げていく。感動と共感の直木賞作品。「厦門（アモイ）心中」「小姓町の噂」併録。（赤木駿介）

た-36-1

高橋義夫
秘宝月山丸

山形の山村に移住した翻訳家が耳にした名刀の噂。三百年語られてきた伝説のヴェールを新参者の私がめくってよいのだろうか。現代を照射するフォークロア小説の名品。（中沢新一）

た-36-2

高橋義夫
風魔山嶽党

時は秀吉の天下統一前夜、北条家に仕える小次郎は、〝草〟と呼ばれる陰の者。胸に秘めたる大願あれど策謀の渦に翻弄されて……。恋あり野望あり、画期的伝奇時代小説。（佐藤賢一）

た-36-3

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

文春文庫
時代小説

高橋義夫
浄瑠璃坂の仇討ち

宇都宮城主の六十日忌に起きた刃傷は血で血を洗う抗争に。高遠、山形、江戸、次々と舞台を移す抗争は、討ちつ討たれつ二十年——。歌舞伎にもなった江戸三大仇討ちの一つを活写する。

た-36-4

高橋義夫
眠る鬼
鬼悠市 風信帖

歴代藩主の菩提寺に静かに暮らす鬼悠市は浮き組の足軽だが、奥山流の遣い手である鬼には、もう一つ隠された役目がある。藩の重役加納正右衛門から下された密命は——。連作時代小説

た-36-5

出久根達郎
波のり舟の
佃島渡し風秘帖（つくだのわたしかぜひちょう）

何を背負って渡しを渡る。佃島の船頭が見つめる謎、人情、怪異、恋——。鮮やかな江戸の四季の中に、庶民の心意気を描く「徒恋初空吉佃島（あだこいのはつそらきちつくだじま）」「恋慕寒鯉抱佃島（れんぼかんこいだくつくだじま）」など七篇。（細谷正充）

て-5-5

東郷隆
戦国名刀伝

無類の刀剣好きだった太閤秀吉は、権力にあかせて国中の名刀を手中にした。なかに「にっかり」という奇妙な名で呼ばれた一腰があった……。戦国名将と名刀をめぐる奇譚八篇を収録。

と-13-3

南條範夫
一十郎とお蘭さま

藩主の美貌の側室お蘭の方を天上の星とあがめ、忠誠を誓う剣士、一十郎。維新で主従関係がなくなった後も、一途に護り仕えるが……。酷薄な美神に魅入られた男の、究極の愛の物語。

な-6-20

中村彰彦
いつの日か還る
新選組伍長島田魁伝

新選組伍長として幕末の動乱を戦った寡黙な巨漢・島田魁は討幕派との全ての戦いに奮闘した。時に内部の軋轢に苦しみながらも新選組に忠義を尽くし続けた男の波瀾の生涯。（山内昌之）

な-29-8

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

文春文庫　最新刊

佐助の牡丹　御宿かわせみ28　平岩弓枝
富岡八幡宮の牡丹市で時ならぬ騒動

きれぎれ　町田康
時空を超え、乱舞する言語。芥川賞受賞作

槍持ち佐五平の首　佐藤雅美
大名が宿泊する本陣をめぐって二つの藩が対立!?

新選組風雲録　洛中篇　広瀬仁紀
ひょんなことから土方歳三の密偵になった忠助は……

あの日、あなたは　藤堂志津子
チャンスは何度もあった。でも、失うのが怖かった

魔女　樋口有介
彼女は炎に包まれて死んだ。まるで中世の処刑のように

時の渚　笹本稜平
「血」の因縁と悲劇。サントリーミステリー大賞・読者賞ダブル受賞作

ミカ!　伊藤たかみ
子供でいたい。大人になんてなりたくない

母の男言葉　伊集院静
人気エッセイ「二日酔い主義」第八弾、完結

お料理さん、こんにちは　小林カツ代
若き日の台所修業記。秘伝レシピ付き!

少年とアフリカ　坂本龍一・天童荒太
音楽と物語、いのちと暴力をめぐる対話

青の肖像　小松成美
W杯日本代表。選ばれし者の重圧、苦悩、そして栄光とは

いま本当の危機が始まった　中西輝政
今度こそ「破綻」の淵が見えつつある

重大事件に学ぶ「危機管理」　佐々淳行
どんな困難な仕事も、これで対応!

神宮の森の伝説　六〇年秋、早慶六連戦　長尾三郎
この年、燃えていたのは国会だけではなかった

弁護士は奇策で勝負する　デイヴィッド・ローゼンフェルト　白石朗訳
どきついミステリに飽き飽きしている方へ

スロー・ラブでいこう　ルイーズ・ハーウッド　髙山祥子訳
26歳で処女は、〝財産〟か〝障害〟か?

ザ・スタンドI　スティーヴン・キング　深町眞理子訳
『IT』を凌駕するキングの大作、文庫化開始!

キャパその戦い　リチャード・ウィーラン　沢木耕太郎訳
戦場から戦場へ、報道写真家の苦闘の日々